
とある少年の破砕加速 [Breaker sonic]

柊 千終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の破砕加速「Breaker sonic」

【Nコード】

N9105N

【作者名】

柊 千終

【あらすじ】

神のミスにより死んだ主人公。

彼が学園都市に降り立った時、物語の歯車は動き出す。

さあ、始めよう。

are you ready?
ok let's showtime!

神様って時として残酷だね。（前書き）

前に書いた小説が、勉強不足で見るに耐えないものとなったので、前の話は終了という形で、心機一転やってみました。相変わらず駄文ですがよろしく願います。少しでも多くの方に見てもらえると作者としても嬉しいです。

神様って時として残酷だね。

ここはどこだ？

ふと気付くと、僕、風宮月夜は真っ白な

空間の中にいた。何故かポツンと机が一つだけある。

「なんだここ？」

そう呟いた瞬間唐突に目の前の机にスーッ姿の青年が現れた。

「やあ、気分はどうだい？」

そう問い掛けて来る。

「気分がどうかより以前に、質問があります。」

「何かな？」

「まず一つ目、ここはどこだということ。二つ目、あなたは誰何だと言っことです。」

「ふむ、ならば答えよう。一つ目の質問だが、まずここは死後の世界の入り口になる場所だ。二つ目の質問は、そうだな私は君たちの言う神のような存在だ。」

「・・・はい？」

この人は頭があれなのだろうか。

いきなり神様だと言われてもこちらとしては、困惑するしかないのだが。

「OK。百歩、いや、千歩ゆずってあなたの話を信じるとしまし

よう。そうするとアレですか？僕はすでに死んでいるとか言うパターンですか。」

「うむ。」

「……」

「ふざけるなあああ。」

ドンガラガッシャー

「うわ。卓袱台なんていったいどこから？」

「僕が死んだだと。理由を言わんかい。」

「その点については私からお詫びする。全て私のミスだ。実は最近忙しくてな。疲れてうとうとしていたら間違つて死者予定表にコーヒーをこぼして、運命が妙な方向に行つ、グボア、ゲフ。」

自己最高速度のパンチがきれいに顔面に決まった。

「コーヒーのせいで僕は死んだのか。シャレにもならんわ。」

さらに殴りつける。

・・・10分後 そこにはズタボロになった神が土下座していた。
「すいませんでした。」

「で、どうお詫びするつもりかな？」

「はい、当方としては新しい命で新しい人生エンジョイプランと言

うものをお勧めします。」

何か旅行会社みたいなことを言い出した。

「ほう、具体的にはどのような？」

「はい。その名のとおり、素晴らしい人生をお送りしていただくプランでして、もちろん必要なものは当方が負担します。」

今度は某有名通販会社の社長みたいなことを言い出した。心なしか若干声のトーンが高くなっているような気がする。「ということは、また生き返ることができる。」

「はい。ただし元の世界には戻れません。一度死んだ者を元の世界に戻すのは世界のバランスを崩してしまいますので。」

「じゃあ、どこならいいんだ？」

「そうですね。いわゆる漫画やアニメの世界なら。OKです。」

まだで？

「その世界は選べるのか？」

「それはちよつと・・・というよりいつて貰う世界はすでに決まっています。」

ハア？

「因みにどこだ？」

「とあるの世界です。」

あの学園都市とかか……。あまり知らないけど能力がどうか。
なんか面白そうかもな。

「じゃあ能力は物質加速で物質を超高速で操れるようにしてくれ。」
「かしこまりました。それでは移動させますので、こちらの部屋へどうぞ。」

ドアを開けようとしたその時、神の野郎がニヤリと笑った。
するといきなり床が開き垂直落下の状態になった。

「ウオオオオオオ。」

悲鳴は上げながら落ちて行った。

「ざまあみる。神を殴るからだ。思い知ったか、バーカ、バーカ。」

ガキみたいにはしゃいでいた。

「デメエエエ、覚えてろおお。」

次に目が覚めたらそびえ立つビル群がみえた。科学の粋を結集させてつくられた都市。そう来たのだ学園都市に。

神様って時として残酷だね。（後書き）

次回は主人公目線で行きたいと思います。早めに更新はしようと思います。

主人公説定（前書き）

そつえば、主人公の説定をかいていなかったたので、書いてみました。

主人公設定

名前 風宮月夜

年齢 16歳、高校1年生 「赤桜高校」に転校

容姿 赤みがかった黒髪に茶色の目で、長身。なかなか整った顔で上の中といった所。

性格 冷静沈着で行動力がある。基本的に穏やかだが、キレると恐い。恋愛にはうとい。

能力 「物質加速」(オーバーアクセル) 能力内容「触れたものを超高速で操る。純粹に物体のスピードをあげるだけでなく、原子レベルでの加速も制御できる。かなり応用がきく能力。」

技 「空圧散弾」 エアーズ・ショット 空気を高速で散弾のようにに撃ちだす。広い範囲に攻撃が及ぶ、対多人数戦用の技。

「空圧砲撃」

エアーズ・カノン 空気の塊をひとまとめの砲弾のようにして放つ技。

「超速斬撃」 ソニック・ブレード 自分の周りの大気の流を操って放つ技でいわゆる飛ぶ斬撃

「破碎加速」 ブレイカー・ソニック 自身の二つ名にもなっている今のところ最強の技。自分の周りの空間に存在する粒子を強制的

に加速させて、生み出されるエネルギーを一気に解き放つ技。膨大な破壊力を有するが、体力の消耗が一番はげしい。

ちなみに主人公が通う赤桜高校はそここのエリート校という説定です。

主人公説定（後書き）

次こそは本来も話に戻ります。どうか読んでやってください。

出会い

学園市。そこは科学の粋を結集させた街。その町並みのなかをシャツにジーンズというラフな服装をした少年が一人歩いていた。風宮月夜その人である。

「ふう。必要なものはこれくらいかな。」

手にはいくつか紙袋をさげている。転校するさいに必要なものを揃えていたのだ。

この世界に來た時はどうすればよいのか分からず困っていたが、ポケット

の中に何時の間にかメッセージが書かれた紙がはいっていたのだ。

「そちらの世界はどうか？必要な物はこちらで

用意しておいた。戸籍もちゃんと存在するし、住む場所も資金もある。いたれりつくせりだよ。感謝しやがれ。」こういう文面だった。

試しに同封されていた通帳をみると少なくとも0が9はならんでいた。住む場所はどうかというと、これまた同封されていた地図をたよりに行ってみると、8階建てのマンションの一部屋がどうやら僕の住居らしい。むかつくがアフターサービスは万全のようだ。

という訳で今日はいろいろと買い揃えるために街にいるのだ。

「ついでだし、夕食の材料も買っておこう。」

そう呟いてスーパーへ行こうとしていたその時、

「ん？」

何か声が聞こえたような気がしてふと路地裏をのぞくと、そこには中学生ぐらいの女の子が数人のいかにも不良に現在進行形で絡まれている最中だった。

「いいじゃねえかよ。おごるからさ。ちょっと付き合えよ。」

「でも・・・」

だんだんと不良たちもいらつきはじめ、無理やり連れていこうとしている。

「もう見てらんないな。」

月夜は女の子を助けることにした。

「ちよいとごめんなさい。」

「あゝ。何だよ teme は。」

不良たちが一勢にこちらを見た。

当然その目に宿るのは友好的な光ではない。むしろ自分達の邪魔をした乱入者を叩き潰したがつている目だ。

「通りすがりの者だ。」

そう答えると

「だったら、ひっこんでろよ。丸焦げにされてえのか。」

そう言つて不良のリーダー格は手に火球をつくつた。

「やかましい。お前らがナンパしようとしていた子をよくみる。まだ中学生ぐらいじゃないか。いつておくが法律はお前らを許さないからな。というか僕がお前らを許さない。」

「ゴチャゴチャ言つてんじゃねえぞ。」

リーダーが火球を放つ。

側のコンクリート壁が黒く焦げた。

「パイロキネシストか」

「それもレベル3のな。」

ほらほら除けねえと焼け死ぬぞ。つっても除けたらの話だけだな。

「

そういつて下品にわらつた。

「除けられないとも思つたか？」

能力を自らに使用して迫る火球を難なくよける。

「なっ。テメエ能力者だったのか？」

不良の顔が驚きの色に染まる。

「ちょうど良い。僕の実験台になってもらうよ。」

側にある石を拾って演算を開始する。すると石が浮きあがり高速でリーダーの方に向かっていった。

「ほらほら除けないと当たっちゃうよ。」

見事に顔面にぶちあたった。気を失うリーダーの男。

「くっ。テメエ、テレキネシストか。」

まわりの不良達も次々と能力を使用しはじめる。

さっきの男のように火球を発生させるのもいれば、風を生み出すのもいた。しかし攻撃を試る前に不良たちは全て床で気絶することになった。

月夜が能力を自身に使用し、全員の腹部に加速させた拳を叩きこんだのだ。

「やれやれ、終わったか。さて、大丈夫だった？」

そういつて女の子をみた月夜の顔が今日一番の驚に包まれた。

その長い黒髪、その顔。

月夜は出会った。「佐天涙子」に。

・・・涙子side

「私、助かった・・・の？」

「

街を？いている途中不良の集団にからまれて、もうだめだとおもった時

目の前の不思議な青年に助けてもらった。

「ありがとうございます」

そういおうと口を開いた時、青年の顔が驚きに染まっているのに気がついた。

「あゝ？」

「ああ、すまない。何でもないよ。それよりケガはないかい？」

そう聞いてくる。

「はい、ありがとうございます。おかげで助かりました。よければ名前を教えてくださいませんか？」

お礼がしたいので。」

「いやいや、名のるほどの者ではないよ。ただあのまま見過ごすのは人として、どうかなと思ったんでね。」

「うわあ、良い人だ。」

その時だ。

「ジャッジメントですの。通報をつけてまいりました。」

この声を聞いた瞬間

「ヤッベ」

その青年は小さくそう呟と、一瞬でその場からきえた。

「テレポート？」

そう思った。

「名前聞かなかったな。」

本当に不思議な青年だった。いくつも能力をつかっていたようだし、聞きたいこともたくさんある。

「また会えるかな。」

この後すぐに再会するだろう事を涙子はまだ知らない。

新たな超能力者（前書き）

今回ちょっと短めです。そういえばお気に入り登録が10件を越えました。他の皆様に比べたらまだまだですが、とても嬉しいです。お気に入り登録してくれた方々ありがとうございます。どうぞこれからもよろしくお願いします。

新たな超能力者

あの出会いの翌日、月夜は赤桜高校に来ていた。今日からここに転校するのだ。

「さて、職員室はどこかな？」

真新しい制服に身を包んだ月夜が、廊下を歩いている。

「お、あつたあつた。」

職員室のドアを開き

「すみません。今日からここに通わせていただきます。風宮月夜です。」

すると1人の若い女性の先生が現れた。

「あら、あなたが新しい生徒の風宮君ね。私はあなたの担任の桐谷橙子と言います。どうぞよろしくね。」

「どうも、こちらこそよろしく願いします。」

「それじゃ、これから教室の方に案内するから呼んだら入ってきてね。」

そついつて教室の中に入っていった。

なにやら話しているようだが外ではよく聞こえない。

「それじゃあ、入って。」

教室に入った瞬間、クラスのテンションが一気に上がった。
特に女子のほうからは友好的な視線を多々感じる。

「どうも、風宮月夜と言います。これからどうぞよろしく願います。」

それから休み時間ごとに質問責めに合い、それに律儀に答えていくため、若干疲れたのは言うまでもなく。そんなこんなで放課後、担任の桐谷教諭から呼び出され何事かと行ってみると、書類に書くのシステムスキャンに必要だから今から臨時の身体検査を行うということ。

そういうことで案内されたのが巨大な体育館だった。

「は。でつかい体育館。金持ち校はすごいな。」

などと考えている内にどうやら測定準備が整ったようだ。月夜が案内されたのは巨大な体育館の一室。周りをコンクリートで固められ、前方に、分厚い鉄の壁がある殺風景な部屋だった。

「とりあえず、あの鉄の壁に向かって能力を発動してみてください。」

その声に従って、そばにあった鉄球の群れに向かって演算を開始し始めた。

二階にはおそらく部活生だろう。数十人ぐらいの人が見物していた。

「それではお願いします。」

そう言い終わった次の瞬間、鉄の壁が轟音をたてて、破壊された。

月夜以外の人々は驚きの表情を顔に貼り付けたまま沈黙している。それもそのはず、鋼鉄の壁がまるで紙を裂いたようにボロボロになっているのだから。種を明かすと、鉄球群を超音速で飛ばし、その強大な衝撃波と、鉄球の純粋な破壊力でここまでの事をしたのだ。当然並大抵の事ではない。

いまだ沈黙が支配する空間で測定器が結果を淡々と読み上げる。

結果

音速到達過程 0・001秒

加速制御率 99・9999%

能力干渉率 99・9999%

連射力 100/sec

総合評価 Level 5

数瞬の間を置き

「ウオオオオッ!!」

歓声がもれる。

新たな超能力者が現れた瞬間だった。

新たな超能力者（後書き）

次回は多分原作介入すると思います。週一で投稿します。

再会（前書き）

やっと原作介入です。主人公転生者のくせに、全然登場人物知らないじゃないかと思ってるかた。すいません。こつやつた方が、話が作れるので、すいませんがご容赦ください。

再会

平日の学園都市だが、昼間から学生の数が妙に多い。そう、今日は身体検査システムスキャンの日であり、授業は昼までで終わりなのだ。

その学生達の中にはもちろん月夜もいる。

しかし、月夜の場合身体検査システムスキャンはすでに終わっているので、特にする事も無く、目下ヒマしている所である。

「さて、どうしようか」

そう思っている時、ふとそばに張られているポスターに目がいった。

「ヘエー。クレープね。なんか無性に食べたくなってきた。」

そういうことで現在クレープを買いにとある公園に来ている。

「ん。なになに、先着百名様に限りゲコ太ストラップをプレゼント？・・・うわーいらねー。」

そう言いつつ列にならんだ。後ろには中学生ぐらいの女の子の集団が並んでいる。その中の1人はやたらそわそわしている。自分の番が来た。

「はい。ゲコ太ストラップ、最後の一個です。どうぞー。」

ドサッ

後ろで何かが落ちるような音がした。

何気なく見てみると

さっきのそわそわしていた女の子が、両手について倒れ込み、こちらのストラップを涙目で見つめている。もしかしてこれが欲しいのだろうか？

「あのー。良かったらこれ要ります?」

一瞬でその子の目が輝いた。

「いいの?」

「どうぞ」ぶっちゃけ哀れでしょうがないです。

その子にストラップをやってから、さてクレープを食べようとした時、ふと違和感を感じた。

「何であの銀行平日の昼間からシャッター閉まってるんだろ?」

何やら嫌な予感がする。

そしてその予感は的中することになる。

ドオオオンッ。

爆音とともにシャッターが破壊され、中から数人飛び出してきた。

その服装からして銀行強盗の類だろう。

どうしようか迷っていると、ツインテールの女の子が現れた。その女の子はあつという間に強盗達を無力化した。

「こりゃ、手を出す必要はなかったな。」

その時

「何だお前。ちょうどいい。来い。」

「止めて。」

男の子を連れて行こうとする男と、それを防ごうとする女の子の組み合わせが見えた。

業を煮やしたらしく男が女の子の顔面に蹴りを入れようとしている。

「まずい。」

止めるために自身に能力を使用する。

周りの世界全てがスローになる。

この状態なら100メートルを1秒で走りぬける事が出来る。
当然すぐに着く。

パシッ

女の子に当たる直前で足を受け止めた。

「何だデメエ。いったいどこから来やがった。」

「人質を取ろうとする卑怯な行為。挙げ句の果てには女の子に手をも上げようとしたな？ さすがの僕も頭にきたよ。」

「うるせえ。すっこんでやがっ、

ズドドドン

加速した拳を一度に10数発叩きこんだ。

鈍い音とともに吹っ飛ぶ男。

そばの女の子も驚いて固まっている。

「畜生。なめやがって。ひき殺してやる。」

最後の強盗が車で突っ込んで来た。

「エアーズ・カノン
空圧砲弾。」

空気の塊が一直線に飛び、車の下部分に直撃した。

ズドン

跳ね上がり、横転する車。命はあるが、気絶している強盗犯。

「ふう。終わった。

平気かい。」

振り向くと、そこにいたのは、いつぞやの不良から助けた女の子だった。

その女の子も

「あ！あの時の。あなたいつたいどんな人なんですか。さつきも急に現れたかと思ったら、人は吹っ飛ぶ、車は吹っ飛ぶ。もう訳がわかりません。」

いつのまにやらさつきのツインテール少女に、ゲコタストラップの女の子、それともうひとり頭に花の髪飾りをつけた少女がいた。

「いつたい。あんた何者よ。」

ゲコタストラップの少女が問いかける。

「ちょっと、ご同行願えますの？」
ツインテール少女が言う。

「もしかして、風宮月夜さんですか？」

花の少女が言った。

「何、初春さんの知り合い？」
と、ストラップ少女が聞く。

「知らないんですか？昨日新しい8人目のレベル5が現れたことは知っていますよね。それがこの人風宮さんなんです。」

赤桜高校1年生。

能力は物質加速「オーバークセル」のレベル5で触れた物、見た物の運動速度を原子レベルで操ることが出来るそうです。二つ名は破砕加速「ブレイカー・ソニック」その威力と能力の稀少さから序列は3位ですよ。」

「3位？と言うことはあたしより上ってこと？面白いじゃない。あんたあたしと勝負しなさい。」

悔しいのか半涙目でそう言ってきた。

「イヤです。」

コンマ1秒の即答だ。

そしてすぐに能力を最大活用して逃げた。

「待ちなさいよ。絶対勝負してもらっわよ。」

これが元3位の電撃使い「エレクトロマスター」

もといビリビリ戦闘狂との追いかっこの始まりになる。

再会（後書き）

次回はビリビリとの闘いです。能力応用のアイデアをたくさん出す予定です。

感想待ってます。

お叱り歓迎です。どんなことでもいいのでよろしくお願いします。

いざ対決（前書き）

総合アクセス8000件突破。こんな稚拙な文書を読んでくださる方がいるなんて嬉しい限りです。

いざ対決

「おわあ、危なー！」 足元で電気の槍が爆ぜる。

現在の状況を説明するには時間を20分ほど遡る必要があるだろう。

「あゝあ、疲れた。」

その時月夜は学校を終え、家に帰っている所だった。

1日を終え、さあ帰って飯食って、風呂入って、テレビ見て寝よう。
なんて平和に考えながら、家路を急いでいた。

「ん？」

誰かがマンションの入り口に立っている。

近付くにつれ、その立っている人物の正体が分かって来た。

「見つけたわよー!!」

開いた口がふさがらない。

「おまつ、何でここに。」

「決まってるじゃない。あんたと勝負するためよ。」

「そんな事を聞いているんじゃない。どうしてここが分かったんだ

と聞いているんだ!!」

「そんなもの書庫^{バンク}で調べたに決まってるじゃない。」

「嘘つけ。あれじゃ住所まで分かる訳ないだろ!!」

「私の能力を何だと思ってるの。ハッキングぐらい簡単にできるわよ。」

「世間ではそれを犯罪と言っただぞ。」

「あゝもう、ごちゃごちゃとうるさいはね。とっとと私と闘いなさい!!」

「断る。」

脱兎のごとく逃げ出す月夜。

「あ、ちょっと待ちなさいよ。」

・・・で現在に至る。

「お前今、僕を殺そうとしただろ。」

「あんたが逃げようとするからでしょ。」

「それだけで殺そうとするか、普通。」

「だからとっとと私と勝負しなさいよ。でないと、そろそろ本当に当てるわよ。」

「分かった、分かったから、もうやめろ。」

正直あれが当たったら、冗談抜きで命が危ない。

「やっとその気になった？」

「ああ、いいだろう。但し、場所を変えるぞ。下手したら一般人を怪我させかねない。特にお前が。」場所は変わって、とある土手。ここなら人気はないし巻きこむ心配はないだろう。

「覚悟はいい？」

その言葉と同時に電撃槍が飛んできた。

「普通そういうのってやる前に言わないか？」

そう突っ込みながらギリギリで交わす。

「やるわね。ならこれならどう。」

今度はさっきより量も大きさも別格の電撃槍が空気を切り裂いて、突っ込んで来た。

「さすがにこれを全て交わすのは難しいな。なら」

月夜の眼前に炎の壁が現れ、全ての槍を飲み込む。

「なっ、何なのよそれは。あんた本当に何者なの？」

驚きの表情を隠せない美琴。

「教えようか。これは空気中の粒子運動を加速させて生み出した熱エネルギーで作りあげた物さ。」

原子レベルで操るとなると、かなり複雑な演算が必要になるはずだ

が、月夜は平然としている。
初めて美琴の背中に冷たいものが流れた。」

「ちなみに僕の能力は何も加速の一方通行ではない。応用で粒子運動を固定するとこんな事も出来るんだよ。」

そう言つて、指を鳴らすと、美琴に向かって氷の壁が迫っていく。

「なめないでよ。」

そう言つて、地面に手を着くと、何か黒い物が集まり、鞭のような物を形成した。それが一瞬で氷の壁を砕き、月夜の方へ向かつていく。

とつさに土を巻きあげ、高速回転させて、遠心力でそれを弾き飛ばす。

「しまっ」

その隙に美琴は月夜に近寄り、今度は黒い物を剣の形に変え、切りかかつて来る。

「砂鉄で作った剣よ。ただ、刃の部分は振動しているから、当たったらちよつと怪我するかもね。」

「そんなものが当たつて、怪我ですんだら僕は奇跡を起こした人間だね。」

自分に迫る剣を炎を生み出し、防ぐ。砂鉄が熱に耐えきれなくなつて溶け出した。それを見た美琴は、剣を離して月夜から距離を置く。

「それなら、これで決まりよ。」

ポケットからメダルを取り出し、電磁誘導を利用し、射出する。そう、美琴の異名にもなっている、電磁砲「レールガン」だ。音速を超える殺人兵器が、月夜を貫こうとしている。

嫌、普通なら当たったら、間違い無くミンチになるだろう。

だが、頭に血が昇っている美琴にそういう判断力は皆無であった。

月夜は反応出来ないでいる。命中する。

美琴は勝利を確信した。そう思った瞬間、月夜の方から、一筋の閃光がほとばしり、レールガンに真っ直ぐ進んで行き、それを相殺した。

「いったい・・・何なのよ・・・今の。」

その問いに答える月夜。

「荷電粒子砲というのを知ってるかい。電子や他の粒子を加速させて撃ち出す兵器のことだよ。まあ、まだ実用化はされていないけど、原理としてはそれと同じだ。」

「そんな・・・なら今度は手加減無しよ。」

今度は全エネルギーを使った一切手加減無しのレールガンが月夜を襲う。

それでも結果は一緒だ。また相殺された。

「さて、お仕置きの間だ。」

そう言って、美琴に近づく月夜。その目には怒りの色がある。

美琴は気づいた。

自分が月夜に向かって怒りのままに、殺人的な攻撃を繰り返したことに。

その上、自分は電池切れで動けない。

つまり何をされても、抵抗出来ないのだ。

炎を生み出した手を振り上げる、月夜。

初めて恐怖を感じた。

「ヒッッ」

しかし美琴を襲ったのは頭に軽い衝撃だけだった。

「あんた、何で・・・？怒ってたんじゃなかったの？」

「怒ってるさ。だから今、拳骨をしただろう？」

「でも、私あんたを殺そうとしたのよ。」

「それは僕が憎くてかい？」

「そんなわけないじゃない。」

「ならいいや。もし君が僕を心の底から殺そうとしたのなら、僕は君を敵とみなし全力で叩き潰した。でもそうじゃないのならこれで十分さ。それに可愛い女の子に手をあげるような、ゲス野郎じゃないからね、僕は。」

「なっ、可愛いっ」

一瞬で美琴の顔が真っ赤になった。

「さてっ。帰ろうかな。」

そう言っつて、美琴を抱き上げる。俗に言っつお姫様抱っこというやつだ。

美琴の顔が更に赤くなり、もはや茹でだこのようだ。

「ちよっ、何するんのよ。」

「その体じゃ1人では帰れないだろう。送っつていっつてあげるよ。」

「それは嬉しいけど」

「ん、何か言っつた？」

「何でもない。」

それから10分ほどして、

「この辺りでいいだろう。あとはルームメイトに頼んで迎えに来て貰え。見つからないように入ることは出来るけど、そのぐらいスピードを出すと、君の体が持たない。」

「じゃあ、僕はこれで」

「あつ、ちょっと待ちなさいよ。」

「何？」

「携帯電話を貸しなさい。」

「何で？」

「いいから早く貸しなさい。」

「????」

携帯を渡すとアドレス帳に自分のアドレスを登録して返した。

「なぜに？」

「再戦する時に連絡するためよ。」

「いや、もう戦う気ないし。」

「いいから」

疑問に思いながら、携帯を受けとる月夜。

「お前顔赤いぞ。熱があるんじゃないか？」

そういつて、手を美琴の額に置く。

「熱なんてないわよ。」

「あつ、更に赤くなった。本当に大丈夫か？」

「大丈夫だつて」

「そうか。まあお大事に。じゃあ。」

そう言つて歩き出す月夜。

全然気づいてないようだ。この鈍感男は。ちなみに美琴はそのまま
ポーツとしていて、夜風に当たりすぎたようで本当に風邪を引いた
そうだ。

いざ対決（後書き）

次回は来週あたりに投稿します。感想お待ちしております。

とある少年の邂逅（前書き）

テスト等で遅くなりました。そういったP V数が20000件、ユ
ニーク数が4000件を突破しました。有難うございます。

とある少年の邂逅

日曜日の夕暮れ月夜は、夕飯の買い出しに行っていた。その帰り道、闇に染まりつつある空を見上げ、

「平和だ。こののんびりとした時間は幸せなものだなあ。」

なんともなしに呟いた。

その時、その呟きに対抗するかのように後ろから

「不幸だああああ」

と言う絶叫が聞こえてきた。

後ろを見ると、1人の少年が全速力でこちらに走ってくる。

少年の後ろには少なくともお友達には見えない、柄の悪い方々が、口々に罵りながら走っている。

「ちょこまか逃げやがって、この腰抜けがあ。」

「ぶっ殺してやる。」

「デメエ、待てこらあ。」

「ぶっ殺すと聞いて止まるほど、上条さんは優しくありません。」

そう、この少年何をかくそうあの道を歩けば不幸を呼び寄せる、三

スターアンラッキー。上条その人なのである。

そのまま上条は、月夜の横を通り抜け、走っていく。それに数秒おくれて不良の方々。

「さあ、どうする。

あのまま逃げられるとは思えない。助けに行くか、とりあえず様子見だな。」

そう言って能力を弱めに使用し、ちよつと足が速い程度にして、彼らの後を追った。ここはとある路地裏。

予想通りと言うべきか、上条は追い込まれていた。逃げようにも、後ろは行き止まりというベタなおまけ付きなので逃げられない。

「くそ、どうする」

焦っている上条とは裏腹にニヤニヤ顔の不良たち。

「やっと追い詰めたぞ、クソガキ」

一斉に襲いかかる。

「チクシヨウ、こうなったらやるだけやってやる。」

上条が覚悟を決めたまさにその瞬間。

「あゝあ、思った通りだね。」

場違いに能天気な声が路地裏に響いた。

現れたのは、ヒーローと呼ぶべきか、野次馬と呼ぶべきか、とにかく月夜がそこにいた。

突然現れた乱入者に

不快感もあらわに不良たちが騒ぎだす。

「なんだ、テメエは」と不良その1

「テメエもボコられてえのか？」と不良その2

同じような事を口々に言い出す、その他ども。

「誰か知らんが、危ないから早く逃げろ。」と不幸少年。

そんな事は全く聞いておらず、

「お前ら、恥ずかしくないのか。1人によつてたかつて、これじやケンカじゃなくてリンチだろ。まったくなんでここにはお前らみたいなの、バカどもばかりいるのかな。」

その言葉に不良共がキレた。

「ぶつ潰す。」

真つ先に殴つてきたそいつを軽いステップで交わし、比較的手加減少なめのパンチを顔面に叩きこむ。

その一撃で沈めた。

「その人、1人では大変だろう。助太刀するよ。」

「悪い。見ず知らずの人、助かった。」

そう言いながら、近くにいたやつを殴り倒す当麻。

一斉にかかってきた不良共をなんとか倒した月夜と当麻。ところが、不良の1人が援軍を呼んだらしく、さらに数十人ほど、なだれ込んで来た。

「これは不味いんじゃないか？」

「問題ない。本当にバカな奴らだ。こんな狭い場所にあんな大人数で来るなんて。」

そう言っただけを浮かべる月夜。月夜が足で大きく地面を踏みしめると、コンクリートの地面に地割れが走った。

コンクリートの原子を加速、衝突させて、お互いに破壊させたのだ。

と言ってもこれ自体に攻撃能力はない。

単に不良共を逃げられなくしたただけだ。

本当の攻撃はこれからである。

「エアーズ・ショット
空圧散弾」

その吹きとともにひとまとめとなって吹っ飛ばす不良集団。

「ふう、ひとまず一件落着かな。」

「お前、一体何者なんだ。」

「風宮月夜。平凡な高校生さ。」

「平凡ね。なんか嘘臭いが、とりあえず助かったよ。俺は上条当麻、よろしく。」

「ああ。」

握手を交わす2人。

全てが終わったちょうどその時。

「ジャケット風紀委員ですの。通報を受けて参りました。おとなしくしていただきますの・・・?」

語尾が疑問形になったのは一様に気絶している不良集団を見たからである。

絡まれていると言われた少年を見ると

その少女、白井黒子は呆れたように溜め息をついた。

「またあなたですの?、まったくいい加減にしてほしいですの。今日という今日は、同行していただきます。」

「だが断る。」

猛スピードでその場所から脱出する月夜。「あつ、ちょっと。」

「あーあ、また逃げられましたわ。」

「またって、お前あいつが何者か知ってんのか？」

「あら、もうひとりの少年と言うのはあなたでしたの。」

「そんなことどうでもいい。一体あいつは何なんだ？」

「そうですね。新しいレベル5の存在は知っていますか？」

「ああ、ニュースでも騒がれていたからな。」

「そのレベル5があの方ですわ。序列は3位。お姉さまにも勝ちましたし。」

「美坂に？そんなすげー奴なのか？」

驚く当麻。

「何かあいつにはまた会いそうな気がするな。」

この予感現実のものとなる。

とある少年の邂逅（後書き）

次からちよつとだけ原作に入ります。
感想待ってます。

虚空爆破（前書き）

虚空爆破への繋ぎです。

虚空爆破

「連続爆破事件？」

「そうですね。ここ最近頻繁に起こっています。」

ここは風紀委員第177支部の一室。
月夜と黒子が話している。

なぜ月夜がここにいるのか？それはついさっきのことだ。
下校途中なぜか黒子に出会い、逃げようとしたが、

「そう何度も逃がすとお思いですか？」

つてな感じで強制瞬間移動させられここにいると言う訳だ。
なぜ、ここに来させられたのか月夜が理由を尋ねるとさっきの答え
が返ってきたと言うことだ。

「その事件は知っている。かなり騒がれているからな。で、何故
僕をここに連れて来たのかまだ聞いていないが？」

「そのことですの。単刀直入に申します。私たちに協力していただ
けませんか？」

顔を詰め寄りながらそう言った。

そのあまりの剣幕にちよつとびびった月夜は思わず

「いいよ。っとー、今のなし」

「危ない。危うく面倒な事になる所だった。」
そう心の中でつぶやく月夜。

「なぜですか？」

「その言葉そっくりそのままそちらに返そう。」

なにしろ何の説明も聞いていないで、あっという間にここへ連れて来られたのだ。訝しむのも当然のことだろう。

「あなたの力が必要何ですの。今風紀委員は人手が足りない上に、
手がかりがほとんどないので犯人の目星めついでいないんですの。」

「なるほど良く分かった。そこで僕をチョイスしたのは？」

「先ほどもいいましたとおりあなたの持っている能力が必要何です。」

「Why. なぜ？」

「この爆弾の原理がアルミを起点に重力子を加速させ、それを一気に放出することで、爆発させる。
要するにアルミを爆弾に変えるんですの。」

「分かった。僕的能力は物質の運動速度を原子レベルから操ることができる。つまり重力子の加速を停止させ、爆弾を不発にすることが出来ると。」

「そういうことです。まずは人的被害が無いのが一番ですから。」

「それって僕が危なくないか？」

「勿論、タダと言うわけでは有りませんわ。しかるべき報酬はお払います。」

「いや、金はいい。間に合ってるから。そうだな、何でもいいのか？」

「ええ、私たちの力の範囲内なら。」

「そうか。・・・なら、この事件が解決したら、報酬を貰おう。」

「ということは・・・。」

「ああ、いいよ。手伝おう。」

「ありがとうございます。助かりますの。」

「だから顔が近い。」

「あつ、失礼しましたわ。」

「それではまた後日連絡しますわ。連絡先を教えてくださいても構わなくて？」

「ああ、ほら。」

携帯番号を書いた紙を渡す。

「ありがとうございます。それでは家までお送りしましょう。」

「送ると言っても結構とおいぞ。」

「ええ。行きますわよ。」

その言葉と同時にいくつか景色が流れ、数秒で自宅マンション前についた。

「ねえ、思ったんだけど何で僕の家知ってるの？」

「どっ・・・どうでもいいではありませんかそんなこと。」
何故かとても慌てた感じでそう答える。

「それより、協力頼みましたわよ。」

「ああ、分かってる。出来るだけのことはするよ。」

そう言くと黒子は頷き

「それではまた。何かあったらすぐ連絡しますわ。」

「おい黒子!!」

「何ですか？」

「頑張れ」

「はい!!!」

若干顔を赤くしてそう答える。

ヒュンッッ!!

その音とともに月夜の前から消えた。

虚空爆破（後書き）

お気に入り登録が59件。ありがとうございます！

虚空爆破くくく（前書き）

今回ちょっと短くなりました。

ちなみに新キャラが出ております。

実は彼結構重要な役だったりします。

詳細はこれからの話で分かってきます。

虚空爆破くっく

キンコーンカーンコーンッ

今日の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。次々と帰り支度を済ませた生徒が教室を出て行くなかで1人月夜だけが机に突っ伏している。

理由は簡単、単に授業のハードさにへばっているだけだ。

（0時限って何？

時間にカウントされないってずるくない？何でこんなにきついんだよ。ああ、これだけで死ねるな。）

一応月夜が通っている赤桜高校はそこそこのエリート校で通っているため、授業の多さは普通じゃない。

（だがこれで1日が終わった！！これで明日の終業式が終われば夏休みだ！！フフフフフッ 待ってる夏休み。i t・s m y season ヒャッホー）

なんだか変なテンションで自分を誇負している彼に

「おい。どうしたんだ。ニヤニヤしてなんか危なくみえるぞ！」と話しかけてくる1人の男子生徒がいる。どうやら変なテンションが顔にも出ていたらしい。

「ああ、なんだ空かなんか用？」

「おいおい。ずいぶんそっけないな。」

と苦笑いを浮かべる

彼は戦^{いくさ}辺^へ空^{そら}

月夜の同級生で友人である。

ちなみにかれは金髪にピアスに鋭い目で

一見すると不良だが実は成績が良く、性格もいいので結構人気がある。

「用っていつかなんていうか、お前今日ヒマか？」

「まあ、ヒマっちゃヒマかな。なんかあるの？」

「今から、服でも買いに行こうかなと思ってただけどお前も来るか？」

「おっと。デートのお誘いか。いいけど、僕にそっち系の趣味はないからな。」

「安心しろ。俺にもない。」

などと軽口を叩き合いながら連れ立って学校を後にする。

場所は変わってここは洋服店「seventh mist」

品揃えが豊富でなかなか人気がある店だ。今も若者で賑わっている。空と一緒に

洋服を見て回っていると、その横を通り過ぎる少年がいた。見た目高校生位でこの店にいても、全く不自然ではない。

そう見た目だけは・・・

月夜の目を引いたのはそこではない。彼の目を引いたのはその少年

が持っているぬいぐるみだ。およそ年齢には似つかわしくない。そこに違和感を感じたのだ。

「なあ。空。なんかあいつ変じゃないか？ぬいぐるみなんか持って。」

「アッ？まあそんな奴もいるだろ。」

空は服を選ぶのに夢中でろくに話を聞かず、生返事しかない。

「そうだね。」（まあそう気にするほどでもないか）

その時はそう納得した。

虚空爆破くくく（後書き）

次がクライマックスです。

前にも言った通りこの話が終わったらオリジナルストーリーに入る予定です。

虚空爆破くっく（前書き）

次でクライマックスと言いながら話が続いてしまいました。

俺のバカ・・・

虚空爆破くく

「クッククク」

1人笑う少年、手にはぬいぐるみを持っている。月夜が先ほど見かけた少年だ。

「これで、新しい世界が来る。僕を助けなかった無能の風紀委員はもう要らない。僕が僕を救うんだ。」

そう呟きながらぬいぐるみの中にスプーンをねじ込み、演算を開始する。

爆発まで後30分・・・

場所は変わって、ここは「seventh mist」の二階。そこには

（まだかね。空の奴服選ぶのに一体何分かかるんだ？）

空に付いてきた事を後悔し始めている月夜がいた。

「あゝ暇。・・・んっ？あの子たちは。」

その時月夜は佐天と初春を見つけた。

向こうもこちらに気づいたようで手を振りながら、小走りで向かってくる。

「偶然ですね。お一人ですか？」

「いや、連れがいるんだがあまりにも長くてね。もう待ちくたびれたよ。」

「君達二人かい？」

「いえ。御坂さんも一緒ですよ。ほらあそこに。」

見ると、周りをやたら気にしている御坂がいた。

（なにやってんだあの人、めっちゃ挙動不審なんだけど。）

「それじゃあ、私たちはこれで。あつ、そうだ、後で合流しません？お友達も一緒に。月夜さんのプライベート興味あるし。」

「かまわないよ。じゃあまた後で。」

そう言つと

「絶対ですよ！」

と、去つていった。

御坂の方に目をやるとまだ怪しい動きをしている。そのあまりの怪しさに思わず近づくと

「「何やってんだお前？」」

と突っ込んだ。

そしてその突っ込みと全く同じ言葉を放った少年が横にいた。

「んっ？ あっ！ お前はあの時の！！」

その特徴ある髪少年、上条当麻が此方に気づいた。

「やあ。久しぶり。」

「イヤーこんな所でまた会うとはな。偶然偶然。助けて貰ったお礼にこの後なんか奢ろうか？」

「いやゝいいよ。連れがいるし、先約もある。それに君あまり金ないだろ？」

「うぐっ！！まあ確かに。」

「寧ろお近づきの記しに僕が今度なんか奢るよ。」

「マジですか！！喜んで。タダより良いものはないってね。」

（切り替えハヤッ！）

和気あいあいと話す2人に

「なっ・・・なんであんなたちがここにいるのよ！」

子供っぽいパジャマを試していた所を見られたからか、顔を真っ赤にして大声を出す御坂。

「ちょうどいいわ、あの時の決着を今ここで。」

「おい。僕との決着はついただろう！」「あんなじゃないわよ。そのツンツンに言ってるの。」

「ツンツンって言うな、ビリビリ。それにこんな所でやるつもりか？迷惑過ぎるだろ。」

「うつ・・・」

口ごもる御坂

「お兄ちゃん。」

何やら向こうから子供の声が聞こえてきた。目をやると小学校低学年ぐらいの女の子がニコニコしながら走り寄ってきた。

「何だ当麻。」

妹いたんだ。」

「呼び捨て！？いや妹じゃないよ。」

「じゃあもしかして・・・」

「何だその犯罪者を見るような目は！！」

「皆までいうな。そうか残念だよ。君はそんな性癖の持ち主だったのか。今風紀委員辺りに通報するからな。正直に言っただけで楽になれ、僕はいつでも力になるよ。このクズ野郎。」

「さりげに罵倒入ってません。違うつ！！俺は単にこの子をこの店まで案内しただけだ！」

「ふん。分かった分かった。」

「分かってないですよね何故か指が携帯のボタンをプッシュしてるし!!」

必死な様子を見てると哀れに思えてきた。

「冗談だよ」

そして女の子の方を向いて

「君、洋服を買いにきたの?」「うん!テレビで言ってたもん。おしゃれな人はみんなこの店で服を買ったって。私もおしゃれするんだ。」

「そうだね。迷子にならないようにするんだよ。このお兄ちゃんから離れないようにね。」

「うんつ。」

「じゃあ当麻、しっかり面倒みるよ。」

「おつ、おお任せろ。」

「じゃあ僕は戻るわ。」

手を振ってその場を離れ、空の所に戻る月夜。

「どこ言ってたんだよ!」

「お前が遅いから暇だったんだよ。」

「そうか、悪いな。お前は何も買わないのか?」

「ああ。余り無駄遣いはしたくないんだ。」

「何言つてんだよ。金なら腐る程あるだろ。学園都市に1人しかない物質加速のレベル5がさ。奨学金やら何やら入ってんだろ？」

「嫌みな言い方するなよ。お前だって持つてるだろうが。一応レベル3なんだろ。」

「月夜程じゃないさ。まあいいや、用は済んだ。これからどうする？」

「ああ。その事なんだがちょっと知り合いに誘われてな。」そう言った次の瞬間 P r r r r r

月夜の携帯が鳴りだした。

「もしもし。」

「月夜さんですか？」

今学園都市の衛星が急激な重力子の加速を確認しました。」
黒子だった。

焦った様子で一氣に話す。

「落ち着け。場所はどこだ。」

「第七学区の洋服店

s e v e n t h m i s t ですよ。」

「なんだって！！そいつは好都合だ。僕は現在そこにいる。」

「本当ですか？では処理をお願いします。後は初春にも連絡しなくては。」

「初春ならさつき見かけたけど。」

するとさらに慌てた様子で

「なんですって。まずいですわ。」

「どうした。」

そう問うと

「犯人の狙いが分かりましたの。この事件で既に9人もの風紀委員が負傷しています。つまり犯人の狙いは風紀委員ですわ。」

「とすると、次は初春があぶないと。確かにまずいな。だが、なんとかしよう。」

「頼みます。私もすぐ向かいますわ。」

そうして電話がきれた。

その電話を持っている月夜の目には決意の光が現れていた。

そう。誰1人として被害を負わせないと。

ついに月夜が動き出す。

虚空爆破くくく（後書き）

次こそはクライマックスのはずです。

虚空爆破〜4〜（前書き）

頑張りましたー

あー指が疲れた。

虚空爆破 4

『お客様にお知らせ致します。当店は電気系統の故障により、誠に勝手ながら本日の営業を終了致します。またのご来店をお待ちしております。』

店内にアナウンスが流れ買い物途中の客が渋々立ち去っていく。勿論電気系統の故障は真つ赤な嘘でありパニックを起こさない為の措置だ。

今電話を切った月夜に空が言う。

「おい、電気の故障だってよ。ついてねえやな。ん？どうした深刻な顔して。」

「率直に言うぞ。虚空爆破事件は知ってるな？電気の故障は嘘だ。今この店に爆弾が仕掛けられている。ここには危険だ。早く逃げろ。」

「は？マジで？なんでそんな事分かんのか？」

「今、協力関係にある風紀委員から連絡が来たからだよ。」

「ヤバイじゃん。早く出ようぜ。」

「いや、言っただろ。風紀委員と協力関係にあるって。僕は逃げる訳には行かないんだよ。分かったら早く逃げろ。」

「そうか、よく分かんが・・・じゃあいくぞ。気をつけろよ。」

「ああ。」

そう言つて走り出す月夜。その後ろ姿を見つめる空の鋭い目がさらに鋭くなる。それは一瞬の事だがまるで月夜を試すようだった。

~~~~~

「おい月夜。」

誰かが声を掛ける。

「何だよ当麻まだいたのか。早くでろよ。」

「いやあの女の子を見失っちゃってさ。どっかで見なかった？」

「ツツ馬鹿野郎。よく見とけと言っただろう。」

あまりの剣幕に驚く当麻。

「どうしたんだよ。」

「細かい話は後だ。早く探すぞ。」

少女を探して疾走する2人の少年。

「で、何があつたんだよ。」

走りながら聞いてくる当麻。

「この店には爆弾が仕掛けられている。

虚空爆破事件を知ってるだろ。その標的がここなんだよ!!」

「何だつて！ 畜生早く探さないと。」

その時である。どこからか僅かに声が聞こえてきた。「お姉ちゃん。」

見ると前方50メートルほど先に初春と御坂と女の子の姿が見える。

「はい、これ。メガネのお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡してつて。」

そういつて差し出すのはぬいぐるみ。

何だこれとは彼女たちが思った瞬間

ぬいぐるみが形を変え始めた。まるで内側に引っ張られるように圧縮されていく。

「逃げて下さい！あれが爆弾です!!」

そのぬいぐるみを放り投げ女の子をかばうように抱きしめる初春。

御坂が超電磁砲を放とうとするが、焦りで指を滑らせコインをおとした。

「しまっ……」

ぬいぐるみは原型をとどめておらず、保って後数秒と言う所だろう。

間に合わない。そこに居合わせた誰もがそう思った。

その時

圧縮が止まった。

慌てて周りを見渡す御坂たち。その後ろには月夜がいた。

月夜side・・・

前方50メートル。

ぬいぐるみが変形を始めた。このままでは間に合わない。そう思った月夜は能力を自身に使用した。

スローになる世界。その中を駆け抜ける月夜。

周りの物全てがスローになる。これが彼の自分だけの現実だ。パーソナル・リアリティー

「間に合え。」

数瞬で到着し、爆弾に能力を使用する。

「ちつ、まずいな。加速が収まらない。止めておけるのも時間の問題だな。」

~~~~~

「あつ、アンタ・・・」

「話は後だ。今はにげる。止めておくのにも限界がある。」

停止解除まであと3分。

「よし当麻、いけ!!」

最後に当麻が逃げ、これで全員の避難が完了した。

後は月夜が避難するだけだ。

停止解除まであと10秒、9、8、7

・・・0

月夜が店の外に出た瞬間

ドゴオオオン!!

凄まじい轟音とともに爆風が炸裂した。

周りの者は

「すげー爆発だな。」

「怪我人はいるのか？」

などと話しているなかで、月夜は1人裏路地に入っていく少年を見据えていた。「スゴイ、素晴らしいぞ僕の力。もうすぐだ。あと少し数をこなせば無能な風紀委員もみんなまとめて吹き飛ば・・・!!

？」

少年は最後まで言うことはできなかった。次の瞬間後ろからの衝撃に飛ばされてゴミバケツに突っ込んだからだ。

「何だ！？一体何が！？」

後ろを振り向いた少年が見たものは怒気を体中から迸らせた月夜だった。

「よう、爆弾魔。用件は分かるかな？」

「爆弾魔？な何の事だかさっぱり。」あくまで白を切る少年にさらに月夜はいう。

「まあ確かに凄い爆発だったけどね。死者どころかだれひとりとしてかすり傷1つおっていないよ。」

「なっバカな。僕の最大出力だぞ。」

「ほう。白状したな。」

「い・・・いやあまりにもすごい爆発だったから中にいる人たちはとても助からないんじゃないかと・・・」

そっいいながらカバンからスプーンを取り出す。

だが

バシユッ

消し飛ぶスプーン。月夜が投げた石が命中したのだ。彼が使えばこちらの石でも十分兵器としてつかえる。

打つ手が無くなった少年は

「一体何者なんだよ。お前は？」

「ブレイカーソニック破砕加速と言えば分かるか？」

「はっ・・・はは。赤桜の物質加速オーバーアクセルか。いつもこうだ。僕はいつも力でねじ伏せられる。殺してやる。お前らみたいなのが悪いんだ。いつも風紀委員だつて僕を助けてくれなかった。力のあるヤツなんてみんなそうだろうが！！」

「黙れ！！」

少年はビクツとして黙った

「誰も僕を助けてくれないだと。なら聞くがお前は一度でも自分から立ち向かった事があったか？自分でなにもしない人間が他人から助けて貰おうなんて甘ったれるな！！」

それは普段の彼を知る者ならば誰も想像がつかない姿だろう。ここまで怒りを表わにする月夜は珍しい。

「自分を助けてくれなかったから復讐の為にこんな事件を起こしたのか？それはお前を虐げたヤツらと同じことをしている事になる。」

「ち・・・違・・・」

「何が違う。力で罪もない人たちをねじ伏せてるだろう。何が違うんだ。」

そして穏やかに話し掛ける。

「いいか？今は自分が犯した罪を償う事を考える。そして自分から踏み出す事を考える。頑張って頑張って、それでも無理だったら僕の所にこい。いつでも力になるう。」

静かになった少年から嗚咽がもれはじめた。

「助かりましたの。月夜さん。犯人は確保しました。ご協力に感謝します。ところで報酬の件ですが・・・」

「いや、要らないよ。結局爆弾は爆発してしまった。失敗したんだ。」

「ですがここまでしていただいてタダと言うわけには・・・」

「その変わりと言っちゃ何だけど僕を風紀委員に入れて貰えないか？」

「も・・・勿論ですの。願ったり叶ったりですわ。ですが何故？」

「いやあの犯人の話を聞くと低能力者や無能力者は虐げられているらしい。その人たちの助けになりたいなと思ってね。」

通報を聞けばすぐいけるよ。なんてったって僕は学園都市最速だから

らね。」

「そうですか。なら明日から書類にサインをお願いします。」

1つの事件が終わり、1人の風紀委員が現れた。

虚空爆破 4 (後書き)

次から言っていたとおりオリジナルストーリーを始めます。
これからも宜しくお願いします。

とある風紀委員の平凡日常（前書き）

連日投稿です。今回の話ははつきり言って見るに耐えませんか。
思いました

「クオリティー低っっ」て

とある風紀委員の平凡日常

虚空爆破事件から2日後、僕は普通の学生生活をおくっていた。まあそれも今日までだが。風紀委員になつてしまつとどうしても自由な時間が減つてしまう。

因みに書類を書くだけで研修等は免除になつた。レベル5の実力と個人の人間性が評価されたからだ。だがこの書類がめんどくさいのなんのつて、愚痴を言うと20分位たつので割愛するが大変だつた。

今日は最後の気楽な学生生活をエンジョイするため、友人と街に繰り出しているのだ。現在とあるファミレスにいる訳だが、ある人物に遭遇した。同じ高校の先輩にして友人。どういう経緯で知り合つたかと言うと、実はこの人何時もファミレスにいたのだが、僕が行く度にいたのでいつの間にか知り合いになつてしまった。しかも何時間も居座り続けるのだ。いくら24時間営業のファミレスでもいつまでもいられたら迷惑以外の何者でもない。何故いつまでもいるのか話を聞くと帰つてきた答えはたった一言

「帰りたくないから。」

不登校は良く聞くが不下校は珍しい。

僕なんて早く家に帰りたくてしょうがないのに。大体学校なんてストレスしかたまらないし、嫌なことしか（以下略）

とりあえず何時までも居る事は出来ないし、家に1日泊めたのがまづかった。それからというもの頻繁に僕の家に入つて来る。初めて不法侵入されたのが2週間前。泥棒かと思つて警戒して入ると

「よう！」

なんて言ってくるものだから、一発ひっぱたいてやった。

第一ここのマンションはオートロック式なので住人の方から許可しないと入れないはずなのだが、とにかくいた。

しばらくするとその理由が分かった。

「久しぶりに帰ろうかな」

と呟いて壁の方に歩き出しそのまま突き抜けたのだ。

なかなかのホラーだった。外に目撃者がいたら、軽くトラウマだろう。かく言う僕も正直びびった。後々聞いてみるとレベル4の^{ブレイクスルー}物質透過という能力でどうやらトンネル効果を人為的に起こす事ができるらしい。全く奇妙な能力も有るものだ。

長くなったがその先輩「紫藤暁」の側には4人の女の子がいた。

（何だよ。何だ、何ですかア、ハーレムってのが出来てるじゃないですか。）

若干黒いオーラをほとばしらせながらそう呟く。

口調が変わっているのはご愛嬌である。

（こっちは淡泊な青春送ってるってのに楽しそうにしゃがって許せん。僕には出会いが無いってのに。）

補正として月夜にも出会いがあった。フラグだけ立てて回収しない

からそうなるのだ。

まあそれは置いておくとして、その先輩がこちらに気付いた。

「よう、久しぶり！」

「またファミレスにいるんですか？紫藤先輩」

「今、なんか失礼なこと言わなかったか？」

「まさかー。気のせいですよ。」

「そうか。」とところでその周りのお嬢さん方は一体どういう？先輩多趣味な上に手が速いですよねー。」

「違うわ！いつもファミレスにいったらいつの間にか知り合いになつてたんだよ。」

「ふーんそうなんですか・・・！」何気なくその少女達を見た月夜の声が詰まった。

「何者だお前ら。」

誰が見ても普通の女の子達である。

この質問はあまりにも異常で尚且つ滑稽に聞こえるだろう。

月夜自身もそう思っている。

彼にこの質問をさせた根拠はその女の子達の中で一番の年長である
うある女性の

雰囲気異常を感じたからだ。

理屈ではない。ただ確信した。

（こいつは人を殺した事がある。）「あら、あなた見た事がある顔だと思ったら学園都市の新3位赤桜の「物質加速^{オーバーアクセル}」じゃない。」

妙な質問をされたのに平然とそう返す。

対して月夜は警戒心も露わに

「そんな事はどうでもいい。お前たちは何者何だと聞いているんだ。」

紫藤暁はすっかり茅の外である。

「先輩はもう帰って下さい。ちょっとこの人達に話があります。」

「あつ、ああ・・・」

そういつて席を外す紫藤の目に一瞬だが
鋭い光が走った。

それはあの爆破事件の時に空が見せた表情と一緒に物だった。
そして去り際にいった

「気を付けろよ。」

その言葉は何を意味するのか・・・

「さて、もう一度聞く。お前らは何者だ？」

「しつこいわね。」

私は麦野沈利。学園都市の・・・今は5位かしら？これで満足？」

「麦野・・・原子崩し（メルトダウン）か？」

「あら良く知っているわね。」

月夜の緊張が高まるなか、麦野の携帯が鳴った。

一言、三言話して、

「もういいかしら？今から仕事だから。」

「仕事・・・？」

「そう、暗部のね」

「暗部・・・だと？」

月夜は暗部の存在を知ってしまった。

彼はこれをきっかけにある事件に巻き込まれる事になる・・・

とある風紀委員の平凡日常（後書き）

次回から本格的にオリジナル始まります。

這い上がる闇（前書き）

オリジナルストーリー、本格的に入ります。

這い上がる闇

死^{ころ}して、却^{こそ}して、戮^{ころ}して、滅^{ころ}して

．．．．．殺す．．．．．

それがその男の自分の存在を保つ唯一の方法だった。

――這い上がる闇――

月夜が暗部の存在を知ったその同日夜。

ある廢墟に数人の少年達がいた。

其処は誰も人が通らない少年達にとっては最高の溜まり場である。

「いやゝあの野郎が余りにもふざけてやがるから一発蹴り入れてやつたらよ。」

金を出してきたんだよ。まあ貰ってから病院送りにしたけどな。」

「まじかよ。ひでえな。ギャハハハ」

少年達は世間一般で言う所の所謂不良であった。

彼らが低劣な話で馬鹿笑いをしていたそこへ唐突に1人の男が現れた。

まるで夜の闇を切り取ってそのまま形にしたような人間だ。

その男に気付いた少年達は早速周りを取り囲み、お約束をし始めた。つまりカツアゲだ。

「テムエ、どこから来やがった？ここを通りたければ、通行料をだしな。」

「出さなかったら手足の一本位折っちまうぞ！！」

少年達の言葉に男が返した言葉は一言。

「邪魔だ。どけ。」

静かな口調でそう返した。

少年達はここで逃げるべきだった。男は本当に邪魔だと思っただけで素直にどけば何もする気はなかったのだ。

だが、逃げる訳は無くその言葉にキレた彼らは一斉に男に襲いかかった。

「舐めた口きいてんじゃねえぞこら！！」

本来ならここでボコボコにして終わりだったろう。彼らは何時もそうしてきた。

だがそれはあくまで相手が一般人だったらの話だ。

残念なことに少年達のこの行動は彼らの死刑執行書に彼ら自身がサインする事と同様になった。

唐突に本当に突然に始めに殴りかかった少年の肘から先が消し飛ん

だ。

自分の身に何が起きたか理解出来ない少年は自分の腕を見て理解した。

一瞬立って

「うわああああアアアア！」

爆発的な激痛に倒れ込み、悶え苦しむ。

その時初めて男の目に人間らしい感情が浮かんた。それは愉悦であり狂喜。周りの固まっている少年達を見て

「お前らの命ここで強制終了だあ、ギャハハハハハハ。」

狂笑にして恐笑

少年達は初めて恐怖を覚え

「あ、あ、うわああああ！」

逃走を初めたが無駄なこと。

言うなれば音速の戦闘機に素手で挑むようなもの。戦えば叩き潰され、逃げてみずくに追い詰められてやられる。

男は指をくいと上に挙げただけだ。

其れだけで

ズドオオオンッ！！

その轟音は少年達の悲鳴を飲み込み、命さえも飲み込んだ。

赤っぽい肉片が飛散する。

不気味な程静まり返った空間でその男は

「ククク、ハハハハハハハハ！」

つい数秒前までは人間だった、モノ、を乗り越え何時までも笑っていた。

その翌日

「都市伝説う？」

ここは風紀委員第177支部。

今し方胡散臭いと言うことを口調で示したのは月夜だ。

今日は彼の初出勤にして初仕事。

そんな彼を待っていたのは佐天涙子だ。

目をキラキラさせながら、都市伝説なんて眉唾ものの話をしてきた。

「そうですよ。これを見て下さい。夜な夜な歩き回る闇を切り取ったような漆黒の男。って」

「・・・それって只の不審者なんじゃあ。」

「夢が無いですね。」

何か面白そうじゃないですか？」

「いや、そもそも都市伝説に夢って有るのか？」

などと突っ込みを繰り返していると、

「はいはい、関係無い話しはそこまでにして、月夜さん初任務ですわよ。」茶髪のツインテール黒子がそう告げる。

「よっしゃ、で、どんな？」「ええっと、とある廃墟を溜まり場に行っているスキルアウト達の排除、ですわね。」

書類を見ながらさういう。

「ふーん。何か普通だね。まあ良いけど。」

「あくまで穏便にすわよ。」

「分かってるって。」

風紀委員の腕章に腕を通しながら答える。腰には金属製の棒のような物を入れたホルスターを付ける。準備が全て終わり、

「じゃあ、行ってくる。」

数10分後

「一体・・・何なんだよ・・・これ・・・」

とある廃墟にて呆然と立ち尽くした月夜がいた。

彼の目の前には巨大な爆発のようなものでクレーター状になった地面が口を開けている。そして何よりも彼の目を奪ったのは一面に広がった赤黒く固まっている物。その正体を月夜は知っている。

「血液だよな・・・これ。」

そう、その廃墟は昨日の惨劇の場で有るのだが当然月夜は知る由も無い。

「取り敢えず警備員に連絡を。」

冷静さを取り戻した月夜は風紀委員よりも上位に位置する治安維持機関「アンチスキル警備員」に連絡を試みる。

が、次の瞬間

ザヒュッ

という空気を切る音と一緒に鋭い斬撃が彼の体を襲った。

が、

ガキイイインッ

金属と金属がぶつかり合い火花が散った。

月夜が先ほどの棒を構えて立っている。

微妙に振動しているように見える。

棒に振動を与えてその振動を能力を応用して調整し、さしずめ振動カッターのようにしているのだ。

ありえ無い現象に連続して遭遇した月夜だが、彼は冷静さを取り戻し慎重に状況を分析していた。（敵はざっと12人。動きからしてプロだな。さて、どうするか）

絶対絶命の状態ながらも未だ彼はパニックに陥らず、それどころか薄く笑いまで浮かべている。

「取り敢えず、重要参考人として拘束させてもらう。」
その言葉に12人の暗殺者は無言で間合いを詰める。そして一斉に刀を振るった。

「さて、あれを試すにはいい機会だな。」

薄く笑ったままそう呟く。

這い上がる闇（後書き）

次回は新しい技が出ます。

始動する闇（前書き）

題名変えました。以前のはどうもゴロが悪かったので。

始動する闇

（さて、始めますか。）

そういつて演算に集中する

リミットオーバー
「制限破壊」

刹那、月夜の姿が消えた。12人の男達が振るった12の斬撃が虚しく宙を咬む。

予想外の出来事に、
状況を判断する暇も無く次々と地に倒れ臥す男達。

一瞬後、さっきの場所から10メートル程離れた場所へ現れる月夜。

（くっ………）

かと思うと、地にガクリと力無く膝を付く。

（使うにはまだ速すぎた。精々10秒が限界だな。）

頭を抑えながら思考する。

さっきの制限破壊は、演算を二重に行う事で、スピードからパワー
リミットオーバー
その他能力の全てを倍程度に強化する技だ。

だが勿論その力は肉体にかかる負担も倍程になり、多用すれば自滅

する危険性を持ち、正に両刃の剣になりうる危なっかしい技でもある。ふらつく足をどうにか立たせ一息つく。

体もある程度回復したので、気絶している男達を全て拘束した。

（一体何なんだこいつらはこれは強化装甲か？最新だね。ただの犯罪者じゃない。何よりさっきのあの動き。あれは明らかにプロの動きだ。まさかこいつらも暗部とかいうヤツらか？）

「考えたらキリがないな。取り敢えず警備員に連絡を」

携帯を取り出す月夜だが、

次の瞬間、彼は横に飛んだ。

尋常ではない殺気を感じたからだ。

今まで彼がいた空間を巨大な閃光が貫いてゆく。「ツツツ――！！」

猛烈な余波が彼の体を襲う。

（何だ。まさか超電磁砲か？嫌、そんな馬鹿な！アイツがここにいる筈がない。何より僕が襲われる理由がない。一体誰が………）

混乱する頭で閃光が飛んできた方向に顔を向ける。

果たして彼の考えは間違いだった。そこにいたのは超電磁砲ではない。

「何であんたが？」

視線の先にいたのは学園都市第5位のレベル5原子崩し（メルトダウナー）麦野沈利だった。

超電磁砲より遥かに凶悪な能力者が不気味な笑みを貼り付けてそこに立っていた。何故お前が？

その問いには答えず

ただ一つの目的のみを伝える。

「ぶ・ち・こ・ろ・し・か・く・て・い・ね」そして再び不健康極まりない色を持つ巨大な閃光が放たれた。

原子は粒子でも波でもない曖昧な状態ではそこに止まろうとする。その状態の原子を操る原子崩し（メルトダウナー）

正しくは粒機波形高速砲。

鋼鉄をも紙を破るように貫通させてしまう凶悪な一撃。

それが月夜を襲う。

だが月夜からはその原子崩し（メルトダウナー）に似た一筋の光線が放たれる。

その名を荷電粒子砲

電子を始めとする粒子を加速させて放つ一撃。

ドゴオオオオツッ！！

最強の攻撃どうしがお互いを食い尽くさんとぶつかり合う。最強の一撃どうしはお互いに相殺しあい、周りに爆煙を巻き上げ消滅した。爆煙の向こうから更に閃光が放たれる。

荷電粒子砲の連射で対応し、煙りに紛れて一気に距離を詰める。

（見たところこれは遠距離戦向きだ。接近戦では対応出来ないだろう。）

そのまま麦野の腹を狙い加速させた拳を打ち抜く。

別に月夜は油断していた訳ではない。

ただ予想していなかったただけだ。

自身の高速の拳を止められるなど。

パシィィィッッ

乾いた音が響きその拳は当たる寸前で止まっている。

「なツッ！？」

驚愕するヒマも与えず、麦野は月夜の腹部に蹴りを入れ、続けざまに胸に拳を打ち込む。

「あ・・・が・・・ツッ！？」

2つの衝撃を同時に食らい、酸素が全て吐き出され呼吸が止まった。

「な………に……？」

喘ぎながらそう漏らす。「接近戦に持ち込めば勝てるでも思ったかしら？」残忍な笑みを浮かべる。

「甘いわね。あなた暗部って何なのか知ってる？危険な仕事よ。正に命がけのね。これ位出来ないとい日だって生きられない。」

そう言いつつ更に腹部を蹴りつける。

ゴフツツ

月夜の口から赤い液体が流れ出す。

内臓にダメージを負ったようだ。「くっ………そ………」

麦野はただ笑う。

面白い物を見つけて遊ぶ子供のように。

ただ笑う。

獲物を食い千切る狼のように残忍に。

（コイツはヤバイ。人を殺す事をこんなに楽しそうに笑うなんてまともじゃない。）

朦朧とする意識の中月夜の生存本能は研ぎ澄まされていく。

（まず、ダメージを消すことからだな…）

肉体の奥深く細胞レベルで能力を使用する。

細胞再生を加速させ、破れた部分に膜を作る。応急処置を終え、再び距離を置く。

「あら？まだ動けるの？案外タフなのね。」

「あまり舐めないで貰おうか。個々からは本気でいかせて貰うぞ！」

「いいわよ。現代風味の面白オブジェになりたくなかったらせいぜい私を楽しませなさい！」

そう返すや否や原子崩し（メルトダウン）を放つ。

その数1、2、3、4

全てを回避し、月夜は地面に触れ、コンクリート片を高速で射出する。

当然のごとく消し飛ばされる。

「おいおい。この程度で私にダメージを与えられるとでも？」

「ふん。思っちゃいないさ。此だけじゃな！」

更に無数の鉄片が宙を舞う。

強力な攻撃とは必ず一度に攻撃出来る数は限られている。

それが拳銃なら6発

ミサイルなら1発と言うように。連射出来る数を数えて見ると全部で4つ

つまりこれが原子崩し（メルトダウン）の最大の攻撃回数だと判

断した月夜は数で押し切ろうと大量の鉄片を撃ちだしたのだが・・・

「数で押し切れるとでも？」

シュバアアアンツツ

一枚のカードのような物を宙に放り投げ、それに光線を放射した。
一本の光線が何十にも枝分かれして鉄片を次々に撃ち落として行く。

「拡散支援半導体弱点に対策位あるに決まってるだろうが。だから
甘えつつってんだよクソガキが。」

シュバアアアア

ドゴゴゴオオン

無数の鉄片が全て撃ち落とされた。

「さあてと。まさかこれで終わりなんて言っんじゃないあねエだろうな
あ オーバーアクセル 物質加速よお！」

端から見たら絶体絶命の状態に見えるだろう状況だが、月夜の顔には余裕が見えた。

「ああ、当然だ。時間は充分貰った。行くぞ！！」

月夜の周りの空気の流れが変わった。

ソニックブレード
「超速斬撃」

幾つもの不可視の斬撃が放たれる。

「さーて、見えない攻撃にどう反応するかな？」

それは進行方向にある全ての物体を斬碎する殺人攻撃

だがもちろん月夜に殺すつもりはない。

麦野ほどの実力なら見えなくても空気の僅かな動きでも感知して避けるだろう事を計算した行動だ。

そして避けた時の隙をつく作戦だったのだが。

「ッッ何やってんだ！！ 避けるー！！？」

さっきの場所から微動だにしない麦野を見て月夜は叫ぶ。

麦野には焦りの表情はない。有るのは怒りだ。

次の瞬間

月夜の視界を閃光が埋め尽くした。

始動する闇 2 (前書き)

なかなか話が進まなくてすみません。

後一つ麦野の性格変わっています。こんな奴じゃなかったのに。

始動する闇 2

視界いっぱいに広がる巨大な閃光が迫る。

「噓、だろ…….?」

その光は月夜が放った攻撃をまとめて飲み込み、更に彼自身をも襲う。

バシユアアアッ

ドガアアア!!

轟音と共に進行先にある全ての者を消滅させた。「ハッ、思ったより大したことねえな第3位い、この程度なんてがっかりだね。」

肉片一つ残さず散ったであろう相手に向かって侮蔑の言葉を発する。

が、突然後ろから声を掛けられた。

「誰が大した事ないって?」

ところどころ服が焼け焦げていて、肌には血が滲んでいる。

無傷ではないが、あの攻撃を受けて、この程度で済んでいるのがもう奇跡に近い。

「あなた……何でツッー?」

「ああ？何が。」

「何で生きてるのよ！！」

「避けたからに決まってるだろう。それ以外にここに立っている理由があるか？まあ確かにギリギリではあったけど。」

さも当たり前のように話すが、実際はとんでもない事である。

あの質量、あの大きさの攻撃を回避するなど不可能に近い。

それをやったのけた目の前の男に麦野は驚嘆と恐怖を一度に覚えた。
「僕が甘かったよ。どうやらお前は殺す気で行かないと勝てないよ
うだ。」

月夜の雰囲気が変わる。彼に優しさはもうない。

ただ目の前にいる者を敵とみなし、全力で叩き潰す。

「僕は自分の敵には容赦しない。お前を殺す覚悟もある。」

膨大な殺意と敵意が迸る。

「問おう。お前には殺される覚悟があるか？」

その言葉にさえ、臆することなく。

その雰囲気さえ圧されることなく。

その顔に微笑を浮かべ、答える。

「愚問ね。こっちは長いこと闇に浸ってるのよ。死ぬことが怖くて

やってられるかああ！！」

月夜はこの女性の覚悟を見た。それは闇に生きる者特有の考えだろうが、実際はそうでもないのが多い。他人はいくらでも蹴落とし、笑いながら命を奪い、だが自分は死にたくないというクズのほうが多い。

だが、今目前にいる相手は少なくとも死を恐れていない。

それが、自分が命を奪った者達に対する礼儀だとも言うように、その答えに満足したのか月夜も軽く笑う。

そして

ブレイカーソニック
「破碎加速」

静かに呟く。

その瞬間辺りの空間が歪む。一気に空気中の粒子を加速させているためだ。

破碎加速とは空間にあるあらゆる粒子を強制的に加速させて生み出されたエネルギーを放出する技だ。

余談だが粒子を加速、衝突させることで擬似的なブラックホールを作り出す事も可能だ。

それほどのエネルギーが持つ破壊力は言うまでもない。

膨大な力の奔流に空間が更に大きく歪む。

そのとてつもないエネルギーを腕に収束させ、一気に解き放つ。

文字通り空気を切り裂き、余波だけで周りの物体を粉々にして死神の一撃は突き進む。真っ直ぐ麦野の体に照準を合わせて。

原子崩し（メルトダウン）で防ごうとしないのは意味が無いと判断したから。

その程度の抵抗ならしても、飲み込まれて終わる。

最後の表情は笑みか怯えか諦めか。

全てを粉々に叩き潰し、分子レベルで破壊するエネルギーの槍が命中する。

いや、正確には命中する直前、横から来た何かの衝撃により軌道を逸らされ鉄筋の建物に当たった。

目が眩むほどの輝きが起き、次いで地震のような衝撃と、轟音が辺りに撒き散らされる。

光が収まると、そこには何もなかった。完全なる無。塵も残さず消滅したのだ。

ただそれよりも、驚くのがこれほどの力の軌道をずらしたさっきの衝撃だ。

月夜の動体視力ではハッキリと捉えていた。巨大な火球だ。

しかも表面がプラズマを帯びているため、通常の炎とはまるで力の差が違う。

そして彼はこの能力を知っている。

この特殊な炎を操る事が出来る者を知っている。

周りを覆う能力の余波による煙が晴れ、その能力者の正体がハッキリとわかる。

「どういうことだ、何で………何でお前がここにいる。空！
」

そう、そこにいたのは月夜のクラスメート。分子の超振動により、プラズマを帯びた炎を操る。
能力名「シュートプロミネンス炸裂紅炎」戦辺空。その人だ。

「そこまでだ。」

彼は響く張りのある声で原子崩し（メルトダウン）と物質加速のオーバーアクセル戦闘終了を宣言した。

始動する闇 2 (後書き)

書くこと無いので取りあえず

M a r r y C h r i s t m a s

死神への宣戦布告（前書き）

漸く本格的に始まります。何話になるか予定してません。

死神への宣戦布告

手のひらにプラズマを纏った炎が浮かび上がる。

空は麦野の方を向いて

「そこまでだ。すまない。情報の行き違いがあつてな。」

「ハ、手違いって事？死ぬ所だったのよ。報酬は上乘せしてもらうからね。」

今し方死に直面していた割には落ち着いている。

慣れていると言うことだろうか？

更に彼は月夜の方を向いて、

「すまない。完全にこちらのミスだ。危うく取り返しつかない事をさせてしまう所だった。今日の事は忘れてくれ。つと言いたい所だが、そうもいかない。事情はしっかり説明する。着いてきてくれ。」

月夜に質問する隙を与えないように、事務的な口調で完結に話す。

「着いてこい？それを信用する根拠は？」

警戒心も露わに言葉を返す。

「根拠はない。だがこれはお前自身、ひいては学園都市全体の問題に発展する。最悪この街は滅亡するかもしれない。」

淡々と驚愕すべき内容を告げる。

「何だと！？どういう事だよそれは！」

「だから着いて来いと言っている。訳はちゃんと話す。現時点では俺達はお前の味方じゃない。かと言って敵でもない。来れば分かる。」

「………いいだろう、行くつじゃないか。」

「そうか、それじゃあ」

最後まで言わずに手刀を月夜の首に振るう。

強い衝撃を受け、全く反応出来ずに意識が薄れていく。

月夜の想像を超えるスピードで動いた為とつさとは言え、まともに受けた。

「くっ……お前……」

その言葉を最後に力無く地面に横たわる。その体を空はヒョイと担ぎ上げどこかに電話をすると数分程でワンボックスカーが到着した。

その中に月夜を放り込み、自分も乗り込むと周りにいたスーツ姿の男達に指示を出す。

「ここの後始末を頼む。情報操作は任せた。後暫くこの場所を封鎖して置いてくれ。表には安全上の理由としてな。すまないな。こちらの不備なのに働かせてしまって。報酬は弾んで置く。」

男達は「はいっ！」

と一斉に返事をして素早く仕事に取りかかった。

彼らは空の優しさがこちらの世界には不向きだと言うことを知っている。しかし、だからこそ従う。恐らく死んでくれ。という命令にも迷わず従うだろう。それ程厚い忠誠心を持って入るのだ。

そんな彼らの仕事振りを満足そうに見つめながら空はその場から立ち去った。

~~~~~

次に月夜が目覚めたのは小綺麗なソファの上だった。まるでホテルのような内装の中、シンプルなシャンデリアが目に入る。「気が付いたか？」

横から聞き覚えのある声が聞こえる。

一瞬自分が何故ここにいるのかと思ったが、思い出した。

「お前……！！！」

「まあ待て。言いたいことは山程有るだろうがまずは聞いてくれ。最初に此処は俺達の拠点の一つだ。」

その言葉に何か引つかかるものを感じた。

「待てよ。俺“達”」

まだいるのか？」

「ああ、そいつらは後で紹介する。そして薄々分かっているとは思うが、俺も麦野と同じ闇の世界の者だ。「バランス」という組織のリーダーを務めている。」

「俺達の活動目的は学園都市内のパワーバランスの調整だ。」

どれか一つの組織でも力を付けてしまおうとあつという間に均衡が崩れてしまう。

ここでさっき俺が言った問題とは、ある組織が学園都市に反乱を起こした。奴らは処刑部隊と言う暗殺組織でな。目的は一切不明だが、とにかく奴らは強大な組織だ。真実かどうかは知らんが奴らだけで一国と戦争が出来るとまで言われている。文字通り戦闘のエキスパート集団だ。そこで奴らを制圧するために俺達「バランス」とその麦野達。学園都市内の不安分子の排除を目的とする「アイテム」と組んで事に当たることとなった。」

どうやら事は思った以上に深刻な状態のようだ。

「まあ、事情は大体飲み込めた。それで？何か用件があるんだろう？」

「さすがに回転が速いな。単刀直入に言う。俺達に力を貸してくれないか？さつきも説明したように奴らは強い。正直こちらは圧倒的に不利なんだ。戦力が欲しい。」

「・・・何故僕を選んだ？」

「ここ最近お前を監視していた。優れた人物だと思っていたが、特にあの虚空爆破事件で見せた判断力、行動力で確信した。お前は強い。力はもちろん、人間としても。俺はこの街が好きではない。だが、それでも守りたい者がいる！頼む。力を貸してくれ！！バランスのリーダーとしてではなく、ただ1人の人間。戦辺空として頼む。」

最後は弱々しい絞り出すような声だった。彼も好きで巻き込もうとしているワケではないのだ。本当なら自分たちだけで解決しなければならぬ問題にレベル5とは言え一般人に協力を頼まなければな

らない事がどれだけ彼を苦しめたか、それでもやらなければならない。彼の声は苦悩に満ちていた。

「……仕方ない。お前の頼みだ。出来るだけの事はする。だがレベル5としてではない。1人の戦辺空の友人、風宮月夜としてだ。」

「感謝する………!!」

風宮月夜と「バランス」、しにがみ「アイテム」  
が手を組み、処刑部隊へ、宣戦布告した。

今、決して表には出る事のない“闇”の戦いが始まった。

## 奇妙な1日、誓いの1日（前書き）

サブタイトルセンスね〜。

最近、サブタイトルのアイデアが思い付かなくて。そこはスルーして下さい。

さて、今年最後の投稿です。↑だからなんだ。

話は今までで一番長くなりました。

後何話続くかなと計算して見たら、後10話は余裕で行きそうです。正直飽きると思います。つまらないと思ったら即バックして下さい。

最後に、来年もどうぞ宜しく御願います。

## 奇妙な1日、誓いの1日

（やっぱり夢でも何でも無いんだな。）

大通りを歩きながら月夜は考える。

もちろん昨日の事だ。

自分のクラスメートがただの高校生じゃなかったと言うことから始まり、処刑部隊だの学園都市の滅亡だの突拍子も無いことを次々言われ、

更には詳しい内容及び作戦メンバーの紹介は明日すると、行き先を書いた紙を貰い、今はその紙を眺めながら冒頭の思考に行き着くと言う訳だ。

（空の奴は今日休んでいるし……、全てはドッキリでした！とかだったら楽なものにな。まあ有るわけないか……。）

実際昨日は殺し合いみたいな事もしたし、まだ怪我は残っている。

紛れもなく現実<sup>リアル</sup>で起きたという事を認めざるを得ないのだ。

（これから支部に顔出してしばらく休むと言うことを伝えないと。）

そう考え事をしていてる時でも事件と言うのは、彼を放つては置かないように

「いいから、ここらへん不慣れなんだろう？俺達がエスコートして

やるって」

「ちゃんと送ってやるからさ。ま、いつ帰れるかわかんないけどな。」

どこからか声が聞こえて来る。

ふと見回すと道の端に10人位の男が1人の女の子に絡んでいるのが見えた。

女の子はおびえた様子だが、

周りにはみんな見て見ぬふりをしている。

（あゝあ、またか。面倒くさいな。この街には本当多いよね。しかも毎回中学生位の女の子。何だここはロリコンを推奨してるのか？）

などと言いつつも自身が学園都市の治安維持機関である風紀委員である以上、見過ごす訳にも行かず、

「ジャッジメント風紀委員だ。大人しく退けば手は出さない。とっとと帰れ！」

と言ってもそれに素直に従う訳も無く、

「ああ？うつせえんだよ。ジャッジメント風紀委員が何だつつんだ。」

そして一斉に飛びかかって来た。

「やっぱりか。疲れてるんだけどね。」

1人目のパンチを腕を使って逸らし、その勢いのまま顔面に肘を打ち込む。

更に2人目の腹に拳をねじ込み、よろけた所で脇腹に蹴りを入れる。

この間およそ5秒。

だが突如

「くつつ・・・」

胸に鈍い痛みが走る。昨日のダメージが抜けていないのだ。思わず胸を手で抑える。

今まで不良2人を秒殺した月夜を見て明らかに怯んでいた他の男達が彼の異変にチャンスとばかりに再び襲って来た。

痛みで集中出来ず能力も使えない。

「クッソ」

目の前に拳が迫り、  
重い衝撃と共に火花が散る。

追い討ちをかけるように蹴りが拳が暴力の嵐が更に襲いかかる。

「がつ、げふ・・・」

口に血の味が込み上げる。口を切ったらしい。

腕には幾らか覚えがあるといっても、力そのものは一般高校生と同

じだ。

一気にやられたらひとたまりもない。  
能力の補助はもう使えないのだ。

周りにはやはり見て見ぬふりをしている。

それも当然だろう。彼らにとっては風紀委員ジャッジメントとは警察みたいな物である。そんな人が暴行を受けているのだから、助けようとはしないだろう。

厳密に言えば（ジャッジメント）は全員強い訳では無いのだが。中には高位の能力者もいるが、あくまで彼らは学生なので有る。絡まっていた少女は顔面蒼白でどうすれは良いか分からずオロオロしている。

その顔を見た時月夜に何かのスイッチが入った。

ゆらりと無表情で立ち上がり、無言で男達を見据える。

「おい。死にたい奴から前にでろ。」  
そう、彼はキレた。

静かな威圧に再び怯む不良集団。

だが普通じゃない空気は突如木刀を持って乱入して来た1人の少年の手によってぶち壊された。  
「ハイ！ドーン！！」

どこからともなく現れた妙な少年が更に妙な掛け声で木刀を振り抜

いた。

先頭にいた男がそれをまともに受けて派手に吹っ飛ぶ。

だが、その距離が尋常じゃ無いのだ。明らかに10メートル程吹っ飛んでいる。

絶対に普通に殴っただけであんなに飛ぶ訳はない。

その少年は

「暴力はいけないな。平和的にいこうよ。平和的に。」

などとのたまっているが、端から見たら彼の方がとんでもない程の暴力を振るっている。

あっという間に全ての不良を叩きのめすとさっさとその場から去ろうとした。

「イヤイヤイヤ、ちょっと待って下さいよ。何さらっと帰ろうとしてんですか？  
それによく見たらそれうちの制服ですよ。あなた一体何者ですか？」

「んっ？ジャッジメント風紀委員。ほら！」

と言って腕章をポケットから出す。

「風紀委員？でもあなた177支部じゃないですよ？越権行為は始末書物ですよ。」

「いいじゃないか。あつという間に終わっただろう？それに君ボコボコにやられてたじゃないか。レベル5とかいう反則人間の1人のくせに情けないな。」

「し、しかたないんですよあれは。いろいろと事情が、えっ？」

途中で言葉が詰まる。彼の言葉に疑問を感じたからだ。その疑問とは

「何で僕がレベル5だと知っているんですか？」

そう、月夜はなにも言っていない。

眼前のこの少年がその事を知っているはずがないのだ。「あれ？本当にそうだったの？いや、うちと同じ制服で、なおかつ風紀委員みたいだったからもしかしてと思ったんだけど言ってみるもんだね！ふーんじゃあやっぱり君があオーバーアクセルの物質加速なんだ。」

「な・・・・・・・・。」

あまりの発言に言葉が出ない。

「さて、僕はそろそろ行かなければならない。アンチスキル警備員から協力要請があつてね。」

そして木刀に「縮小」と声を掛けるとポケットに入れられる程度の大きさに縮め、それをしまってから歩き出した。

「そうそう後ね、君感情が顔に出てるよ。考えが面白いくらい読めるからポーカークフェイスの練習でもした方がいいんじゃないかな。」

その言葉を最後に彼は消えた。文字どおり消えたのだ。

「食えない人だ。」

この出会いがこれからの事件を大きく変えて行く事になるのだが、その事はまだ誰も知る由もなかった。

「あの……？」

傍らの少女から声を掛けられる。

しかもよく見たら、名門常盤台の制服だ。顔立ちもなる程美少女といてもいいだろう。あの不良達が絡んでいたのも分かる気がする。「あ、ああ申し訳ないです。情けないところをお見せしてしまいましたね。どうしましょう。1人で帰れますか？」

「いえ、あの……ちよつと」

見ると体が微妙に震えている。やはり恐ろしいのだ。無理もない。あんな目に遭った後だ。

「差し使えなければ、僕がお送りしましょうか？大丈夫です。もうあんなことにはなりません。実はちよつと怪我してしまってます。でももう痛みも無いですし……」

「えっと、あの、じゃあお願いします。」

最後の方はボソボソと小さな声だった。

「それならちよつと着いて来て下さい。支部に少し用事がありましたね。それからお送りします。」ちよつと調べたい事も出来ましたし。

と付け加え、歩みを進める。

「あのゝ。ところで名前は何と言うんですか？」

「えっ？」

少し戸惑ったような少女。当然だろう。これはまるでナンパだ。

「あ、すいません。おかしい事を聞いてしまいましたね。ちよつと場を和ませようとしたんですが、決してやましい事はありません。お気に触りましたらすいません。」

慌てて弁解する月夜に少女はクスツと小さく笑うと「朱璃あかり、空羽朱璃そらねあです。」

「朱璃か、いい名前ですね。」

「そうですか？あの、あなたは？」

「ああ、僕は風宮月夜と言います。風神様の風に竜宮城の宮、お月

様の月に夜で風宮月夜です。」

「うわゝ綺麗な名前ですね。」

「そうですか？有難うございます。」

意外にも打ち解けた2人は目的地の177支部に着いてから。

「とりあえず中へどうぞ、朱璃さん。」

入り口のセキュリティをくぐって中へ招き入れた。

その時、声が響いた。

「朱璃！？何でこんな所に。」

そこにいたのは常盤台のエース。最強の電撃使い（エレクトロマスター）超電磁砲の御坂美琴だった。

「何でいるのと言う問いは僕が言いたい所何ですけどね。御坂さん。」

「

「何で敬語なのよ。」

「おっと、ずっと敬語でしゃべっていた物だからつい。」

「まあ、それは置いといて、何でこの子がここにいるワケ？」

「いや、不良達に絡まれていたのを保護したんだけど。」

「絡まれていた？何で？レベル4なのに？」

「レベル4!!」

思わず大声を上げた後で、  
そうか、そう言えば常盤台はみんなレベル3以上なんだ。珍しい事  
じゃないな、と納得する。

「レベル4ならどうして？」

「あの、私の能力は演算がとても大変なんです。だから、あの、急  
には使えなくて。」

「ふーん。因みにどんな能力なんですか？」

と言う月夜

アトモスフィア・コントロール

「はい、大気制御と言つて、風は勿論、酸素や一酸化炭素、窒素な  
ど空気中にある物質を操る事が出来るんです。」

「かなり強いですね。」素直に驚嘆する。要約すると空気を本当の  
意味で操るのだ。酸素を無くす事も出来るし、逆に一酸化炭素で満  
たす事も出来る。かなり強力な能力なのだ。

「そんな事ありませんよ。ところで月夜さんは赤桜高校何ですよ  
ね？そのレベル5つてもしかしてあの破砕<sup>ブレイカーニック</sup>加速ですか？」

「まあ、あのつてどの？つて感じだけどそうです。」

「うわー。感激です！？あの物質加速を生で見れるなんて!!」

「そ、そうですね、どうも。」

少女のあまりの迫力に若干押され気味で礼を言う月夜。

「そうだ。御坂。お前この子と一緒に寮だろう。送っていつてくれないか？僕はいろいろやる事があってさ。男の僕が送るより、女の子の方がいいだろう。」

それを聞いた時朱璃のが少し残念そうな顔になったが、月夜はそれに気付かず、

「と言う訳で朱璃さん。御坂さんが一緒に行きます。僕なんかより遥かに安全なのでご心配なく。なにせ、事あるごとに電撃を撃つので、不良達は絡んで来る前に気絶します。」

御坂が「どういう意味よ、それ！」

と紫電を进らせながら、文句を言ってきたが、

「そういう意味だよ。」と言って进っている電気を指差すと大人しくなった。

「ま、ともあれ任せたぞ。」

と2人を送り返して

月夜は奥にいた人物の方へ向かった。

「初春。ちょっといいかな？」

「ああ月夜さん。いらしてたんですか？いいですよ。何の用事ですか？」

「ちょっと調べて貰いたい事があってね。僕と同じ高校で、多分か

なり高位の能力者だと思うんだけど、多分物質変化系の。そんな風  
ヤッジメント  
紀委員を調べてくれないか？」

かなり情報が限定されているので、簡単に見つけられるだろうと思  
ったのだが、

言い終わるか、終わらないかの内に

「いました。」

「早っっ！」

まだ10秒程しか立っていない。これが守護神と言われる情報収集  
能力なのだろう。

「えーと。名前は威剣天聖いつるぎてんせい所属は無所属で、その優秀さに置いて学  
区を越えての捜査が許可されています。間違いなく全風紀委員最強  
ジャッジメント  
で最優でしょうね。月夜さんよりも強いかもしれません。」

「そこまでか、レベルは？」

「それが、レベルは1何ですよ。」

「レベル1!!あの強さで、何かの間違いじゃ。」

「いえ、書庫バンクには間違いなく物質変化のレベル1として登録されて  
います。」レベル1であの強さ。調べれば調べるほど、奇妙なこの  
フォームチェンジ  
人物に何故か月夜は興味を抱いた。

それは何でも知りたいと思う。さながら子どものような知的好奇心

だ。

「ますます妙だ。一体何者だ、あの人……んっ？、やばい  
もうこんな時間だ。」

現在時刻は午後4時40分、空との約束の時間は午後5時ちょうど。

「今日はもう帰るから。そうそう、暫く風紀委員シャッジメントの仕事を休むから。  
いろいろあつてね。宜しく。」

「えっ。そんな事私に言われても、困りますよ。私そういう担当じ  
やないんですから。あ、ちょっと待って下さい。」

と初春が後ろで言っているのを尻目に月夜は支部を飛び出した。

向かうは空との約束の場所。

決して知られてはならない。そして後戻りはできない。

そう胸に誓い、月夜は一歩進み、それから走り出した。

## 奇妙な1日、誓いの1日（後書き）

僕の拙い小説を読んで下さり、有難うございます。来年も頑張って書いて生きたいと思いますので、どうぞ御願いします。

## 死神への最終通告（前書き）

やっちゃった感……

後、今回主人公登場しません。

## 死神への最終通告

大通りを疾走する1人の少年がいた。

彼は今まさに目の前を走っている数人の男達を追っている。男達は皆一様に今どきの若者のような格好をしていた。それは端から見れば風紀委員が犯罪者を追っている姿に見えただろう。

確かに男達は犯罪者だ。

だが、そこらの陳腐な小悪党とは違い、本物の悪。

学園都市の闇のまた更に闇の中、聞く者によっては死刑宣告にも等しい暗部組織

“ 処刑部隊 ” に籍を置く暗殺要員達だ。

ならば彼らを追っているこの風紀委員は何者だろう。

普通に考えたら学生で構成される治安維持機関のメンバーが彼らに適う訳はない。

だが、この風紀委員らしき少年は未だ追跡を止めようとするしない。

男達が寂れた路地に入っていく。

それに少年も続く。

不意にパスツと小さな空気が抜けたような音が聞こえた。

聞く人が聞くと消音器サイレンサーを使用した銃弾が打ち出された音だと言ったとが分かったはずだ。

音と同時に少年の体がくずおれる。

動かなくなつた少年を見て、男達は口々に言葉を漏らした。

「全く余計な事をしなければ死なずにすんだものを。」

「闇を知らない者がなまじ正義感を出すところなる。」  
そしてリーダー各のような男が他の数人に

「片付ける。」

と指示を出した。

少年を見る目は蔑みに満ちている。

だが、次の瞬間その目が驚愕に彩られた。

指示を受け、少年に近づいた男がその少年に顔面を蹴られて地面に倒れ付したからだ。

男の脳が不測の事態に対応仕切れずにパニックを起こす。

部下が蹴られ、気を失った事にはない。もちろんそれもあるが、何よりも少年が生きている事が理解出来なかった。

先ほど放った銃弾はただの銃弾ではない。

学園都市の最新技術で開発された特別なもので、弾丸が二重の構造になっているのだ。最初に発射された後途中で弾丸後部が切り離され、もう一段階ロケットエンジンのように加速させる事で通常よりもスピードを上げた状態で放たれる。更に弾丸には螺旋状に溝がほられ、ドリルのように回転しながら進み、貫通力も従来の弾丸とは

比べものにならない。

この弾丸に防弾装備など意味を成さない。

止めたければ厚さ40センチ程の鉄板を体中に貼り付けて置くべきだろう。

もつとも衝撃までは殺せずに骨ぐらひは折れるだろうが。

つまりはそこまで威力が高い兵器だと言うことだ。

だから少年が生きて尚且つ自分の前に立ち上がっている。それだけでその男にとっては十分有り得ない事態なのだ。それなのに目の前の少年は

「痛つてえ」

と一言発しただけだ。見たところ目立つた傷はない。

そもそも本当にダメージを負っているのかも微妙だ。

ただ胸の辺りに空いた穴だけが間違いなく少年に攻撃が命中した事を物語っている。

「おいおい、いきなり殺そうとするなんていい度胸だな。」

一瞬だけ少年から殺気がほとばしる。

それは殺しに慣れている男達を怯ませる程の物だった。

「くつ、お前何者だ？ バランスのメンバーか？」

「バランス？ 違う違う。僕は風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>さ。

ただちよつとばかり特殊だね。」 気配を落ち着かせて更に続ける。

「僕はお前達暗部組織に対しての捜査、及び拘束の権限が与えられているんだよ。そうだね監視者“ウォッチマン”と言えは分かるかな？」

「そうか！ 貴様があの監視者か！？」

監視者、その名は闇に属する者は知っておかなければならない。組織が反逆する素振りを見せただけで制圧される。今まで彼によってどれだけの組織が潰されてきたか

「理解したか？ 自分達は何をしたか、誰を敵に回したか、言って置くが動き出したのは僕だけじゃない。奴も“フリーエージェント”も出張ってきたぞ。」

「何だと！？ 調停人<sup>ネゴシエーター</sup>までもか！！」

それは監視者と同じく彼らにとっては殺し名にも等しい。

どこにも属さず、常に単独で行動し必ず結果を残す。

少し前にも学園都市に敵対する組織が送りこんだ工作部隊をたった1人で壊滅させたという。

「中立者に監視者に調停人か……。とんでもない面子が揃ったな。」

だが俺たちは止まる訳には行かない。ここでやめる訳には行かないんだ！」リーダーが叫んだ。

その心からの叫びに

されど少年は酷薄に返す。

「いい加減にしろよ。貴様らの事情など知ったことか！！意見を通すのなら上層部にでも掛け合え！分かっているのか？自分達が何をしようとしているのか。何人犠牲になると思っているんだ！」

「それこそ知ったことか！！多少の犠牲は承知の上だ。いつまでも上の奴らに従ってたまるか！！」「多少だと！本当に救えないな。だが、チャンスをやろう。今すぐ降伏すれば命だけは助かる。断れば僕が殺す。どうする？死か生かどちらを選ぶ？」

だが、リーダーは憎々しげに顔を歪め

「ナメるなよ！クソガキが！！テメエ如きに俺たちがやられるとでも思っているのか！！？」

さっきまでの微妙に紳士的な態度とは真逆だ。一転して汚い口調になる。

「本性を出したな。貴様らこそたかだか暗部風情がこの僕に勝てるとも思ったか？」

男達は一斉に銃を取り出し、撃ちまくった。次々と弾丸が飛来する。だが何故か全て少年の方を避けるようにあらぬ方向へ飛んでいく。

「畜生、何でだ！何で当たらねえんだ！ギヤアッ！」

取り乱す男の声が悲鳴に変わる。腹から鮮血がほとばしり、地面に無様に転がる。

少年の手にはいつの間にか一振りの刀が握られていた。

それで男の胸を一突きしてトドメをさす。一回大きく体がはね、それから動かなくなった。

「ヒイツッ」

更に周りにいた数人に1回、2回と刀が振られる。あるものは手首を落とされ、あるものは肺を貫かれた。

余りに圧倒的で余りに一方的な殺戮だ。

戦意を失った者にも容赦なく刀は振り抜かれた。

最後にはとうとうリーダーしか残っていない。

「貴様で最後のようだな。」

だが、リーダーは恐れる様子も無く、周りに転がっている部下達を見て、無表情のまま

「使えねえ、クズどもが！」

と吐き捨てる。

「そいつらを殺したのは僕だ。とやかく言う権利は無いんだが、貴様は自分の部下に対して何の感傷も抱かないのか？」

「あん？何言つてんだあ？コイツらは俺の道具なんだよ。所詮は消耗品だ。お前も買ってきたばっかの鉛筆が書く前に折れたら使えねえと思うだろ？それといっしょだ。コイツらの価値なんてそんなもんなんだよお！」

少年の額に青筋が浮かんだ。

彼の頭の中はある1つの考えで埋め尽されている。

即ち、目の前のゴミを潰す。

「……………」

「ああ？なんか言ったかあ？」

男が神経を逆撫でするような口調で問いかける。

「ぶっ殺すって言ったんだよ。クズ野郎がア！」

「そうか、やってみろよお。」

男は内心ほくそ笑んでいた。

人間は怒りに満ちた時ほど、動きが単調になる時はない。

隙を見つけて0距離で特殊銃弾を発射する。それが男の狙いだ。

果たしてその通りになった。

刀が大振りになった瞬間それを避け、一気に間合いを詰めて銃口を体に押しつけた。

「所詮はガキだな。この距離なら例えどんな防弾装備でも貫ける。終わりだクソガキ。」

何の躊躇もなく、引き金に掛けた指を引く。乾いた音と共に少年の体が吹っ飛んだ。

殺った！男の顔が歓喜に彩られる。

次の瞬間まではだが。

超至近距離から撃たれたというのに少年が起き上がった。「痛たた。油断したな。」

「な、何でだ！何で生きている！？」  
ニヤリと笑って少年は答えた。

「そうだな。冥土の土産に教えてやる。  
僕の能力は概念付加物体ジョイントエフェクションに意味を付け加える能力さ。僕の衣服には予め“完全防御”の概念を取り付けている。  
銃弾如き余裕で対処できるんだよ。」

「さて、ここまでは。そろそろ終幕フィナーレといこうか。」

為されたのは鋭き一撃による死刑執行

眼前に迫る、血に濡れた刀を最後の記憶に男は意識を手放した。

「さて、」

少年は懷から携帯を取り出し、どこかに電話を掛けはじめた。

3回のコール音の後、目的の相手がでた。

『もしもし』

「僕だけど、こちらは終わった。そっちはどうだ？」

電話の相手は先ほど言っていた調停人だ。ネゴシエーター

『今、終わったところだけど。いちいち電話しないでくれないか？俺は1人でしたかったんだ。』  
不機嫌そうに電話の相手は話す。

「まあまあ、今回の任務は僕たちでやれって言われただろう。仕方ないとあきらめてくれ、来人くるひと」  
『分かっている。それよりどうするんだ。バランス達と協力するか？』

「そうだね。そうするべきだろう、少し興味がある人材もいるし。」

『あの物質加速オーバーアクセルの事か？全くお前は気まぐれな奴だな天聖。』

電話の相手は少年の事を天聖と呼んだ。そう彼は先日月夜の前に現れたあの人物だ。

『まあいい、それと頼みがあるんだが人を送ってくれないか？』

「ハア？お前また“散らかし”たのか？ほどほどにしとけと言っただろうが。たくしようがない、7人程送っておく。」

『悪いな。ありがとう。』

その言葉を最後に電話は切れた。

天聖は電話をたたみ、懷に戻すと

「ふう、忙しくなるな。」

その眩きは誰の耳にも入る事なく、空気に吸い込まれていった。

## 死神への最終通告（後書き）

戦闘シーンの描写が上手くできない……

## 作戦決行（前書き）

2週間以上ほったらかしでした。

全然アイデアがわかなくて、今回は思ったより出来が悪いです。それでも良ければどうぞ読んでいただけると嬉しいです。そ

## 作戦決行

「比較的悪い知らせと比較的良好い知らせどっちから聞きたい？」

「ハア？」

それが、目的地にいた空の最初の一声だった。

この場所はどう表現すればいいのだろうか？

外側から見たらまるで廃墟のような場所で、中に入って見るとただただ馬鹿でかい空間が広がっていた。

「つとその前に、ようこそ月夜。俺たちの本拠地へ。元々はとある研究施設だったんだがな。改造して俺たちが使用している。セキユリティーは万全のハズだ。安心してくれ。」

「よし、話を進めろ。」

正直そんな紹介などどうでもいい。

一刻も早く情報を入手して奴らを潰す。

それを目的としている任務なのだから。

「淡白だなオイ。」

「なんでお前がそんなにやる気満々なんだよ。」  
「  
無然とするも」

「まあいい。それでどちらから聞きたい？」

「悪い知らせから……」

「……学園都市である物が開発された。簡単に言えばエネルギーの変換及びその転送が可能な兵器だ。“強制終了”と言うCODEで呼ばれている。それが処刑部隊に奪われた。全く実にシンプルなネーミングだな。」

一呼吸置いて

「存在理由をそのまま表しているのだから。」

あらゆるエネルギーの変換及び転送。

これだけではピンと来ないかも知れない。

エネルギーの変換とは文字通りそれが物理的な物であつたなら任意に変換出来る。運動エネルギーを熱エネルギーに

そして熱エネルギーを電気エネルギーに。この世界でエネルギーを持つていない物質など存在しない。

それを自由自在に変換する。

更に転送も出来る。

つまり居場所さえ分かれば“どこからでも”破壊する事が出来る。

「思ったよりヤバい状況だな。最悪だ。じゃあ良い知らせってのは？」

「増援が届いた。戦力が多少強化されたぞ。」

「ふゝん良かったね。」

「更に淡泊な反応！何かねゝのか？おっしや、仲間が増えたみたい  
な。」

「特に何も実感が湧かないんだよ。僕1人でもなんとかなるんじゃないか？」

「甘いな。闇を知らない一般人が大口を叩く者じゃない。」

「っ！！？」

雰囲気冷たい物に変わった。ただしゃべっているだけでとんでもない威圧感が月夜の体を襲う。彼の背中を何か冷たい物が伝った。

「それに、その人物は多分お前も知っている人だと思うけど？」

空は声をいつもの調子に戻すとそう言い放つ。

「付いて来い。メンバーを紹介しよう。」

先立って歩いて行く。だだっ広い空間に靴音が空虚に響く。  
着いた所はこれまた小綺麗なホテルの一室のような場所だった。

中に入ると数人の中学生から高校生ぐらいの男女が一斉にこちらを見た。

その視線には好意、好奇、疑念など多種多様な色がある。その中に知った顔があることに月夜は驚いた。

「紫藤先輩!?!」「よう、久しぶり。」

気さくに手を挙げて来る。

「あんたヤツパリただの一般学生じゃなかったな。いろいろ怪しい  
と思ったんだ。性格とか、雰囲気とか、性癖とか。」

「なかなかひどい事言うな。特に最後の性癖とか関係ねえだろ!!」  
予想通りの反応を示す紫藤。やはりいじりがいがある先輩だ。  
しかしその先輩も闇の人間なのだろう。

空と同様急に雰囲気が変わった。殺気とかそういう者ではなく威圧  
感がすごいのだ。並みの人間なら気絶しかねない程の圧力が一瞬だ  
け周りを満たす。

「さて、改めて。バランス正規メンバー紫藤暁。物質透過<sup>プレイクスル</sup>レベルは  
4だ。宜しく。」

次にその横に立っている

また高校生ぐらいの少年が

なるかみりょう

「鳴神涼バランス正規メンバー。暴風武装レベルは4。」

アームドストーム

事務的な口調でそれだけ言う。

だが、次の瞬間急に体を反転させ一気に月夜の首元に手刀を叩き込む。

バシイッッ

しかしその攻撃を腕で受け止めた。

「これは？」

一体何の真似だと暗に言っているのだが  
当の本人はニヤリと笑って

「どんなものかと思っただけでなかなか使えるじゃん。」

さっきまでとは異なり途端に崩れた口調になる。

「いいね。認めるよ。宜しく！」

「あ……ああ、どうも。」

テンションの変化に若干引きながらも言葉を返す。

そして月夜は鳴神の後ろにいる少年に目を向ける。

まだ若い。恐らくこの中で一番の年少ではないだろうか。  
まだ中学生か、少なくとも同年代には見えない。

「バランス正規メンバー桐谷ユウ。移動切断レベルは4。」  
ムーヴカッティング

終始無表情で話す。

見方によつては不機嫌に見えなくもない。

「なあ、あんた本当に信用出来るのか？」

そして警戒心も露わにそんな事を口にする。

「桐谷！！月夜は信用に値する人物だ。俺が証明する。」

さすがに聞き咎めたのか、空が大声で諭す。

「ですがリーダー……。」

尚も食い下がる彼に

「桐谷！！」  
再度諭す。

それで桐谷は不承不承折れたようだった。

「分かりました。リーダーがそう言うのなら。」

だが、月夜とは目を合わせようとはしない。

微妙に消化不良のまま次に移る。自己紹介したのは1人の少女だった。

「北条鈴音ほつじょうすずなバランス正規メンバー。能力は空力加熱エアリアルヒートでレベルは4です。」

全体的に大人しそうな少女だ。

闇というのがどうも似合わないイメージがある。

「これでバランスの紹介は終わりだ。次にアイテムの面々だ。」

横を向くと今度は女の子ばかり4人いる。

その中の小柄な少女が最初に自己紹介をした。

「絹旗最愛です。能力は窒素装甲オフエンスアーマーレベルは4。超宜しく お願いします。」

そして金髪碧眼の女の子が紹介を始めた。

「んで結局私がフレнда。よろしくね。」

次はピンクジャージの少女だ。なんだかボーっとしている印象を与える。

「滝壺理后。」

それだけ言ってまたボーっと状態に戻った。

最後は彼女たちの中で一番年長であろう少女というより女性と見るべき人物がいた。

「自己紹介って、あなたに必要なのかしら？…まあ一応名前は麦野沈利。レベル5の原子崩し（メルトダウン）よ。」

月夜は正直麦野が苦手である。それもそのはず一度は本気で殺し合いましたのだから。

「ああ、よろしく。」

苦笑いを浮かべながら返答する。

最後に2人分の人影を見つけた。

その中の1人の顔を認識した途端月夜の目が見開かれた。

「あんたは……！？」

その人は薄い笑みを顔に貼り付けて

「やあ、また会ったね？」

忘れるワケがない。

忘れようがない。

この人物の強烈なイメージはそう簡単には拭い去れない。

そう、あの時突然現れ、あっという間に消えた男。威剣天聖という存在は。

「改めて自己紹介を風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>特殊任務要員威剣天聖だ。まあ暗部組織の犯罪担当の風紀委員ということ。能力は概念付加<sup>ジョイントエフェクション</sup>レベルは……秘密だね。」

「ちなみに彼は今回の増援の1人だ。そしてその隣の彼がもう1人の援軍の……」

空の言葉を遮ってその人物が話し出す。

「茨木来人。能力は  
ブレイクアップ<sup>ブレイクアップ</sup>物質分解。君か？天聖が言っていた物質加速<sup>オーバーアクセル</sup>っていうのは？  
ふむ……まあなかなか面白い。」

「はあ、どうも。ところであなたは一体？他の皆さんの素性は分かりましたがあなたただけなにもいわないので。」

その問いかけにふむと少し考えこんでから応えた。

「まあ、暗部からは“フリーエージェント”もしくは“調停人<sup>ネゴシエーター</sup>”と呼ばれる。と言ってもピンとこないだろう？信用出来ないならそこにいるリーダーに聞け。俺の事は分かっているはずだ。」

チラリと空の方を向くと彼は無言で頷く。

「分かりました。どうやらあなたは信用できそつだ。」

そこで一応の紹介が終わった。

最後に

空にお前も言っておけと言われ月夜が自己紹介をする。

「風宮月夜。能力は物質加速のレベル5。よろしく。」

「よしつ。あらかた理解できたか？正直急遽編成された混成チームだ。お互いを信頼するにはまだまだ不十分だろう。だが、俺たちの目的は同じだ。必ず奴らを潰す。それだけでいい。作戦決行は2日後。」

それまで各々準備をしておくように……」

そこまで言って途端に苦い顔をする。

チツと舌打ちをするその様子に異常を感じ、他の者も気配を研ぎ澄ませる。

辺りの空気が一気にピンと張り詰めた。

「どうやら招かれざるお客の登場のようだな……戦闘準備!!」

メンバーに指示すると同時に爆音が轟き、微かに天井が揺れ、そして収まる。

次の瞬間入り口のドアが外部からの衝撃により内側に弾け飛んだ。

外から無数の黒い集団がなだれ込んで来る。ざっと見ても6〜70人。

だがしかし、突然の奇襲にも慌てることなく全員が身構えた。

「来やがったな処刑部隊。」

腕にプラズマを帯びた炎を纏わせ呟く。

すると黒の集団の先頭にいた人物が刀を抜きはなつた。

そいつを見るやいなや空は問答無用で炎球を投げ放つ。

ドゴオオンッ

それは音さえも破裂させ、周りに衝撃波を撒き散らす。その余波を受け、集団の数人が吹き飛んだ。さらには鋼鉄で出来ているはずの壁までもが無惨にも溶け崩れている。

これが発火能力の上位能力「シュートプロミネンス炸裂紅炎」だ。

その炎の通る道は万物を灰燼と化す。しかし、空の背後に立っている者がいる。

そいつは刀を肩に置いて悠然とそこに立っていた。

「どうした？かすりもしてねーぞ。」

「そうか、その面どつかで見たことあると思った。貴様「ケーブル」だな。利益ばかりに群がる数だけはい多いハイエナ共だ。」

「ハッ！安い挑発だな。だがオレとしてはテメエなんぞに用は無エ。オーバーアクセル物質加速はどこだ？そいつをぶッ殺す為にオレはここにきたんだからよー！！」

「なんだ？僕になにか用か？」

間髪入れず、自ら明かす月夜。

「ほう、テメエがそうか。用つつーのはまあなんだ。取りあえずここで死ね！！」

同時に二本の刀を振り抜く。それが狙うのは月夜の首。

小細工無しの純粋な殺意による一撃。

しかも尋常じゃないスピードで。常人なら何が起こったかわからない内に即死だろう。

しかし、闇に属していないとは言えレベル5の月夜だ。

金属と金属がぶつかり合う音が響き、火花が散る。

月夜の手には二本のロッドが握られていた。あの振動カッターだ。

「へえ、今のを止めるか。…俺の名は氷室レイジ「ケーブル」正規メンバーだ。お前は？」

「風宮月夜。バランスの協力者だ。」

「一応教えておこうか。オレの能力はフィジカルフォース身体強化だ。」

「身体強化？するとさっきの一撃はその能力によるものか。」

残念だが、この僕にスピードで挑む時点でお前の負けだ。……来い。  
本物の加速を見せてやる！」

「ハッ、言ってる。すぐに絶望を味わわせてやんよ。せいぜい足掻いて愉快な死体にでもなるんだな。」

そして再び2人は交差する。

斬撃、斬撃、そして火花、火花。

今2人の姿は黙視出来ない。

もうこの空間は彼らだけの世界と化した。

それをきっかけに

そこかしこで戦闘が起こる。

闇の戦いが始まった。

## カウントダウン（前書き）

戦闘描写が上手く書けません。書くのは好きなんです、  
語彙力がたりなくて……

## カウントダウン

爆煙、噴煙、轟音、火花。

それがこの空間を支配している。

その中で月夜と氷室は激しく切り結ぶ。

と言っても余りのスピードに姿が霞んで見え、時折周りの床や、壁、天井などに火花が散っているのが唯一戦闘の経過を把握出来る目印だ。

「オラオラアツ！その程度かア？」

鋭い連撃に防戦するしかない月夜。

仕方がないと言えば仕方がない。いくら強力な能力の持ち主だと言っても本格的な戦闘経験は無いに等しいのだ。

「くっ……」

迅い……！

驚嘆すべきはスピードもだが、攻撃の鋭さ。月夜は戦闘経験が浅い分能力でカバーしてきたが目の前の敵はその速度についてくる。つまり氷室は月夜に取ってかなり相性が悪い相手なのだ。

氷室の刀は一回一回が正に一撃必殺。そこに躊躇はない。

完璧な戦闘マシン。人間としては最悪だが、暗殺者として見るのなら最も優秀な部類だろう。

「速いな。僕のスピードについてくるなんてとんでもない能力だ。」

だが…

「身体強化の一边倒だけでは僕には勝てない！！」「ハア？何言つてやがる。」

嘲笑するが、その顔には微かな焦りの色が浮かんだ。

「おそらく、強化出来るのはスピードだけではなく反射神経から体内の電気信号の伝達速度もだろう？それら全てをひつくるめての身体強化だ。」

更に続ける。「それぞれの物は素晴らしい能力だ。だが強化ばかりで応用力がない。」

「だから何が言いたいんだってのオ！！」

次に月夜が放った言葉はこの戦闘マシンを戦慄させる。

「お前、その能力長続きしないだろ。」

「ツツ！？……」

「あくまでもベースは人間だ。それほどの強化。反動もキツいだろ。」

そうそれが唯一の弱点。戦闘には向き過ぎていると言っていい力だが如何せん持久力がない。長時間使用し続けると肉体にとてつもない反動が帰ってくる。

「そろそろ終わらせよう。安心しろ。殺しはしない。」

かざした彼の手に炎が渦を巻き徐々に形を作っていく。

「な……んだよそりゃあ？ テメエまさか多重能力者か！？」  
デュアルスキル

「違うよ。これが応用力さ。単に空気中の分子運動を加速させて熱エネルギーを生み出しそこから炎を作っただけだ。」

「は……？ そんな複雑な演算を即興で行うだと……！？」

氷室は今やっと理解した。目の前にいる敵は決して容易に攻略できる相手ではない。嫌……絶対に勝てない。

それは確信。人間の底の底の本能が告げている。

彼は理解した。人間は戦闘機には勝てない。

それほど圧倒的な能力の差を感じたのだ。

生み出した炎を投擲する月夜。それは通常では有り得ない程のスピードで突き進み、前方にある物全てを飲み込み食い潰す。

「ちいっ」

だが、ギリギリながらもそれを氷室は避ける。しかし、もう完全に表情に余裕はない。すでにその目は死にいく者の目だ。命を捨て

る覚悟をした者の目だ。「ウオオオオオアアアアアアアアアア！！！」  
全てを決し、氷室は真っ直ぐ突っ込む。自分の能力を最大に強化し  
て加速するその姿は、さながら一筋の閃光。

月夜もそれに応じて真っ正面から加速する。

両者の交差は一瞬。

勝敗を決めるにはそれで充分だ。

ズバアアアッ！！！

巨大な力と力の衝突によって生み出された衝撃波が破壊の暴風とな  
って吹き荒れた。

その破壊の中心地はまるでクレーターのように抉れている。

立っているのは1人。ロッドを腰にしまい地面に突っ伏している氷  
室を見ている

。

氷室はまだ死んではない。体のあちこちが斬れ、血を流している  
が、気を失っているだけだ。と言っても月夜の方も無傷ではない。  
だが、彼の周りには無数の鉄方やコンクリート天井でできた即席の  
盾がそびえている。

それにより、爆風や衝撃から身を守ったのだ。

「殺しはしない。もう一度自分をやりなおせ。」

誰に聞かれるわけでもなく、微かに呟くと

月夜は周りを見回す。其処には累々と積み重なる「ケーブル」の戦  
闘員達。「バランス」と「アイテム」の圧倒的優勢で戦闘は終了し

た。

「オイ、空。もしかして殺したのか？」

半ば沈痛そうに問いかける月夜。

「いや、殺してはいない。こいつらはみんな対特殊犯罪人重拘束施設<sup>ス</sup>だ。まあ言うなれば暗部専用の刑務所みたいな物だな。」

そこへ桐谷が報告に来た。

「リーダー！下部組織に連絡終了しました。10分後に到着するとの事です。」

「そうか、ご苦労だった。しかし此处はもう駄目だな。奴らに居場所がばれてしまった。他に移すか……！？」  
タン、タン！

その眩きを数発の銃声がかき消す。

放たれた銃弾は彼らの足下に着弾し、地面を軽く削った。

とつさに弾丸が飛んできた方向を見やると、さっきまで確実に誰もいなかったのに、そこには2人分の人影が存在していた。まるで空間からそのまま抜け出てきたように。

「あゝ！やつぱりやられちゃってる〜！」

女の子特有の高い声と

「全くバカ野郎が。単独行動をとったあげくがこれか。」

呆れかえったような

気だるげな声が聞こえる。

そこには少女と銃を携えた少年がいた。

少女の方は金に染めた髪に耳にはピアスが目立つ。顔立ちは10人中10人が振り返る程の美人だ。

少年の方は黒い短髪に、黒い切れ長の目。顔立ちは決して悪く無いのだが、何故か常にイラついているような印象を与える。

そんな男女だ。

「よう、バランスのクソ共。本当なら今すぐ潰したいんだが、まだ時期じゃない。俺達はそこに倒れているバ力を回収しにきただけだ。」

「ほう、俺たちが貴様らをただで帰すとしても？災厄の芽は早々に刈り取るべきだろう？古井！」

その言葉と同時に空の周りに四つの巨大な火柱が立ち上る。

古井と呼ばれた少年は「はっ！さすがは久遠の終焉計画の生き残り、残党とは言え戦力はレベル5級だな。」

聞き慣れない単語を口にした。

それを聞いたとたん、空の顔色が変わった。他の者も同様だ。

「確か、演算能力を強化する事で能力その物を強化する……とか言う内容だったっけ？」

「……、だからどうした？」

「いや、随分と面白い結果で終了したプロジェクトだと思ってな。えーと、何だっけ？九宝 京……くほうみやこだったか？」

その人名のような物を聞いた途端、空の顔が憤怒に歪む。

「貴イツ様アアアアアア！！」

激昂。

四つの火柱が轟！！と音を立てて古井を襲う。まさに地獄の焰のごとく。

ただ目の前の敵を灼き尽くす為に。

果たしてそれは命中した。否、正しくは彼らが先ほどまでいた場所にだ。

そう、彼らには当たっていなかった。

全く別方向から声が響く。

「落ち着けよ。別に戦いにきた訳じゃない。どうせ近いうちにお前は死ぬんだし。」

挑発とも、宣告とも取れる言葉を残し一瞬でその場から消える。

地面に倒れていた氷室をいつの間にか担いでいた金髪の少女と共に、後に残ったのは破壊された本拠地と積み重なった黒服の集団だけだ。

「クソツタレが！」

珍しく怒りを露わにする空に

麦野を始め、バランス以外のメンバーが一斉に問いかける。

「あなた、あの計画の被験者だったの？」

「まさか、生き残りがいたとは……超驚きました。」

続いて茨木が何かを思い出したように言葉を発する。

「学園都市史上最悪の研究計画……か。確か、最後の被験者が暴走してプロジェクトが消滅したと聞いていたがまさかそれがお前なのか？」

「……ええ、そうですよ。俺は置き去り（チャイルドエラー）として研究所に放り込まれました。地獄でしたよ。死ぬことが最も楽な事だと思つようになる程ね。そこで俺は3年過ごしました。」

ギリリツと齒を食いしばりながら、過去を語る。

「何故俺が暗部にいるか分かりますか？上層部と取り引きしたんですよ。ある少女の治療を行う代わりに闇で働け。…とね。だから、俺は負けられないんです。」

守りたい者がいる。その為ならなんだってする。

俺は家族を失った、幸せな思い出を失った、これ以上何も奪われた

くない！」

暗部に堕ちる者の理由はそれぞれだ。

闇に偶然触れてしまった者。

弱みを握られた者。

いくあても無く、最後に闇に行き着いてしまった者。

空はこの全てに当てはまる。

友人の重い過去を黙って聞いていた月夜は

「なあ、空。この戦いに勝てばそのお前の大事な人は助かるのか？」

「…分からない。だが、少なくとも平和に暮らす事は出来るだろう。」

「

「そうか……」

月夜は動き出す。

その目に確かな決意を秘めて

「いくぞ。あのクス共を叩き潰す。」

その言葉に静かな怒りを込めて

決戦へのカウントダウンは始まった。



## 最終段階（前書き）

今回は短いです。本格的な戦闘は次話で……。まずは、オープニングからどうぞ。

## 最終段階

あちこちで漆黒の装甲服に身を固めた集団が何かの作業をしている。個人個人の脇にあるアタッシュケースから取り出したのは黒い四角形の物体。

それは学園都市の科学力で作り上げた爆弾だ。

破壊力に関しては言うまでもないだろう。

その爆弾を彼らは迅速に且つ的確に要所要所に取り付けて行く。

これらの行動から彼らが戦闘のスペシャリストだという事が垣間見えてしまう。

彼らはまずこの場所を爆撃し、学園都市に反抗の狼煙を上げようとしているのだ。

「設置完了。爆破まで後3分、総員退避せよ。」

それぞれの通信機に支持が入り、漆黒の装甲服を身に付けた集団が一斉にその場を去る。

もう少し経てば各所で爆破が起き、この空間その物が炎に包まれる事になる。

単純に破壊力に換算すると小型の核爆発にも匹敵するそれはもはや威嚇と云うより決定打と言っても過言ではない。

ドオンツッ！！と轟音が炸裂し、紅蓮の炎が地を舐め急激な気圧の変化により、火炎の竜巻が発生した。

一拳に地獄絵と化し、とてつもない破壊の嵐が四方八方にその災厄を容赦なく撒き散らす。

そこまでは装甲服の集団“処刑部隊”にとっては計画通りだったであらう。

確かに彼らの目的はこの場所を徹底的に滅ぼすことだ。

それ自体には何の変化もない。ただ1つ彼らにとってのイレギュラーな事態はこれらの災いが彼ら自身が設置した爆弾によってもたらされた物ではないと言うことだ。

そう、全ては第三者からの攻撃。その証拠に自然に発生した筈の炎の竜巻がまるで意思があるように彼らに襲いかかった。

ゴアッ！！と空気を巻き込むような音がしたかと思うと、物理的な火と風となって後方に退避していた“処刑部隊”の1角を焼き尽くし、吹き飛ばす。

膨大な熱により、歪んでみえる空間の向こう側に陽炎のような複数の影が浮かび上がる。

曲がりなりにも“処刑部隊”は学園都市暗部の中でも最強クラスに位置する特殊部隊だ。

当然奇襲にも対応出来る。

不測の出来事にも僅かな乱れは見せたものの、素早く展開を終了させた。

だが、向こう側から歩を進めてくる集団をはっきりと視界に入れると少なからず反応を見せる。

何故なら全員がまだ少年少女と言っても可笑しく無かったからだ。若いを通り越して寧ろ幼い。

しかしながら相手がまだ子供だからと言って動揺するのと容赦をするのは別物だ。

敵で有ることに変わり無く、すぐさまその手に携えているありとあらゆる重火器が火を吹いた。

その体をズタズタにするために無数の弾丸が吐き散らされる。

戦車でさえも破壊し尽くす猛攻を、人体が受けたら当然一瞬でただの肉塊となるだろう。

だが、“処刑部隊”

と戦闘をする以上少年達も勿論ただ者ではない。

彼らの周りを囲むように炎の壁が形成され、瞬時に銃弾を溶かし尽くして一掃し、更に衝撃波にも似た風圧が“処刑部隊”の前衛チームを纏めて薙ぎ払う。

彼ら「バランス」、「アイテム」及びエージェントで構成された連合部隊は圧倒的優勢で侵攻していく。

――かに思われた。

刹那、炎の壁をそれよりも巨大な爆炎が食い尽くした。

“処刑部隊”に能力者は存在しない。これは確定した事実だ。

ならば、この炎は誰が放った物なのか？

その問いに対する答えは現れた4つの人影によって解答された。

「ケーブル……また来やがったか。邪魔な奴らだ！」

吐き捨てるように呟いたのはバランスのリーダーである戦辺空。

「ハッ、確か前言ったハズだぜ？直にテメエらは死ぬってな。今日がその日だ。ここで殺し尽くしてやんよ！」

その表情で、その口調で己が異常性を嫌悪感を抱く程誇示してケーブルのリーダー、古井駿は嘲笑う。

「言ってるよ。」

2人の間で轟炎と爆炎が音速を超えて炸裂した。余波は地面に罅を入れ、円形状に広がり、次いで膨大な音と衝撃の奔流が荒れ狂う。それを皮切りに双方がぶつかり合う。

反乱を起こすのは“処刑部隊”及びケーブル

迎え撃つのはバランス、アイテム、エージェントの連合チーム。

「私の相手はこんなの？つまんない。」

ケーブル側の金髪女桜井京香は感に触る声で不満を口にする。

対峙するのはバランス正規メンバー北条鈴音。

「言ってくれますね。後悔しますよ？」

「格の違い見せてあげる。」

1人はナイフを1人は拳銃を構えて身構える。

「俺の相手はお前か……、せいぜい楽しませてくれよ。」

口元を歪めて言い放つのはケーブル正規メンバー射場隼二。

「楽しむ……ねえ、

悪いけどその時間も与える気はない。」

対するはバランス正規メンバー紫藤暁。

お互いに隙を探り合い、激突する。

「やれやれ、これまた随分とお若い方だ。」

呆れたように嘆息して見せる長身の男

ケーブル正規メンバー日向御影。

「悪かったね。せいぜいガキに倒されないようがんばれば？」

言い返すのはバランス正規メンバー桐谷ユウ。

皮肉っぽく鼻で笑う。

残る4人

風宮月夜 茨木来人 威剣天聖そして鳴神涼及び「アイテム」は500人程の処刑部隊を正面から相手取る。

――さあ、役者は揃った。

誰にも知られる事なく学園都市の裏側で影の戦争が始まる……

## 進軍する最強（前書き）

なかなか話が終わりません……

## 進軍する最強

ドガアアアアアア！！

一際大きな爆音が辺りに響き渡った。  
更に、ドン！！ドガア！！ゴバン！！と音は続く。

深紅の軌跡を残して、炎が飛び交い、ぶつかり合った。

戦辺空と古井駿の戦いは正に圧巻。

2人とも並みの能力者ではない。

すでに彼らを中心とした辺り一帯は焦土と化している。

「どうしたよオ！久遠の終焉計画ってのは雑魚しか開発出来なかったのかあ！！」

挑発する古井にはまだ余裕がある。

「チツ！ベラベラとうるせえ奴だ。直ぐに潰してやるから大人しくしてろ！」

対する空には僅かに焦りが見て取れた。

戦闘に置いて情報を持っているか否かというのはそれそのものが勝敗を分けると言っても過言ではない。古井は空が『久遠の終焉計画』

の生き残りというのを知っている。能力も理解しているだろう。

それに比べて空には相手が恐らく火炎系の能力者であろうと言うことしか分かっていない。この時点で有利不利が分かれているのだ。

（くそ！考える。奴の能力を。あれは発火能力のようであって発火能力じゃない。）

そう考える根拠は古井が放つ炎が余りに自分の炎に似ているのだ。空の能力は簡単に開発出来る者じゃない。地獄を乗り越えてやっと手に入れた「炸裂紅炎」シュートプロミネンス 自意識過剰でも何でもなく発火能力としては頂点に位置する能力で有ることに間違いない。

ならば……

奴の能力を発火能力以外の物と仮定するならば……

突如、ピタリと空の動きが止まった。

「ああ？降参ですってか？」

「違うな、分かったぜ。貴様の能力。何てことはないな。この“猿マネ野郎”が。」

ピクツと古井の眉が歪んだ。

「考えたんだよ。貴様が発火系の能力ではないと仮定してな。貴様の能力はパイロキネシスなんかじゃない。」

ゆつくりと断言する。

「貴様の能力は相手の能力をコピーするだけだ。」

直後クククッ！と笑い声が聞こえた。

「ヒヤハハハハハハハハハハ！！！！」

狂笑は続いた。

「ククッ！ご名答。良く頑張りましたあ！確かに俺の能力は相手の能力をコピーする能力だ。研究者共はA I M拡散力場に部分的に干渉し、本質を探り自らにリンクさせるとか何とか言ってたな。だが、そいつは少し違う。」

自慢気に得意気におもちやを見せびらかす子供のように話す。

「俺は理解した能力ならばその威力を上乗せして使用することが出来る。つ・ま・り、カウンターストライクテメエはどんなに努力しても俺には勝てねえ。

俺の能力『カウンターストライク迎撃干渉』にはなあ！常に相手の上に行く。お前のつまんねえ力はすでに理解した。」

その顔は絶対的な勝利を確信していた。

その能力は必ず相手より強くなる力。負ける訳がない。

だが……

「浅いな。」

それは驕りだと思いきらされた。

「まさか、貴様俺の能力を理解したつもりだったのか？……下らねえ、がっかりだ。その程度で俺を殺そうなんぞ、身の程知らずが。」

それは脆い幻想に過ぎなかった。

ただ単に今まで運が良かった。たまたま勝ち続けてきたただだった。

そんな偶然が積み重なっただけだったと思い知らされた。

ゴバアッ！と空の背中に翼が現れた。

火のように朱く

血のように紅く

絶望のように赤い

厳密に言えば、一見して翼と判断することは出来ない。  
何かドロドロした不定形なものが噴出しているだけだ。

言うなればマグマが直接背中から溢れ、漸く翼の形を為している。  
そう表した方が正しいだろう。

「な…んだよ。その姿はアア！！」

古井は絶叫する。全てを否定するように。信じたくない。しかし、  
脳が拒否しても体がその凄まじい力を認めてしまった。

「悪いが、貴様ごときが理解出来る程俺の能力は浅くねえ！！」

直後、彼を中心に無数の巨大な火柱が展開された。

ドバアアアンツ！

腹に響く衝撃と共に全てを呑み込む荒々しい死刑執行が為された。さつきまで、古井がいた場所は凄惨を極めている。

崩壊では生ぬるい、

破壊でもまだ足りない。“消滅”それでやっとこの場を表現出来る。

抉れ、超高熱で融解された地面はオレンジ色の溶岩となり、迸る熱波だけで、皮膚が灼ける。

辺りにあった建物は一切合切痕跡さえ焼き尽くされた。

当然、古井の生死は確かめるまでもない。髪の毛一本、肉片一つ残さず細胞から完全に消滅し、もはや彼が存在していたという証拠も無い。

この惨状を一人で作り上げた張本人は何の感情も示さず誰に言っている訳でもなく、淡々と呟く。

「これが、“獄炎”の力だ。俺は京<sup>みやこ</sup>を守るためなら怪物にでも悪魔にでもなつてやる。

アイツの平和を奪おうとするクソ野郎は1人残らず、俺が消滅させる。」

とある少女の名を口に出し、もう戻れない真つ暗な道を突き進む決心をつけ、空は更に戦場の奥深くに足を踏み入れた。

未だ戦いは終わらない……

誰が正義と言う訳ではない、反乱を起こした方が悪でそれに立ち向かう方が善。

そんなちやちな理屈ではない。

例え、どんな理由が有ろうと大義が有ろうと血に濡れた彼らは全員が“悪”だ。

それでも尚、大切な者を守るために命を賭けて戦う者がいる。

友の為に覚悟を決めて、戦う者がいる。

闇の薄汚い理不尽から光有る世界を人知れず守ろうとしている者達がいる。

絶対に胸を張って誇れるような事はしていない。結局の所、やっている事は負と破壊の連鎖だ。

だからこそ、彼らは“英雄”とは呼べない。彼らは人に憧れられるようなヒーローではない。

彼らは皆が十字架を背負い、業を抱えて傷つきながらも戦い抜く“ダークヒーロー闇の英雄”だ。

己が自己中心的な正義を胸に戦いは更に苛烈な物になっていく……

勝者は存在しない。

生き残るのと勝利は根本的な意味で違う。

それを充分に理解しながらも、空は前線に身を投じる。

赤い光が爆発し、また命が消えた。

戦争はまだ終わらない。

「残念だが、俺は容赦も加減もしない。全力を出させて貰う！」

そして再び、今度は炎剣が振るわれた。

そこから少し離れた場所ではケーブル正規メンバー、射場隼二とバランス正規メンバー、紫藤暁による激戦が繰り広げられていた。  
ガン！ガン！バアン！！続けざまに紫藤の拳銃が火を噴く。

それは全て間違いなく命中した。

だが、射場の体には傷1つ付いていない。

「くっそ、妙な能力だな！」

「何時までも逃げ回ってばかりいないでちっとはかかって来いっつうのー！」

苛立った様子で射場は怒鳴りつける。

そしてどういう理屈なのか一瞬で紫藤との間合いを詰め、拳で殴りかかる。

とつさに後ろに飛んだ紫藤の足元が砕けた。

「とんでもねえなおい！」

更に追撃は続き、避ける紫藤を追うように次々と地面が、壁が砕け散った。

バゴオ！！

一際大きな破壊音と共に飛び散ったコンクリートがまるでミサイルのように紫藤の体を襲う。

それは肉を潰して骨を砕く、それだけで充分殺人的威力を持った一撃だ。

ゴドオオオンッ！と何かにぶつかる音が聞こえ、噴煙が飛散した。

そこにはグチャグチャの肉塊と化した紫藤がいるはずだ。

射場は確信する。

だからこそ彼は驚愕した。

煙の向こうに変わらず立つ人影が有ることに。

「……お前だつて充分とんでもねえよ！」

呆れたように言って、それからニヤリと笑う。

それは冷笑でも無ければ、嘲笑でもない。

単純に好奇から来る笑みだ。

彼は嬉しいのだ。

目の前で置きた現象は好戦的な彼を満足させるに値する物だった。

「いつくぜえエエエエエエー！」

彼は再び拳を突き出す。

正真正銘地面が揺れた。

だが、まだ立っている人影。

「クッ…ハッ！ハハハハハアア！！たまんねえ！」

怪物は獲物の血を求めて暴走する。

残忍で、残酷で、そして狂乱した笑みを顔に貼り付け全てを破壊するその拳を躊躇なく繰り出す。

そしてその中の1つが紫藤の体に命中した。人体如き一発で爆砕されるであろう

それは容赦なく死をまき散らそうとした。

そう、あくまでも『しようとした』

ゴヒュツと空気が裂けるような音がして

紫藤の体が崩れ、衝撃を霧散させた。

一瞬呆気に取りられたような射場の顔面に素早く肉体を通常に戻した

紫藤が容赦なく銃弾を叩き込む。

「……1つ聞いていいか？今、弾丸当たったよな？」

「俺からも聞きてえ。今のどうやった？」

「……」

沈黙が2人を支配し、だが、それぞれの疑問を断ち切るように再び交錯する。

激戦は続く。

## 怪物はその拳を振るう（前書き）

かなり時間が経ってしまいました。

最近スランプ気味で

駄文率も当社比20%増しです。

なかなか終わりません。まだまだ続きます。皆様飽きましたよね。

もう無理と思ったら全力でバックボタンを。

しょうがねえ付き合ってやるぜな方はどうぞこれからも宜しく願います。

怪物はその拳を振るう

ゴドンッ！

何か固い物を砕くような重厚な音が響く。

それに続いて銃声。

破壊と破壊が交錯し、音と音がぶつかり合う。

「逃げる、避ける、攻めには回らず防戦一方か？随分と度胸が無えな！」

相対する紫藤は無言で素早くマガジンを交換し、銃弾を放つ。

バン！バン！バン！

寸分変わらず命中した

その筈なのにやはりダメージが見受けられない。

「ふうんー何かの防御機能が自動的に働いているみたいだな。」  
紫藤は冷静に考察して行く。

その顔に特に焦りは無い。

銃弾を撃つのも攻撃と言うよりも、実験だ。

決定打など最初から望んではない。

ただどう攻撃すれば、どう反応するのか。

迎撃はするか、防御に回るかどうか。

相手の戦闘パターンを知りたいが故の行動だ。

何かの自動的な防御機能があるという事は分かった。

しかし、それだけしか分からない。

なぜスピードが上がるのか？

ただの拳で地面が碎けるのは何故か？

そこで初めて紫藤は先手に回る。

即ち、能力の使用。

撃ち放った銃弾に能力を使用する。

彼の能力は物質透過だが、ただ物質をすり抜けるというだけではない。

正しくは人為的にトンネル効果を引き起こす。

つまり、物質を素粒子単位まで微量に分解するのだ。  
それではその能力を銃弾に使用するとどうなるか？

流石に素粒子単位まで分解すると攻撃にはならないので、砂粒程度に分子結合を崩す。

質量保存の法則では

物体をどう分解しても質量は変わらない。つまり、銃弾はエネルギーを保ったまま、霧散する。

即ち、命中した物体はその身を着弾点から球状に決り取られる事になる。

さながら散弾銃を至近距離で受けるようなものだ。しかも、砂粒単位の物体1つ1つが弾丸。

それを人体に放ったらどうなるかは最早論じるまでもないだろう。ドバンツツ!!

あまりの運動エネルギーで空気が破裂する。

そして

ズバアアアン!!!!!!

視界を粉塵が覆う。

「……ッ!」

そして煙が晴れたその先、やはり変わらず立っている射場の姿を見て、紫藤は思わず声を詰まらせた。

霧散した弾丸が射場の前方数センチメートルあたりで停止している。

それは一発一発撃っていたら気付く事はなかっただろう。

敢えて細かくした事で能力が見えた。

それは紫藤にとっては見覚えが有る光景。

1人の少女が思い浮かんだ。

小柄ながらも空気中の窒素を制御する事で弾丸も受け止め、自動車をも片手で投げ飛ばす絶大な戦闘力。

その少女の名は絹旗最愛。その能力の名は『窒素装甲』  
そう、目の前の光景はその窒素装甲にそっくりなのだ。

「そうか、見えざる力の展開。これなら全て説明出来る。」

拳でコンクリートを砕いた訳ではなく展開させた力で砕いた。  
スピードが上がったのもその力で自らを操った。

言わずもがな弾丸など効果があるはずもない。

「ただただ純粋な力の塊を正確に操作しているのか - 名付けるな  
フォースオペレーター  
ら力場操作って所か？」

「ふん」

鼻で笑う音が聞こえた。

「まあ、及第点って所か。より正確に言えば念動力の一種サイコキネシスだがな。」  
意外にも普通に能力を明かす。

だが、一拍置いて

「で？分かったから何だ？」

射場の全身から殺気に似たいいようもない圧力がほとばしる。

その威圧感はそのらのスキルアウト程度なら睨んだだけで気絶させるだろう。

「言っておくが、俺はまだ全力なんざ出してない。能力の正体が分かった程度でどうこうなる物じゃない。」

つーと紫藤の背中に冷や汗が流れた。

一言一言相手がしゃべるだけで尋常ならざる殺気を感じる。

それは学園都市の闇に浸りきっている彼でさえも戦慄させる程の本能的な恐怖。

「……ッ!!」

ポバンッ!!と音が炸裂した直後紫藤の腹に拳がめり込んだ。

ドゴンッ!とまるでダンプに激突したような衝撃が内蔵につき刺さった。

一瞬間違いなく呼吸が止まった。

「ご……がああアアアああ！」

「ごほ、ゲホゲホ。」

その場で吐血する。

恐らく内蔵のどこかがダメージを受けているのだろう。

地面に赤い花が散った。

「クソッ、何てスピードだよ……」

彼の能力は複雑な演算が必要だ。

それは空間移動に必要な演算の比ではない。

計算をミスすると自分の肉体が崩壊してしまう危険性がある為だ。

故に超スピードでの攻撃は彼にとって最も不利な物となる。

「安心しろよ。そう簡単には殺さねえ。」

もつともつともつと俺を楽しませろよオオオオオ！！」

射場の腕が唸りをあげる。

ヤバイ。本能的に直感した紫藤はボロボロの体を無理に動かして横に飛んだ。

ズパンッ！！

やたら軽い音が聞こえ、一瞬前まで紫藤がいた地面が切り裂かれた。砕かれたのではなく切られた。

「くっ、冗談だろ。」

力場の形状まで操れるってのか？」

そう、今のは力場を薄く鋭く刃物のように形を変えたのだ。

最早射場の能力は手のつけられようがない。

攻撃を完全に遮断する楯となり、目標物を粉々に打ち砕くハンマーとなり、地面をも叩き切る刀となる。

これほど汎用性がある能力もそうないだろう。

文字通り攻防一体

恐らくそれは学園都市に数多ある暗部の中でも最強クラスだ。

勝てる訳がない。普通ならそう考えるだろう。

ただ、無敵に見えるこの能力には致命的な弱点が存在する。

強力な能力になればなる程綻びは大きくなるものだ。

紫藤はその弱点に目星はつけている。

それこそ射場の能力をある程度分析した時からだ。

そして分析した能力が正しいものと分かった瞬間、その目星をつけた弱点は確信へと変わった。

ただ、それを実行に移すだけの時間がない。

（あと少しなんだ。あと少し何か時間を稼げるものは……あれだ！）

紫藤の拳銃が再び火を吹く。

但し、それは射場に向けてではない。

彼より少し下、より正確に言えば彼の足元の地面だ。

ドン！と着弾した場所に小規模な爆発が起こる。

使用された銃弾は爆砕弾頭バーストヘッドと言われる弾頭部分に爆薬が仕込まれて  
いる銃弾だ。

着弾の衝撃と共に爆発する銃弾はその効力を遺憾なく発揮した。  
噴煙が舞う。

それに対して射場は特になんの行動も示さない。

不意打ちをされる可能性もそれはそれで面白いと考えたからだ。

自分の能力に対する

絶対的な自信。

それは微かな油断となる。

時間にしては僅か10秒前後。

しかし、それだけで十分だ。

煙が徐々に晴れていく。

だが、変わらず目の前に立っている紫藤の姿に射場は失望したように、軽蔑したようにチツと舌打ちをした。

「何なんだよテムエは、何をするわけでもなく、打開策も練らずにただその場凌ぎの時間稼ぎかあ？ふっざけてんじゃねえぞコラああアアアアアアア！」

そしてその腕を振り上げた。不可視の力が薄く纏われ、余りの高密度に見えない筈の力場が空気の歪みとなって見える。

彼はこの一撃で紫藤を殺すつもりだ。

久しぶりに楽しめそうな相手だと思ったら、逃げてばかりの腑抜け野郎だった。

それだけで、彼が怒りに染まるには充分すぎる理由だ。

別段彼は善人と言う訳ではない。暗部に堕ちている時点でそれは普通の事だ。

だからといってむやみやたらに殺すような悪でもない。

つまり所、彼は戦いさえ楽しめればそれでいいのだ。

その過程で相手が死んでもなんとも思わないが、生き残っても自分が満足していれば、殺すようなことはしない。

純粹に戦いが好きな怪物。

それが射場隼二だ。

そんな彼が明確な殺意を持って攻撃した。

それは今までの比ではない。完全なる破壊力をもったその一撃は対象を確実に破碎するだろう。

紫藤はその一撃を受け止めるように右手を前に突き出す。

ゴツッ！バツッ！

生み出された風圧は衝撃波に近い。

均等に周りに広がり、そして

ボツッ！！

爆発するような音がして、紫藤の腕が中に舞う。

そう、肘から下が切断されたのだ。

バシャッと鮮血が赤い花火のように飛び散った。

みるみるうちに地面が朱に染まる。

どさつと膝からくずおれる。

当然の事だろう。あれだけの一撃を受けて、まともに立っていられる訳はない。

だが、この状況は間違いなく異常だった。

何故ならば――――

鮮血を迸らせた者は射場で、膝から地に倒れ臥したのも射場だからだ。

本人も何が起きたのか理解していないようだ。

自分の一撃は絶対に命中した。手応えもあった。

なのに何故、紫藤の腕から一滴の血も流れていない？

何故、自分が倒れている？

それに何より何故、自分に攻撃が通じた？

赤い血液を口から溢れさせながら、疑問を浮かべる彼に、その答えは投げかけられた。

「さて、と何やら訳が分からないようだな？ 答え合わせといこうか？」

この戦い勝者は紫藤だ。

そしてその勝者は淡々と回答を述べて行く。

「まず最初に、お前の能力には弱点がある。気づいているのかどうかは知らないが、とりあえず言っておこう。お前のその能力は“外”にしか働かない。」

サツと射場の表情が固まる。

「具体的に言えば体の外側に関しては絶対的な力を振るえるが、体の内側は無防備なんだよ。」

「ま……さか、テメエ……！！」

「そのまさかだよ。内蔵に直接ダメージを与えた。」

「ありえねえ、俺の能力のガードをすり抜けるなんて、不可能だ！」  
ボタボタと血を撒き散らしながら、叫ぶ。

「あまり、興奮するなよ。命を縮めるぞ。それに不可能な事じゃない。俺の能力を教えよう。物質透過ブレイクスルーというものだ。文字通り物質をすり抜けるんだが、これはただの結果に過ぎない。重要なのは過程だ。」

「なん、だと…？」

「トンネル効果を知っているか？」

その言葉を聞いた途端、射場は全てを理解した。決して彼が弱かった訳ではない。そもそも能力の強弱は関係無かったのだ。ただ単に相性の問題だ。

「物質を素粒子に分解する……か？」

「そういつ事。素粒子程細かい物体をどうやって防ぐっていうんだ？」

「じゃあ、その手は……」

「そう、わざと切断させた。そしてお前の内蔵に打撃って訳だ。」

そう言っている間にも紫藤の腕が元に戻っていく。まるでビデオテ

ーブを巻き戻すように、正確に。

若干グロテスクだが、元の腕の形を取り戻した。

「じゃあ、終わりだな。」

そのまま立ち去ろうとする。

「待てよ！殺さないのか？トドメを刺せよ！生かしておけば、俺は絶対にお前の災いになるぞ。」

「そうかもな。だけど俺は出来れば殺したくない。そう自分に誓ったんだよ。」

最後の言葉は言い知れない感情を秘めていた。彼にもあるのだろう。『闇』に堕ちた理由が。

だが、その感情さえも塗りつぶし、真つ暗闇の道をひたすら突き進む。決して光で照らされる事はないと知りながら、それでも彼は戦う。

闘って、戦って、そして光を守る。

昔のただ1つの約束を胸に秘めて……

未だ激しく動く戦場へ。

## “力”の意味（前書き）

凡そ2ヶ月強のサボリでした。今はいろいろ忙しく、恐らく落ち着くのは1年後だと思っています。

これからもちまちま書いていきますが、かなり遅くなります。

## “力”の意味

「チツ、きりが無い。やはり数の上では奴らに分があるな。」

二本のロッドを振るい、襲い掛かってきた2人を打ち倒してうんざりしたように月夜は呟く。

風が荒れ狂い、焰が舞い、閃光が飛び交い、爆音が轟く。

刀が振るわれ、弾丸が弾け、火花が飛び散る。

圧倒的な力は確かにある程度の戦果は出しているが、それでも壊滅させるには程遠い。

元々の物量では完全に“処刑部隊”の方が上回っているのは事実。

そして、仮にも最強クラスの組織に位置する分容易く攻略できないのもまた事実。

その都度その都度で戦術を変えて陣形を変えて応戦するその姿に敵ながら感嘆の意を持てる。

だが……だからと言って彼らが勝てるという保証ではない。

どんなに訓練されていようが

どんなに潤沢な兵器を所持していようが

どんなに数がいようが

――所詮はレベル0（無能力者）の集まりだ。

それに比べてこちらは数こそ劣るもののレベル5を2人、レベル5に相当する能力者が1人、後は全てがレベル4のような高位能力者といったそうそうたる集まりだ。

正に少数精鋭と言った言葉をそのまま表していると言っても良いだろう。

――だからこそ負ける要素などどこにもない――

彼らは誰もがそう思っていた。

決して自意識過剰などではなく、実際にそうだったのだから。

だが…

“処刑部隊”は暗殺を専門とする任務の性質上能力者がターゲットに含まれることもある。

当然その中には高位能力者もいた。

それ故彼らは能力者に対して何の対策も持っていない訳がない。

考えるべきだった。

その可能性を講じておくべきだった。

無能力者（レベル0）がいつまでも遣られ役ではないということに。

その点だけ見れば、月夜達は甘かった。

油断していた。相手が格下だと最初から決め付けていた。

ガクンツと唐突に月夜の速度が落ちる。

その異常は彼だけではない。

周りに吹き荒れていた突風が収まった。

飛び交っていた閃光が消失した。

そう、今まで使用していた圧倒的な武器が、能力が失われた。

「……なに……！？」

予測していない状況に思考が停止する。

そして彼らは見た。

“処刑部隊”の後方に控えていた工作車両に搭載されている幾つかの機械を。

「しまった……キャパシティダウンか……！？」

刀を振るう天聖がそれを口にする。

キャパシティダウン。それは特殊な音波により能力者の演算を妨害し、能力を停止に追い込む。

言うなれば最強を最弱にしてしまう科学技術。

「嘘だろ！奴らそんな物まで……」

その言葉は最後まで言えなかった。

複数の鋭い音が聞こえた。

それは“処刑部隊”が携えた重火器が一斉射撃を始めた音だった。

能力を失い、最早ただの少年少女になってしまった月夜達に彼ら“処刑部隊”は容赦などしなかった。

轟音が耳を叩く。

全ての銃弾が叩き込まれた。

回避する暇など有るわけではない。

月夜達がいた方向に銃弾が叩き込まれたその場所に赤色が飛散した

- - -

「おやおや、もしかして苦戦って奴ですかね？」

『ケーブル』正規メンバー日向御陰は揶揄するように言葉をだす。

彼の周りには無数の小さな鉄球がヒュンヒュンと音をたてて旋回していた。

その内の1つが超高速で射出された。

続いて更にもう一発。更にもう一発。

まるでマシンガンのような猛攻に『バランス』正規メンバー桐谷ユウは苦戦していた。

「何なんだこれは……サイコキネシス念動力……？」

それが聞こえたのか僅かに唇を曲げて微笑する日向。

「そう思いますかね？違いますよ。私の能力は磁力操作。<sup>バレットゾーン</sup>その名の通り磁力を操る力です。だからこそこんなことも出来るんです、よっ！！」

「ガああアアアア！！」

突如苦しみ出す桐谷。

見ると彼の体の表面が不自然に波打っている。

「血液には鉄分が含まれてますよね？その鉄分を操作する事で血流をも操る事が出来るんですよ。」

ゾクツと激痛に身を裂かれるような状態の中桐谷は寒気を感じた。

何気なく言われたその言葉。

血流を操れるというその意味。

もしも血の流れを逆流させたら、戻って戻って最終的に心臓に行き着く。

そこに体中の血液が集約したらどうなるか？

答えはいたって単純。

許容量を超えて破裂する。

即ち、全身から血飛沫を撒き散らして死亡。

そして今この場でそれを言うという事はつまり、お前如きいつでも

殺せるという意思表示。

「ぐっ、くそッ！」

桐谷を痛みをこらえて数歩引く。

すると不意に全身の激痛が消えた。

体の中を何かが駆け巡るような不愉快な感覚も消滅した。

「そうか……血流が操作できる範囲には限界があるな、そうだろう！」

「……まあそうですね。間違ってはいませんがそれが何か？確かに血流操作は私を中心とした半径10メートル以内の範囲内に限りますが。だからといって別に私の優位には変わりありませんよ。」

言葉と同時に、音速に近い速度で放たれた鉄球が桐谷の足元を大きく穿つ。

「離れたら離れたで攻撃方法があります。磁力で鉄球を飛ばせば音速に近い速度で放つ事も出来る。原理としてはコイルガンに近い物でしょうか？」

「厄介なのは血流操作だけ。しかしそれが制限付きなら気にする必要は無いな……それと最後に1つ……」

「……遠距離戦なら僕も得意だ。」刹那

日向の周りを旋回していた鉄球が全て叩き落とされた。

真ん中から真つ二つになった状態で地面に転がる。

まるで鋭利な何かで切り裂かれたようなその切り口。

「1つ僕的能力を教えておこうか。そつちだけ知らないと言つのも不公平だからな。僕的能力は移動切断ムーヴカッティングと呼ばれている。瞬間移動から派生した能力だ。」

桐谷の周りの空気が不自然に歪む。嫌、空気と言つよりも空間そのものが歪んでいる。

それこそが上位の空間移動能力の特徴。

物体が現れる予兆としてその場の空間が軋むのだ。

「ところで空間移動能力のレベルの基準を知っているか？通常なら自分自身を移動する事が出来たら、レベルは4だ。因みに僕のレベルは4。」

「……だからどうしたって言っんですかね？私だって4ですよ。」

「おかしいと思わないか？」

日向の言葉を遮るようにしてそれを口にする。

「僕は一度も自分を移動させてないんだよ（……………）  
……………」

ハッと日向の顔色が変わった。

「僕は自分を移動させる事は出来ない。そこで何故レベル4に認定されたか……。それはある特徴からだ。」

「特徴……？」

「僕は質量のきっかり半分を移動させることが出来るんだよ。上限は無い。ただ触れた物質の質量の半分のみを移動する。」

「つまり……触れさえすればどんな巨大な物でも、半分だけなら飛ばせるんだよ。」

そこで日向は気付いた。何気なくビルの壁にもたれるように話しているその姿。

今、目の前にいるこの少年はビルに触れていると言えるのではないだろうか？

今の話が本当だとしたらこの巨大なビルさえも彼の武器だ。

「さて、何なら受け止めて見るか？ なーにこいつは鉄分の塊だ。磁力操作なら十分対応出来るさ。まあ重量に換算してざっと数百トンつてところかな？」

そして、一瞬で巨大なビルの上半分が消失する。

磁力操作を最大限まで使用すれば、受け止める事は出来ずとも、落下のスピードを緩めてその間に逃げる事も出来ただろう。

実際そうしようとした。頭上に現れた巨大な鉄の塊に能力を行使する。

だが、

逃げる事は出来なかった。

何故なら日向の膝から下が切断されていたからだ。

ガクンとバランスを崩した所でその事に気付いた。痛みよりも先に驚愕を覚える。

これこそが移動切断ムーヴカッティング触れさえすれば例え紙だろうが、ダイヤモンドさえも切断出来る。

今、桐谷はあらゆる物に触れている。手はビルに、足は地面に、皮膚は空気に。その全てが彼の武器だ。

赤い鮮血が迸り、その顔が遅れてやってきた激痛に歪む。

直後数百トンもの鉄塊が日向の肉体を叩き潰した。

彼が最後に見た物は頭上に広がる無機物の集合。最後に見た色は自らが流した血液の真紅。

そして最後に感じた感覚は全身の肉が、骨が、内蔵がぐしゃぐしゃに潰される激痛。

それを最後に意識は闇に消える。

「残念ながら僕は敵を生かしておくような温情など無い。敵対した。だから殺すし、だから潰す。罪悪感や後悔など下らない感情はとつくに死んだよ。」

それは誰に向けた言葉だろうか？

今し方葬られた敵に対してか、或いは自分の存在理由の再確認のためか――

恐らくは『バランス』の中で最も残忍であろう人物。

桐谷ユウ。

彼は戦いが好きな訳では無い。殺しが好きな訳では無い。

ただ単に、それ以外に自己の存在価値を知る術を知らないだけだ。

桐谷ユウ。

『バランス』の中で最も残忍で、そして最も哀れな少年。

彼の進む先で、再び鮮血が散った。

“獄炎”の名を冠す者（前書き）

タイトルと内容は関係薄いです。そして短いです。更にクオリティは低いです。

なんかもういろいろとすみません。一向に文章力があがる気配がありませんがそれでも読んでくれる皆様に心からの感謝を。

## “獄炎”の名を冠す者

立ち込める硝煙の匂い、夥しい数の薬莢が地を打つ金属音。

戦車ですらスクラップに変えてしまう程の弾幕は、間違いなく能力が使用できない『バランス』及び『アイテム』メンバーの全てに叩き込まれた。

その猛攻に赤い色が四方八方に飛散している。

- - ただし

その赤色は鮮血の色でも無ければ、肉片の色でもない。

それは炎。

紅蓮の炎と呼ぶに相応しい真紅色。

それが彼らの周りをヴェールのように囲み、全ての弾丸を受け止めたのだ。

熱に耐えきれず徐々に融解していく弾丸。

地に滴り落ち、シュツと音を立てて赤い線を作る。

しばし、沈黙が辺りに満ち渡った。

余りの異常事態に思考が回らないのだ。

特に“処刑部隊”の動揺はかなりのものだ。

「崩れたな、処刑部隊。」

その声の方を見ると、腕に先ほどの炎と同じ真紅色を纏い立っている空がいた。

「ま……さか貴様が……！？」

茫然自失の体で処刑部隊の1人が問いかける。

有り得ない。

キャパシティーダウンは今も正常に起動している。

なのに、何故目の前の男は平然と能力を使用しているのだ。

「どうやら相当不思議なようだな。能力が使えるのが。……そうだな今更隠す必要はない。俺は『久遠の終焉計画』の被験者だった。」

それを聞いた途端、処刑部隊は少なからず驚愕した。

その言葉は裏で生きる人間ならず知っている。非人道的で残忍過ぎた実験として。

「内容は演算能力を強化する事で、能力そのものを強化するといったものだったが、本質はそうじゃない。」

「自分だけの現実を最適化して、固定する。それこそが、この計画の真髓だ。――つまり、俺の演算は（・・・・・・）外部からの（・・・・・・）干渉を受ける（・・・・・・）事が無いんだよ（・・・・・・）」。

同時

キャパシティーダウンが搭載していた工作車両ごと燃え上がった。

重低音の爆発は地を震わせ、吹き上げる熱波が空気を焼く。

「思い出した。あらゆる発火能力の頂点に立つ者。そいつが操る炎は火力から速度、破壊力まで全てが桁違いで未だ原理が分からない。その炎の名が『獄炎』インヘリアルフレイズ。全てを無に帰す最強の炎。」

誰かがそう言った。

瞬く間に広がっていく絶望感。

「終わりだ……」

誰かが呟いた。

戒めから解き放たれた彼らを止める術など無い。

圧倒的優位性が存在する戦争が再び始まる。

- - - - -

片や大規模な戦闘が始まっている中、少し離れた所でも戦闘が行われていた。

こちらはキャパシティードアウンの効果範囲外だったらしく、特に能力使用に支障は無かった。

が、それを含めても状況は劣勢。

『バランス』北条鈴音と『ケーブル』桜井京香の戦いは桜井の一方的な攻撃によって続いていた。

ビシュツと桜井のナイフが北条の腕を薙ぐ。

北条の顔に苦痛の色が歪んだ。

見れば体のあちこちに切り傷が刻まれ、出血している。

「うつツ……」

腕を押さえて、声を上げる北条。

片手の拳銃も今や力無く下がっている。

「あははははッ！他愛も無いって言うのはこの事かしらね！！」

再びナイフを振りかざし、数メートルもの距離を一瞬で縮めて今度は切るのではなく突いてきた。

間一髪でそれを避けるも、もはや痛みで上手く動く事は出来ない上に演算に集中出来ず、能力もまともに使えない。

片手で拳銃を構え、撃つもろくに照準もあっていないので命中することもなく、見当違いの方向へ飛んで行く。

「そろそろ終わりにするわ。少しってか、かなり痛いけど頑張っ  
てね？」

直後。

無数の斬撃が身を襲った。

刃渡りが短いナイフだからまだ致命傷には至っていないが、それでも猶予は無い。

このままでは失血死する可能性だつてある。

「……仕方有りませんね。一か八かやってみましょう。」

更に発砲。

だが、今度の弾丸は殺傷能力は無いただの煙幕弾だ。

少しの間集中する時間さえ得ればそれでいい。

煙幕は数秒程空間を満たした後に溶けるように消えた。

桜井はそこで微妙な違和感を感じた。

何なのだと問われてもはつきりとは分からない。

まあいいかと自分で納得して、目前に立つ標的ターゲットを確実に殺す為に能力をフルに使う。

そして、消えた。

一瞬で北条の眼前に迫り、ためらいなく心臓までナイフを突き入れ決るように捻る。

だが、やはり何かがおかしい。

そもそも人間の肉というのはこつも簡単に刺し貫けるものだったか？

こつも簡単に内臓に刃が通ったか？

直後桜井の背中が突然焼けた。

「くッ、あああああああ！！」

たまらず苦悶の絶叫をあげ、膝からその体がぐらりと傾ぐ。

「蜃気楼ですよ。意外と気付かないんですね。何だか暑いと思わなかったんですか？」

それだ。

桜井は今理解した。

先ほど感じた微妙な違和感。

妙に暑かったのだ。

まるで真夏日の太陽光を直に浴びるように。

だが気付いたとしても対処できたかと言われれば答えはNOだ。

というより気づく奴がいるのだろうか？

少しかり暑いと感じた位でここまで深読みする人間などがいたらむしろ気味が悪い。

「な……んで、私が攻撃する瞬間が分かったの……？」

火傷の痛みにうめきながら、疑問が口に出る。

「分かりませんでしたよ。」

実にあっさりと言葉は返ってきた。

「なッ……！」

「見えるわけじゃないですかあんな動き。ただ、攻撃を予想していたに過ぎません。」

「どういう……？」

「あなたの動きは確かに早い。本当に一瞬ですよ。最初は空間移動の類だと思ったんですが、もしそうなら私の体内にナイフを転移させればそれで終わる。結果別の能力だと考えるのは普通でしょう？」

淡々と冷静に続ける。

「あなたの動きは実に単調です。常に正面から攻撃して来る。だから、罠をはらせてもらいました。あなたの攻撃予測ポイントの空気を加熱しておいたんです。」

そこで初めて北条は笑った。心の底から凍りつくような冷たい笑み。ゾクツと桜井は明確な殺気を感じた。

「個人的な興味なんです、最後にあなたの能力は何ですか？私はエアリアルヒート空力加熱と言っていますが……。あなたのは実に珍しい。単純に肉体強化系では無いようです。」

その目は好奇心に満ちている。先ほどの殺気が嘘のように、まるで邪気が無い。

「……クイックアクト瞬線移動よ。私は自分の体を中心に直線状なら超高速で移動出来るの。」

「そうですか。なかなか面白いですね。――それでは私はここで。」

それだけいって立ち去ろうとする。

殺されるとばかり思っていた桜井は思わずは？と間拔けな声をあげた。

「ちょっと！殺さないの？私はあなたの敵で、そして負けた。生かしておく理由なんて無いじゃない！」

「分かってますよそれ位。でも、私は一度だけチャンスを与えるようにしているんです。もう一度やり直せるように。――ただ、そのチャンスを捨ててまた私の敵となるのなら……その時は確実に殺します。」

北条鈴音。己のルールに忠実に従う人物。故に、無闇に命を摘み取る事はしない。

――ただし、それは優しさや甘さなどでは無い。

もし、相手が自分が与えたチャンスをかなぐり捨てて向かって来るのなら彼女は何のためらいもなく殺すだろう。

ただ、独自の価値観で動きそこに感情は挟まない。

ある意味では一番恐ろしい人物だ。

これにより『ケーブル』メンバーは2人死亡。2人負傷。事実上壊滅した。

戦争はついに佳境を迎える。

筈だった――

災いを為す者（前書き）

今日は休日だったので書き上げました。

内容はなんかもうありきたり！

## 災いを為す者

轟ッ！！と唸りをあげて巨大な火球が空気を灼く。

それは一直線に敵の駆動鎧バードスーツを数体纏めて貫き、爆破させた。

その爆風だけでも、鋼鉄で出来ている筈の超兵器をまるで紙屑のよう  
に吹き飛ばす。

余りにも圧倒的で余りにも一方的。

秒間数千発といわれる異常なまでの速射能力を持つ重機関銃を装備し、小規模な爆発を起こす事で、機動力にも揺らぎは無い、完全に戦闘特化型のそのモデルが紅蓮の炎に蹂躪されていく。

赤い爆発が幾度となく起こり、炎剣が振るわれる毎に両断される戦闘兵器。

しかし、その戦場に小さな変化が訪れた。

男が1人現れた。

微小な変化だが、どこか奇妙な圧迫感を感じさせる。

何だか常に心臓に剣を押し付けられているような、拭っても拭ってもとれない殺気。

その男はここに置いて何の装備も見につけていなかった。

その男はまるで闇をそのまま切り取ったかのように黒づくめだった。そして、その男の手には金属製のグローブのようなものがはめられていた。

- - - 戦場に変化が訪れる。

その男が現れた瞬間“処刑部隊”の士気が再び上がった。

彼らのサブマシンガンから絶え間なく弾丸が吐き出される。

変化が訪れる - - -

その男が軽く指をあげる仕草をした。

それだけで

空の炎を飲み込む大地を揺るがせる程の大爆発が巻き起こる。

「あいつは - - - ! !」

バランス、アイテム勢が息を呑む。

突如現れた謎の人物。強力な能力らしきものを行使して、圧倒の更  
に上に行く男。

「奴は - - -」

唇を歪ませて、空が言葉にだしたのはとある肩書き。

「処刑部隊」隊長つくもとせ九十九空歳」

その意味は率直な話“処刑部隊”最強。

如何に無能力者の集まりだと言っても、兵器に頼るただの人間と言つても

それでも彼らは暗部最強クラスの特特殊部隊。

純粹な戦力のみで換算すれば一国と戦争さえ出来ると言われる組織。

そのリーダー。容易く攻略できる訳が無い。

事実、拳を振り上げ地に叩き付ける。それだけの動きで

ドゴォ！と轟音の後にクレーター状に陥没した地面。

幾重にも罅が走り、そのものが抉れた。

『ケーブル』メンバー。射場隼二も似たような事をしていたが、それでも規模が違う。

「さて、此処までだ。中立者共。悪いが殺させて貰う。」

初めて発されたその声は予想に反して若い。恐らく20前後だろう。だからこそ余計に警戒心が湧く。

「あれは…間違い無い。起動している。」

不意に空が苦虫を噛み潰したような面持ちで呟いた。

「学園都市最高機密レベルの特殊兵器HSEDW-00」フォーストエリミネート  
『強制終了』  
。」

同時、更に爆音が響く。それは九十九が手から巨大な火球を撃ち出した音だった。

持つものに圧倒的な力を与える最強の兵器が振るわれた。

実に短絡的に

実に単純に

実に純粹に

それは自らの存在理由を遺憾なく証明した。

つまり、完全なる破壊能力。

強制的に終了させる者が起動した今、王者はいつまでも王座についてはいられない。

まず始めに戦辺空が吹き飛んだ。

状況を認識する前に次々と戦闘不能に陥る『バランス』、『アイテム』陣営。

ある者は吹き飛ばされ、またある者は血を撒き散らしながら倒れて行く。

あっという間に立っているのは月夜ただ1人となった。

「終わりだ。」

静かに呟くのは、処刑宣言。

目標を完全に殲滅する。故に“処刑部隊”

そして、その腕が真っ直ぐ照準を月夜に合わせる。

それだけで何が出来るかと思う者も少なく無い筈だ。

見た所何も手にしていない。

ただただ空っぽの腕を真っ直ぐ延ばしているだけだ。

だが、

先ほどの攻撃を見たからこそ分かる。

何も武器を持っていない？笑わせる。

既に持っている。最悪の兵器を、銀色のグローブを。

何が出来るかだと？笑わせる。

何でも出来る。

それは証明された筈だ。

拳を地に叩き付けた後、地面はどうなった？

砕けた地表が充分語っている。

手から放たれた火球はどうだ？

チョコレートのようにドロドロに融解したコンクリートが見えないか？

その延ばされた腕は延長線上に均等に死をばらまく。

放たれたのは青白い雷光の槍。

電圧にして数億ボルトを誇るそれは学園都市のレベル5『レールガン超電磁砲』  
とほぼ同じ威力を誇る。

命中したその場所に球状に青いプラズマが発生した。

弾かれた大気はもはや衝撃波の領域に達している。

これでは死体を確認するのも面倒だ。ちゃんと（・・・・）パーツ  
が揃って（・・・・）いるのかも（・・・・）分からない  
のだから（・・・・）

ふうつと気だるそうにため息を吐きながら周りにいた部下に処理を指示しようと振り返る。

直後――

部下達が全て一瞬で吹き飛んだ。

亜音速に達したその身はいくら装甲服を身に付けているといっても全身の骨は砕けるだろう。

そして、九十九の背中から挟んで心臓の位置にロッドが突きつけられた。

ただのロッドではなく今は振動カッターのようなものだ。

軽く腕をひねるだけで人肉など豆腐のように突き抜ける。しかし、具体的に死を突きつけられているにも関わらず、九十九は動揺するどころか薄く笑みさえ浮かべ微動だにしない。

「なる程なる程、どうやら間違い無いな。赤桜の『物質加速<sup>オーバーアクセラ</sup>』。君はもともとこちら側の人間では無いはずだが……？」

「――助ける為だよ。僕の友人を。」

「ふつ、下らない。いいのか？死ぬ理由がそんな安いもので。」

「充分だろう？それに僕は死なない。叩き潰されるのは――」

ロッドをもう一本携え、構える。グリップにあるスイッチを押すと中から刃が出てきた。

特注品として様々なギミックを施した結果、仕込み刀のようになったのだ。

今や2本の振動刃となった武器を両手に持って告げる。

「――貴様の方だ。」

踏み込みの速度に耐えきれず、月夜の足元が爆ぜた。

そのままその刀を振り下ろす。

一閃

ザギイイイン！

金属と金属がかち合う音が響いた。

二閃、三閃

ガツガリガリガギギギイイン！！！！

火花が散った。

何時もは穏やかな月夜も今は内心腑が煮えくり返るような思いだ。今まで感じた事がない猛烈な怒りがアドレナリンを増幅させて軽い興奮状態に落ちる。

相手がどんな兵器を手にしていたとしても、当たらなければ意味はない。

月夜の速度があがった。残像さえも残さずに、刀が振るわれる。

単純な話パワーはスピードに比例する。

スピードがあがればあがる程威力があがる。

今の速度からすれば恐らく切れる以前に弾けるだろう。

この時ばかりは冷静な判断力を失っていた。

恐らく殺してしまうだろうことも些末な事に思えた。

だが、その刀が体に届く事はなかった。

厳密に言えば体には当たった。しかし、その先のアクションに移らない。切れもしなければ、弾けることもない。

月夜は見誤っていた。

フォースドエリミネート  
強制終了の本質を。

あらゆるエネルギーの変換、及び転送。

それは知っていた。

ただ、その効果範囲は手だけだろうと思いついていた。

そうではない。

本当に恐ろしいのは、そのグローブをはめた瞬間から肉体を頭部から爪先まで360度全方向に力場変換フィールドが覆うことだ。

ただし、そのフィールドは本体のように指向性はなくただ与えられたエネルギーをゼロにするだけだ。

と言っても脅威であることに変わりはなく、単にそれそのものには殺傷能力がないだけで、防御の面言えばあらゆる物理的攻撃の完全シャットアウト。

更には本体の腕が生み出すのは巨大な破壊力。

何のことはない。

彼、九十九空歳にとって部隊というのはあくまでただの労力であり、戦力ではない。

敵勢力の殲滅だろうが、他国との戦争だろうが彼1人出陣すればそれで事足りる。

後は勝手に戦果があがっていくだけだ。  
これが最強。

飛び抜けた科学技術はとうとう化け物を生み出すにまで至った。  
サイエンス・テック・ロジー

力の差は歴然。

まともにやれば勝てる訳はない。

そして、負けることはそのまま命を失う事に直結する。

それでも月夜は笑っていた。

絶望から来る喪失の笑いでは無ければ、単純に好機からの笑いでも無い。

それは深い深い空っぽの笑い。

躊躇いもなくした笑い。

「笑わせる。あらゆる原子を支配下に置くこの僕に適うとでも？」

「適うさ。」

短い一言の後に円上に透明な壁に近い衝撃波が広がっていく。

ドン！ ドガァーバン！

断続的に音が聞こえた。

そして、空気が否、空間そのものが揺らぐ。

急激な粒子加速による大気の歪み。

膨大なエネルギーは不可視の塊となって月夜の腕に集約する。

ブレイカーソニック  
「破碎加速」

紡ぎ出されたのは己の異名にして、物質加速の代名詞。

あらゆる加速系統の能力の頂点に立つ者の破壊力。

腕に集約されたそれを一気に解き放つ。

余波だけで、周りの物を粉々にして九十九目掛けて飛ぶ。

閃光が一瞬だけ見えた。

刹那――――

音が消えた。

莫大なエネルギーそのものは強烈な光を撒き散らしながら、空間を蹂躪する。

これこそが<sup>ブレイカーソニック</sup>破碎加速その真髄は広域攻撃能力にある。

これこそが学園都市レベル5現第三位の威力。

対象を肉片どころか、細胞レベルで粉碎する死神の一撃。

ゴオオオオオオオ

静かにその場を余波による大気の乱れが風となって駆け抜けた。  
じつと見ていた月夜の眉が微かに動く。

「嘘……………だろ……………？」

今度ばかりは余裕は完璧に消え失せる。

見えてはいけない物が見えた。

粉塵が舞う向こう側に立っている人影が見えた。

轟ツと短く鋭い音と共に烈風が煙を切り裂く。

そこにはいた。

奴が、確かに無傷ではない。

所々に切り傷のようなものができていて、血が流れている。

だが、それだけだ。

そもそも人の形を保っている事、それで充分驚嘆に値する。

バシィ、と両手のグローブを打ち鳴らして歩いて来る。

奴が、九十九空歳が正真正銘の死神が、

災いは撒き散らされる。災害に人間の意志は関係ない。

恐れも怒りも全てを飲み込んで無に返す。

九十九はもうそれ位のレベルだ。

「殺戮の時間だ。3分で上下左右に引き裂いてやる。――ふざけやがって。切って、裂いて、抉って、潰して、ブチ殺す――！」

ビュオッ！

全てのベクトルを運動エネルギーに集中することで、音速の2倍程の速度でその体は放たれた。

拳を振りかざし、憤怒に染まった怪物が真っ直ぐ月夜を狙って。

-  
-  
- 夜の帳が降りはじめた薄暗い空に赤い鮮血が飛び散った -  
-

## never end (前書き)

次でおそらくクライマックスです。いやあ長かった。

此処までお付き合いして下さい。皆様。

出来ればもうしばらく読んで頂けると幸いです。

never end

ボタボタと赤く、重い液体が地面に広がった。

「うあ、があああアアアアアアアアアア！！！」

同時、絶叫が響く。

挟れた右腕を庇いながら、襲い来る激痛に月夜は耐えた。意識が揺れる。まるで頭の中で火花が飛びかっているように、全く思考が定まらない。

「ぐっ、ハア、ハア、ハッ……」

右腕からは絶え間なく血が流れ、どうみても深い傷であろうことは一目瞭然だ。

とっさに加速して、回避していなかったら腕を一本やられていただろう。

「く、くくく、ハハハハハハハハハハ！！！」

狂ったような笑いが九十九から炸裂した。その手には今し方挟った肉片が付着し、銀色のフォームを赤く染め上げている。

「まだまだこんなもんじゃ終わらねエぞ！引き裂かなけりやあ気がすまねエ！！！」

叫びと共にその拳が振るわれた。

一撃一撃が等しく必殺。

月夜がギリギリで避けるたびに、地表が爆発し、空気が裂ける。

「フッ！」

短く息を吐き、九十九の蹴りがまるでハンマーのように月夜の脇腹を捉えた。

ミシミシッと嫌な音が聞こえ、衝撃に耐えきれずそのまま吹き飛ぶ。

「……………!!!!!!」

余りのダメージに体の感覚が誤作動を起こす。

痛みは遅れてやって来た。

「ぐ、うあああああああああ!!」

呼吸する度に全身に痛みの波が広がる。

右腕は潰され、内臓を傷つけられ、肋骨は砕かれて月夜の意識はもうブラックアウトしていく寸前だった。

（……………情けない。一体何の為に此处まで来た。友を救う為じゃ無かったのか？こんな無様にやられて何がレベル5だ、結局誰1人救う事なんか出来なかった。……力が欲しい。今だけ、目の前の敵を倒せるような、全てを守るような、状況をひっくり返すような力が。その結果どうなろうと構わない。命などいくらでも掛けよう。今、此处で全てを失うことになったとしても決して後悔はしない。

ただ、力が欲しい！！！」しかしその心の中の叫びも無駄に終わる。

現実決して優しくは無い。寧ろ有り得ないほど残酷。

祈った位で奇跡は起きない。

願った位で救いなど無い。

世界というものはただただ無情に突き放す。

ゴアッ！と大気をも破裂させるほどの勢いで拳が唸りを挙げた。

まともに喰らえば、原形を留めない肉塊となるだろう。

月夜は己に襲い来る『死』をただ見ることしか出来なかった。

もう動く力も残されてはいない。

振るわれた暴虐に成す術も無く、潰されるのを待つだけだ。

月夜は目を閉じる。そして直ぐに自らを襲うであろう死の感覚を覚悟した。

だがしかし、その破壊は成され無かった。

突如、九十九の体が高速で飛来した何かに弾き飛ばされて吹き飛んだのだ。

深紅の軌跡を空間に描き、熱波を放出しながらそのまま九十九を壁に叩きつけたのは巨大な火球だった。

更にいえば、表面にプラズマを帯びている炎だった。

そして九十九を巻き込んで爆発し、温度にして凡そ摂氏3000度の爆炎が迸る。

地表はオレンジ色に融解されて、マグマと化した。

これ程強力な炎を操る人間など月夜は1人しか知らない。

首だけを動かして、火球が飛んできた方向を見る。

彼はそこにいた。

紅蓮の翼をはためかせ、巨大な火柱を従えて、腕に炎を纏わせた最強の発火能力者である戦辺空が空中に浮かんでいた。

「殺らせねえぞ。絶対に。」

そもそも月夜はあそこまでボロボロにされる理由はない。

こんな事に関わる必要はない。

全ては自分の責任だ。表の人間を暴力や裏切りが支配する『闇』に引きずり込んでしまった。

俺にはあいつを守る義務がある。

それに何より――

大切な友人を殺されてたまるか!!

再び火球を放とうとしたその手が止まった。

奇妙な事に爆炎が小さくなってきている。まるで、爆発が凝縮されて行くように。

普通なら不可能だろうけれども、フォースドエリミネート強制終了なら充分に可能だ。

エネルギー変換。

改めて恐ろしい力だ。それはもう兵器としての力を超えている。

刹那 - - -

先ほど撃ち放ったものと全く同じ火球が轟音を上げて高速で飛来する。

「ッ!? - - -」

間一髪で横に避けると一瞬前体があつた場所をそのままの勢いで突き抜いていった。

誰よりもその威力は知っている。だからこそ冷たい汗が背中を伝った。

あれは万物を灰燼に帰す業火。

触れただけで細胞レベルで灼かれる。

恐怖が無いといえば嘘になるだろう。  
正直な話、体は恐怖に震えている。

それは、人が猛獣の唸り声に怯えるように遺伝子の奥深くにある、  
本能的な恐怖。

「まだ、そんな力が残ってたとはな。」

此方を見上げ、そう呟く。

その動作だけでも、危険信号を受け取るようなレベルが違う最強。

それでも、空は戦うだろう。守るべき者がいる今、逃げるという選  
択肢など存在しない。

確かに万全ではない。ダメージはなかなか深刻だ。  
能力を使用出来るのも持つて後5分程だろうか。  
ならばその僅かな時間に全てを掛ける。

例え、自分の身を犠牲にしようとも。

こんな穢れきった命等幾らでもくれてやる。  
その代わり代償はしっかり頂く。

「うおおおおおおあああああああああ！……！！！」  
吼える。

体中から炎を迸らせ、紅蓮の翼を数百メートルも展開させてそのま  
ま横殴りに叩きつけた。  
圧殺し、炎殺する為に。

続けて巨大な火球を連射して、火柱を叩き込む。

ツツツツツ！！！！

と、音さえも消えた。

強制終了はエネルギーを自在に変換出来る装置。

しかし、所詮は人間が作ったもの。

オーバーテクノロジーの結晶と云えども万能では無い筈だ。

変換出来るエネルギー量は限界がある。

根拠は無いが、そうで無いといけない。

もし、そうで無かったら人間としての次元を超えてしまう。

「はぁ、ハア、ハ、……ゴホッ！」

血が飛び散った。

「ゲホッ、ガハッ、ハア、……」

吐血。内臓が、骨が、そして何よりも脳が悲鳴を上げている。  
翼が徐々に消えていく。

余りにも莫大な能力を一気に使った結果だ。

その反動は凄まじい。

もう、力は残されていない。

反撃は出来ない。これで倒せていなかったら終わりだ……

「ッ！……」

息が詰まる。動悸が早まる。

いた。そこにいた。

最悪の最強は未だ悠然と誰にも届かない位置に立っていた。

「そ……んな、まさか……」

終わった。全てが、何もかもが完膚なきまでに砕かれた。

圧倒的すぎる力に、自らを支えていたものその全てが音をたてて崩れた。

「いい加減、終わりにしようぜ。そろそろブチキレそうだ。」

一気に距離を詰め、運動エネルギーを最大まで高めた蹴りを空に叩きつける。

「ゴハッ！」

更に血を吐く。

体の中で何かが破裂したのが分かる。

もう、保たないだろう。

深く、寒い。そろそろ死ぬのが分かる。

ドッ、ドガッ、ゴッ

響き渡る肉を潰す音も、どこか遠くで聞こえている。

もう、何も感じない。

最後に、どうしても守りたかった1人の少女が頭に浮かぶ。

月夜の顔が、バランスの仲間達の顔が浮かんでは消えていった。

スーッと涙が頬を伝い、意識が薄れていく。

「ごめん、みんな……」

呟く。

「ごめん、京。」

守りたかった少女の名を呟く。

それを最後に意識が消えた。

静かに呼吸が止まり、続いて心臓の鼓動が止まる。

誰が見ても、最早彼に命が宿っていないのは明白。

『バランス』リーダー、戦辺空は死んだ。

全てをぶつけて、最後まで戦いぬいた英雄は命を散らせた……

そして、月夜はそれを見ていた。

友人の死を。

結局救えなかった命を。

憎い。何よりも自分が憎い。

立てよ！今ここで立ち上がらなければ、ただのクズだ。

必死に四肢に力を込めて、ボタボタと赤色を滴らせながらも立ち上がる。

「うおおおアアアア！」

絶叫を上げて再び、今度こそ立ち上がる。

「ああ？まだやんのか死に損ないが！！コイツの二の舞にでもなるか？」

足で空の体を蹴り飛ばす。

「止めるおおオオオ！！ふざけやがってテメエは絶対にぶち殺す。欠片も残さずにこの世から消し飛ばす。」

ふと、九十九は違和感を感じる。

傷が治っているだと？

嫌、傷だけならまだ分かる。何故、破れた服までが（、、、、、、、、）元に戻っている（、、、、、、）？

そこで初めてゾクツと背が震えた。

少年の得体の知れない何かが見えたような気がしたから。

瞬間、少年の体がかき消えた。

「はっ？ - - -」

直後

「うがああアアア!!」

激痛が身を焼いた。

脇腹に刃が刺さっている。

九十九は戦慄する。

いつの間にか少年がいた。

単なる加速とはどこかが違う。

まるで始点から過程を飛ばして、一気に終点へ行き着いたような異様なスピード。

「て…めえ、一体。」

そして、一番の異常は力場変換フィールドを突き抜けたと言つこと。

遂に最終決戦が始まった――

最凶と最速がぶつかる。

「テムエは全てを奪った。だから今度は全てを失う番だ。地位も、そして命も――」

怒りに染まった彼はもう殺しを躊躇いなどしない。

## 道化師は終焉を告げる（前書き）

……長かった。本当に長かった。遂にクライマックスかと思いきや若干の消化不良が……（汗）

そうですね、本当のクライマックスは次話に持ちこしです。だから今回は最終から0.5歩程前ですね。

すみません、本当すみません。いい加減早よ終われやと思われでしようがあと少しだけ御勘弁を……いや、マジで。

## 道化師は終焉を告げる

世界が止まって見える――

月夜が抱いた率直な感想がそれだ。

正直な話、先程の現象は月夜自身にも良く分かっていない。

怒りに溢れ、気が付くと傷が治っていて気が付くと九十九の脇腹に刃が通っていた。

そして今のこの視覚だ。能力を使用すれば確かに似たような光景は見る。副産物的に動体視力が上がるため、物体の行動をスローで捉える事が出来るからだ。

だが、こつも完璧に停止するなどは初めてだ。

周りが全て止まっている中で自分だけが動いている。

まるで生きているのは自分だけのように。

恐ろしく、気味が悪いのは確かだ。

明らかに異常な何かが起こっている。

だが、どこか懐かしく落ち着くような気分でもあった。

これが本当の自分なのだと錯覚するぐらいに。

頭の中は驚く程クリアで、これからの事も何故か分かった。

圧倒的に勝利する。

予測では無く結果だ。今の自分なら世界中を敵に回しても楽に生き残る事が出来る。そんな自信に溢れている。

九十九のような化け物を前にしてもそう思える程、少なくとも今だけは月夜は“最強”だ。

ヒュオッ

風を巻き込んで刀を振るう。縦に一閃。横に薙いで、連続で突く。

お世話にもそれは熟練した達人技には見えない。極端に言えば、ただただ怒りに任せて振るっているに過ぎないからだ。

それでもそれを補って余りある程のスピードがそこにはあった。

手が動いたと思ったらもう、斬撃が襲っている。

例え、相手が子供だとしても機関銃を乱射しながら攻撃してきたら避けることはもとより、防ぐことも不可能だろう。

それと一緒にだ。

未発達の技術を優れた能力でカバーする。それだけで、立派な脅威となるのだ。

「ぐッ、クソ……何なんだ。ここに来て訳わかんねえ進化かよ。 - 畜生、畜生、クソツタレがあああああアアアア!!!!」

「ギヤアギヤア喚く見苦しい。言っただろう？……テメエは必ずぶち殺すつてな。」

普段の彼の性格からは考えられない暴力的な口調がその怒りのレベルを象徴している。

今の彼には、容赦が無い。つまり心理的に制限リミッターが無い。

余すところなく、レベル5としての力を使う事が出来る。月夜は今まで、自分の能力を無意識の内に加減していた。それは彼の性格から来るものだ。無闇に害を為すことはしない。出来れば誰も傷つけないで済みたい。

その優しさが、甘さが失われた今彼を止めるものはもう無い。

再び、世界が彼を残して停止する。

月夜自身はもう理解して来ている。

この現象は何なのか、この力は何をしているのか？

思い返せばヒントはあった。いくら物質を加速出来るといってもあくまでもそれは物理的にだ。

細胞を加速させたところで、再生は早くなどなるはずが無い。物体の経年変化に干渉でもない限り不可能だ。

そう、時間を操作でもない（,,,,,,,,,,,,）限り出来る訳が無いのだ（,,,,,,,,,,,,）

それは人間である限り踏み入る事は出来ない領域の筈だった。当たり前前の事だろう。時間を操作して、事象を変換する。無限にある未来の選択肢を自らの手で選ぶ事が出来る。

不可能を可能に。または可能を不可能に。

状況を切り替え、自由にシャッフルして組み替える。

こんな事が出来る存在を果たして人間と呼べるか？

答えは否。

それはもはや神の領域。踏み入る事は出来ない、そして、踏み入っては行けない。運命と言う抗いようが無い物に抗う事が出来る唯一の道。そしてその領域に今、月夜は最も近づいているのだ。

再び世界は動き出す。何人たりとも反抗出来ない、圧倒的なレベルの違いを見せつけながら。

それはもう反撃と言うよりも蹂躪に近い。

無知な人間に情け容赦無く鉄槌を下す荒ぶる神のように。

哀れみ等無用。

加減は更に不要。

行いには見合った代償を支払わなければならない。

この場合は当然その命を。

相応の事を九十九は行った。

ゴアッ！と余りにも異常なスピードに空気さえも悲鳴を上げた。

衝撃波を伴った斬撃にはどんな物でも障害とは成り得ない。

バギッツ！と鈍い音が響き、微かにごく僅かに、けれども確実に強<sup>フォ</sup>制終了に罅<sup>イストエリミネート</sup>が入る。

瞬間的にエネルギー変換量を超えたのだろう。

今、この一瞬を持って最強は最強では無くなった。

「ふ、ふふふ、ハハハ――ハハハハハハ！」

だが、九十九は何故か笑う。もう彼には場を覆す何かなど残ってはいない筈なのに。

――直後、ズルツとその銀色のフォルムが崩れた。

「なっ……！」

その中から何か黒っぽいオイルのようなそれでいて粘性を持つゴムのような液体が流れ出し、瞬く間にその罅を覆い元に戻った。

間違いなく“再生”した。

機械には有り得ない。非常に生物的な現象だった。

「残念だったなあ！コイツは学園都市の科学技術の結晶。当然損壊した場合の対策も織り込まれてるに決まってんだろ？」

嘗ての完全な姿を取り戻したグローブを打ち鳴らして、悠々と迫る。先程の動揺などまるで嘘のようだ。

それに変わり、月夜は少なからず驚愕した。

再生した。確かに驚く事だが、それよりも異常な事があった。

あの黒い液体はどこから出て来た？

銀色のグローブの下は生身の腕の筈だ。

あんな物を収納するスペースがどこにある。

「なかなかサプライズだったろ？ああそうそう、その表情を察するに俺の腕がどうなってるのか疑問みたいだな？」

言っている間にも今度はグローブの形そのものが変わりだす。全体が崩れて、黒い液体が絡み合い新たな姿を作り出した。

それは二振りの剣。

但し、腕そのものが剣の形をしている本物の化け物のような姿だ。

「確かに俺の腕は生身だ。だが、この状況に置いてそんなものは何の意味もねえ。優れた技術が何時までもクリーンに見栄え良く、恩恵を与ええると思うか？俺の腕は今、コイツと完全に同化している。言ってしまうは限り無く生物に近いサイボーグってところだな。」

それを聞きながら月夜は終始無言だった。

「だから、俺の体をいくら傷つけようと直ぐにコイツに補正される。元々が“裏”の技術だぜ。まともな訳がねえだろ。」

月夜は口を開く。告げた。

それは勿論諦めの意思ではない。しかし、怒りの言葉でもない。

「……お前は本当にそれで満足なのか？」

それは哀れみさえもった純粹な疑問。

「本来の自分を失って“人間”さえも捨ててそんな姿になって満足なのか？下らないプライドの為に全てを滅茶苦茶にしてまで得た物がそんなもので本当に良かったのか？」

「僕は今までお前には憎しみしか抱かかった。だが今では哀れみしか無いよ。今のお前は弱い。力もその意志も、肉体的にも精神的にもお前は弱い。――本当に残念だ。強さに溺れた末の成れの果て、それがお前だ。」

ピタツと九十九から全ての動きが失われた。

「……せえ――」

ザシャツと地面を踏みにじりながら叫ぶ。

「うるっせえんだよクソ野郎オオオオオ！！テメエなんか何が分かる！安全なぬるま湯に浸かって生きていたテメエに何が分かる！――これが“闇”の姿なんだ。今の俺こそがその頂点なんだ。知った風な口きいてんじゃねえぞクソガキがああああアアア！！」

吼える。今までの自分を形作っていたその全てを否定されて、彼の精神は崩れた。

怒りに満ち満ちて戦略も策もかなぐり捨て、真つ正面から一撃を叩き込む。

運動エネルギーに変換されたその元は地球の自転エネルギー。

巨大な地球が自らを回転させる膨大なエネルギーを吸い取り、放たれる一撃は言葉では表せない程の破壊力を誇る。

当然、人間の肉体など粉微塵となる。そもそも人1人にぶつける力ではない。

下手をすれば、核シエルターさえも破壊しかねないのだから。

だが……所詮はそれだけだ。使いようによつては核爆発にも等しい  
それだが大前提として当たらなければ、( , , , , , ) ば意味が無い  
( , , , , , )

そう、スピードと言う概念さえも超越し、時と言う極めてアンタツ  
チャブルなものを現象として制御する事が出来る存在に果たして効  
果があるのだろうか？

そう、それが全てだ。時を操る。言葉で言えばその価値は余り分  
らない。

だが、その本質は世界の理をもねじ曲げる程の最大価値。

パーソナルリアリティにどんな数値を入力すれば、そこまで制御領  
域を拡大出来るかは分からない。

科学では説明不可能な何か起きたのかも知れない。

未知の法則を偶然にも導いてしまったのかも知れない。

不可解な事は数多くあるが、少なくとも1つだけ言える事がある。

今の風宮月夜にそんなチャチな攻撃は通用しない。

物理的に攻撃しようとしている時点で既に負けているのも同義なのだ。

もう一度言うが、彼に情けはもう無い。

だから、容赦しない。

持てる力を全て相手を叩くだけのことに注ぎ込む。

それだけだ。

直後、膨大な爆音と炎熱、爆風と衝撃波が吹き荒れる。

大気が裂けて、超高熱で抉られた地面が発する熱により混ざり合ったそれは炎の竜巻を生み出す。

そして後片も無く、全てを消し飛ばす。

……ハズだった。

「……えっ?……」

思わず声が漏れる。

集めた筈のエネルギーの塊が消え失せていた。

「はっ?」

そして目の前には月夜が肉薄していた。

「て、めえ何をしやがった？」

「いい加減気付いているだろう？お前はそこまで馬鹿じゃない。それとも認めたくないだけか？」

その通りだ。

九十九は気付いている。そして認めたくなかった。というより信じなくなかった。

それを言葉に出した瞬間に、明確に意識した瞬間に全てが砕け散るだろう事が分かっていたから。

だが、この局面で認めないのは最早ただの敗北者だ。本当の意味で負ける。

強さに執着する九十九にはそれは耐えられない。

だからこそ彼は言葉を紡ぐ。

全てを認めるそのワードを。

そう、それは

「ああ、知ってるさ。テメエが時間流に干渉している……時を操作しているってことはな。大方、エネルギーを変換する前の状態に戻したんだろ。」

自分でも奇妙な程冷静になっている。恐らくこれが覚悟を決めた状

態なのだろう。九十九は思考し、構える。

あくまでも戦うつもりだ。

「確かに許すつもりは無いが、今ならまだ殺さずにいられるかも知れない。言っておくが強大な敵に適わない事が分かっていて挑むのは勇敢な訳じゃない。それは無謀と言うものだ。」

九十九も理解している。言っている事は事実だ。自意識過剰ではなく、そうなのだろう。絶対に届かないのだろう。

それでも彼は構えを解かない。逃げるなどと言う選択は最初から無い。降参など論外だ。

最後まで、戦い抜く。戦って、闘ってそして散る。

歪んだ勝利への価値観なのは間違いない。

それでもそれが九十九にとっての誇りなのだ。

決して捨てる事は出来ない守るべきプライド。

その姿を見た月夜は静かに呟いた。

「リミットオーバー  
制限破壊」

演算を2重に行う事で能力その物を倍程度に強化する。

そしてここで強化するのはスピードではなく、自身の最高レベルの戦力。

「ブレイカーソニック  
破碎加速」

そして同時に肉眼で観測出来る程に空間が軋み、歪んだ。

ただただ純粋な破壊の塊。

それが、月夜の腕に纏われていく。

閃光が強まるも、まだ粒子加速は止まらない。小規模なブラックホールが一瞬形成されるほどの力場が構築されていた。

「最後に言っておく。僕は本当にお前をぶち殺したい。後片も無く消し飛ばしたい。トリガーを引いたのはお前だ。末路は受け取れ。そして醜い勝利への執念は決して誉められた方向には無かった。――だが、それでもお前は優秀な戦士だったよ。その誇りだけは本物だった。」

最後に、九十九が笑った……ようだった。初めて見る、嘲笑でも狂笑でもない本当の笑み。

そしてそれは直ぐに莫大な閃光の奔流に飲み込まれていった。

至近距離からの強化された破碎加速。  
ブレイカーソニック  
フォースドエリミネート

とつくに強制終了のエネルギー変換量は超えている。

せめて無様な死体だけは残る事が無いように。非情な行いのようだが、それが九十九への最大限の配慮だ。

道を外す程勝利への執着心が高い彼なら敗北の証拠など、見たくない。

それが分かったから。

- - - 閃光は全てを呑み込んだ。だが、不思議とそれはひどく美しく見える。残酷な程に輝き、あらゆる物を“無”に帰した。爪痕さえも遺さずに - - -

## ラストリポート（前書き）

やっと終わりました。今回は事後報告という事でかなり短くなっております。

今まで、読んでくれた方々に心からの感謝を。

とりあえずこれで一区切りです。次回からは第2章という形で、オリジナルがまだ続くかもしれません。予定は未定です。

それでは、次はいつになるか分かりませんがまた次回お会いしましょう!!

## ラストリポート

「ハア、ハア、ハッ、…」

膨大な力の行使に体力が根こそぎ奪われていくのがわかる。

正直な話今すぐにでも、意識が飛びそうだがまだやらなければならない事がある。

揺れる体に鞭打って進む先は空の亡骸。巻き込んではいないようだが、余波で少しだけ吹き飛んでいた。

これから月夜が彼にする事は世界の理を真っ向から否定する行い。考えによつては最も大きな罪。

しかし、恐らく今しか出来ない。時を制御下に置けているのは今だけなのだから。

- - 彼を生き返らせる。

それは神に唾を吐くような行為だ。生命のサイクルは人間如きが触れて良いような物ではない。

だが、だから何だ？

空が死ぬ事が神が定めた運命<sup>ルール</sup>ならば、そんなふざけた物喜んでぶち壊してやる。

倫理観や、宗教観など関係ない。助けたい、そして今ならそれが可能。

やりたい事があって、それを行う能力があれば実行したいと思うのは至極当然な事ではないだろうか？

躊躇わずに月夜は空の体に手を触れた。まだ微かに温もりが残っている。ここからは己との勝負だ。無限に近い演算処理を今のボロボロの体で果たして耐えられるのかどうか。まさに賭けだ。

呼吸を整えて、集中する。

- - 掴んだ。不可能を可能とする公式、その片鱗を。そこから逆算して全体像を導き出す。

突如、月夜を中心とする空間に異様な違和感が満ち渡った。

見た目には何も変わらない。だが、確実に何かが変化している。

先ず空の服が元に戻った。破れた部分も汚れた部分も最初から存在していなかったように。

次に体中の傷が消失した。切り傷は勿論生々しい打撲痕も。奇妙な事に回帰までの過程が見えない。

…そして目がゆっくりと開かれた。

「…これは、一体？…」

事実が変貌を遂げて偽りへと至った瞬間だった。

「お早う、気分はどうだ？」

言葉はいらない。何事も無かったかのように、月夜は接する。笑みを浮かべて、隠しきれない涙を浮かべて。

だから、空も言葉を返すのだろう。長々した口上は必要ない。最も

シンプルに彼は言った。

「ああ、悪くない。」

視界の片隅には此方へ向かってくる数台の車。2機のヘリ。

- - - 戦争は終わった。被害が0だとはとてもいえた物ではないが、最小限に留める事は出来た筈だ。

これで平穩は守る事が出来た。自分達がどれだけ命を賭けて必死で行動したとしても決してそれが評価される事はないだろう。

だが、それで良い。何も知られる必要は無い。そもそもが他人から名誉を得る為に動いている訳ではないのだから。

極端に言ってしまうえば自分達の為。所詮はその延長線上でこの街を守ったに過ぎない。

「- - - 終わった、か...。」

ぼそりと呟き、力を使い果たした月夜は意識を失った。

- - -

次に目を覚ましたのはベッドの上だった。清潔感が漂う白を基調とした内装。要は病院だ。

「目が覚めたようだね？」

入り口辺りから声が聞こえた。首だけを動かしてそちらを見ると白衣を着た人物が立っている。

「あなたは…？」

「僕かい？僕は冥土返し（ヘブンキャンセラー）と呼ばれている医者だよ。」

冥土返し（ヘブンキャンセラー）生きている限り、患者がどんな状況に至っても必ず救うと云われている名医中の名医。例えば腕がもげようが、内臓が抉れようが完璧な形で治療を行う医療のプロフェッショナルだ。

「まあ、何はともあれ意識が戻ったようで良かった。君は3日の間ずっと眠り続けていたんだよ？」

「3日！そうですか…あの、僕の他に入院している人達はいいますか？」

「ああ、恐らく君が言っている人達ならもう退院したさ。君に比べればかすり傷みたいな物だったからね。…君達は本当によくやってくれたと思うよ。」

「……！、」

「そう、警戒する事は無い。僕は闇という物を知っている。君達は何をしていたのかも、結果がどうなったのかもね。」

飄々とした物言いから、途端に鋭さを滲ませた口調になる。それだけで分かった。目の前のこの人物が自分よりも遥かに 陰を見て来たということ。

「全てを平等に救う事は出来ない。犠牲というのは付き物なんだよ。今回君が何をしたのかは知っている。他に選択肢が無かったんだ。覚えておくといい、人間は常に何かを選んで生きている。最も良いルートを進める者などいない。悩んで迷った末に自らが選んだ道を信じなさい。これは医者としてでは無く、闇を知っている先輩としてのアドバイスだ。」

「これからの道は自分で考えなさい。君が選んだのなら僕は何も言う気は無い。…それとこれが最後だ。君は僕の患者だね？そして僕は患者を決して見捨てない。行き詰まったのならいつでも来なさい。君の心も完璧な形で救ってみせよう。その為に僕は医者になったのだから。」

そう言い残してから彼は去った。助言を与えて、どうするかは自分に任せて。下手な励ましよりもよっぽどありがたい。

「自分の道は自分で決めなさい、か…。ありがとうございます先生…。」

その部屋の中で、月夜はある決断を固める。

-  
-  
-

同じ病院のとある病室。車椅子に乗って窓から外を眺める少女がいた。

傍らには花瓶、新しく入れ替えられたのは水仙の花。この少女が一番好きな花だ。

入れ替えているのは1人の少年。腕には包帯が巻かれている。少女が聞いてみたらどうやら転んだらしい。

その少年は外を眺めている少女に声をかける。

「今日は良い天気だ。京、<sup>みやこ</sup>ちょっと散歩に行かないか？」

京と呼ばれた少女は朗らかに笑って頷いた。少年も微笑みながら車椅子を押し、部屋を出た。京は知っている。金髪で鋭い目をした見た目不良のこの少年が、非常に優しい心を持っていることを。

だから彼女はこの少年を、戦<sup>いくさ</sup>辺<sup>へ</sup>空<sup>そら</sup>を心から信頼している。

今も、今までも、そして…これからも。

……空は京の日常を守った。それはずっと変わることは無いだろう。彼女を守り、彼女の為に戦って、そして必ず帰ってくる。何事も無かったようにいつも通りに彼女に笑顔を見せる。……

例えばそれがほんの一時の平穏だったとしても、だからこそ大切にそ

の瞬間を生きるのだ。

一段落はついた。今だけ守り抜いたこの日常を楽しんでもいいだろう。

- - - 開かれたドアが日光を浴びながら、パタリと閉まった。

## 第2章 疾走する非日常（前書き）

第2章始動しました。

## 第2章 疾走する非日常

「ふう、……」

月夜は空を見上げ息を吐く。2日前に一応退院はしたが、腕と服に隠れていて見えないが、腹部に巻かれた包帯が未だ生々しい傷痕を感じさせていた。

あの医者からは暫く能力の使用は控えるようにと云われた。

思ったよりもダメージは深刻だったらしい。もう、時を操る能力は失われていた。嫌、もしかしたらまだその物は残っているのかもしれないが少なくとも今は使える状態では無い。

本来の物質加速の能力も目に見えて弱体化している。体にかかる負担も増え、医者に言われずとも使いたく無いというのが本音だ。

どうやらあの一回きりの奇跡を起こした代償はかなり大きいものだったらしい。

あの戦いに参加した『バランス』、『アイテム』のメンバー達は怪我也完治して再び活動を開始した。今日もどこかで闇に紛れて動いているのだろう。

“処刑部隊”は隊長を失ったため実質壊滅状態となった。それに関連した『ケイブル』の生き残りは、ブラックボックスに収監された後再編成される部隊に統合される予定である。

反乱を企てたにしては驚く程寛大な処置とも言えようが、上層部の思惑がごちゃごちゃと絡みついているので詳細は分からない。

どうせろくでもない事を企んだ末であるのは間違いないだろう。

それで無かったとしてもこの2人の能力はかなり稀少。研究価値も有る。ただ殺してしまうのは科学的観念から見て惜しい筈だ。

そしてこれをもって月夜の立場は非常に微妙なものとなった。暗部の人間でも無い者が抗争に参加し、あまつさえ敵方を壊滅させたとなつては上層部も処理に困るだろう。

早い内に決断は迫られる。即ち暗部に参入するか、表で一般学生として生きるか。

ただ表で生きるとしても何らかの縛りは有るだろう事はほぼ間違いない。

現に今も監視されている。後方二十メートル程の所に男が1人立っている。一般人の格好をしているが、それが持つ裏世界の特有の気配は隠しきれていない。

何気ない行動に見えるその全てに微かな違和感がある。

今は携帯で電話しているが、口元からは若干離れている。恐らくは襟元に小型マイクが仕込まれている。

それだけでは無い。左肩が少し下がっている所からも懐に銃を所持しているのが分かるし、立っているだけのように見えて重心の配分がきつちりと成されている。

つまりはいつでも戦闘態勢に入れる。

「はあ、……どうしよう。」

当然月夜も監視の存在にはとくに気付いていた。

だが、そんな事は予想の範疇であり余り気にはしていない。

寧ろ目下の課題は、ジャッジメント風紀委員の長期欠勤理由をどう説明するかだ。

正直に話せる訳もないが、かといって上手い言い訳も思いつかない。元々嘘を吐くのが苦手な彼にとって、ごまかしたとしてもすぐバレてしまう。

ぐずぐずと悩みながらもずっと行かないというのも無理なので、177支部に足を運んだがやはり入れない。

ここで冒頭の溜め息に戻るという訳だ。

最早彼の脳内からは監視されている現状など綺麗さっぱり消え失せている。

必死に理由を考えるも、全く出て来ない。この状況の方が彼にとつては何倍もピンチなのだ。

「うだうだ迷っても仕方ない、……行くか。」

遂に意を決して入り口に手をかける。今だけこの嚴重なセキュリティーが時間稼ぎのようでありがたい。

「こんにちは……？」

恐る恐るという感じで、室内に一步踏み入れた所で

「……、！！」

殺気を感じた。思わず後ろに下がり、臨戦態勢に移った彼の前に

「月夜さん、今日は何日だと思っていますの？」

――笑顔で鬼が現れた。嫌、笑っていない。顔の筋肉だけで笑顔の形を作っている。心なしかどす黒いオーラが見えるが強ち錯覚でも無いのかもしれない。

何か物理的に見える程、はつきりとした怒りに冷や汗が伝う。

「いいいいいや、ここ、これには訳がないことも無くなくは無くて

」

余りの恐怖に文法が崩れまくっている日本語が飛び出した。

「何も言わずに、連絡も無く、1ヶ月の長期欠勤。それ相応の理由がきちんとおありなのでしょうね？」

一言一言区切るように話す。

「も、勿論ですはい。実は入院しております……」

まあ、これは嘘では無い。実際に入院はしていた。それでも連絡を

入れなかった理由にはならないが、“入院”というワードは単体でも相手を納得させるには充分の理由だろう。

そして腕に巻かれた包帯の効果も伴ってひとまず理解はしてもらえたようだ。

「まあ、そういう事情でしたら致し方ないですが……、休んでいた分の報告書はお願いしますわよ？」

「了解だ。」

そして自分のデスクに向かった月夜だが、

「……なあ、黒子くん。僕はまだ体の調子が悪いらしい、凄まじい幻覚が見えるんだ。」

「大丈夫ですわ月夜さん。私にも同じ光景が見えていますから。」

……よし、突っ込む準備は出来た。思いっきり言わせてもらおう。

「ふざっけんな！何だこの量！束ってレベルじゃない、山だぞ。比喻抜きでなんかそびえてるもん！えっ、何これ罰ゲーム？」

そっ、そこにあっただのは書類の山。社会人だってこれほどの量を処理する事はないだろうと思える程の圧倒的な厚さ。

「だから言っただけありませんか。1ヶ月分の報告書、始末書、検査書などなど総合すればこれ位の量にはなりますわ。」

「イヤイヤイヤ、普通に考えて無理だろ。もう軽い死刑だぞ。とても一般学生にこなせるレベルじゃない！」

「ま、頑張つて下さいな。大丈夫ですわよ。人間死ぬ気になれば大抵の事は乗り越えられます。手を伸ばせば書けるんだ。まだ終わってねえ、始まつてすらいねえ。ちつとばかり多い書類で絶望してんじゃないえよ、って奴ですわ。」

「おい貴様、どつかで聞いた事があるようなセリフはこの際どうでもいい。……これは何だ？」

束の中から数枚を抜き取つて黒子にそれを示す。

「えーと、始末書……ですわね。」

「だよな、あれ？おかしいなこの始末書の内容、能力の妄りな使用に関するものレポートのようだがどうやら空間移動について書かれているみたいなんだ。」

つーと、黒子の額から冷や汗が流れ落ち目が凄い勢いで泳ぎ出した。

「なあ黒子君、忘れてしまったんだがこの支部で空間移動能力者って誰だったっけ？」

「えーと、誰……でした……っけ？」

「……貴様だよコラア！お前、自分の始末書を僕に押し付けやがってんじゃないか！」

「いひやいいひやいいひゅいまひえんひゅいまひえん！」

その頬を無造作につかみ力任せに引つ張り回すと涙声で謝る黒子。

「ああどうしよう。このまま引きちぎりでもしないと、僕の怒りは収まらないような気がするんだがどうしたらいいと思う？」

若干グロテスクな事を真顔で言い放つ月夜。このままでは本当にやりかねない。

「いやああああ！！本当に申し訳御座いません！」

そんな様子を察したのか、謝罪にもそこはかとなく必死さが混じっている。

「ふう、まあいいや。ほら、自分の分は自分でやれって。」

流石に哀れに思ったのだらう、漸く手を離して彼女の分の書類を押し付けデスクワークに取り掛かる。

- - -

「うああ、終わったー。」

紙の山を全て処理し終わった時には、もう日が沈みかけて来ていた。腕を伸ばして首を回す。ゴキゴキと不健康な音を響かせて、1つ息を吐いてから立ち上がった。

「さて、と……黒子。僕はもう上がらせてもらっ。あ、明日のシフト代わってもらえないか？」

「……バイトか何かと勘違いしていませんか？シフト制を登用している訳は無いでしょう。」

「冗談だつての、んじゃまあお疲れー。」

一声掛けてから支部のドアを開ける。最後に後ろを振り返ると

「黒子。」

「？」

「じゃあな。」

それは何気ない挨拶に聞こえただろう。だが、何故か黒子はその時に妙な胸騒ぎを感じた。

何か目の前の少年と決別してしまうような、もう二度と会えなくなるようなそんな予感がした。

「?…はあ、お疲れ様ですの……?」

だが、予感とは所詮ただの予感。気のせいだろうと決めて返事を返す。

「んっ、そんじゃ。」

開かれたドアがパタリと閉まった。月夜が出て行った後の扉を見つめながら、なかなか収まる事がない胸騒ぎを感じながらも黒子は仕事に取り掛かる。

「何なんですか?この妙な違和感は……。」

彼女の呟きに答えを返す者はいない。

「じゃあな……。」

閉じられた扉の向こう側でもう一度別れを口にする月夜。

ポケットから携帯を取り出しメールを確認する。フォルダに添付されていたファイルに目を通してから1つ息を吐いた。

「選択も決断も軽いものじゃない。選ばなかった未来は潰れる。…それでも後悔はしていない。」

前へ一歩踏み出す。たったそれだけの動作。

だが、明確に日常と非日常の境界線を彼は踏み越えた。

W e l c o m e h e r o c o m e o n o u r w o r l d  
o u r d a i l y .

o v e r t h e l i n e , s t e p t o t h e d a r k .

A r e y o u r e a d y ? O . K . l e t ' s s h o w  
t i m e .

f r o m 『 B a l a n c e 』

## ブラックワーク（前書き）

またありきたり……。自分でも思う位なので、皆さまはもっとうんざりするでしょう。

しかし！どうしても書きたかった。後悔はしません（多分）。

それでは始めます。

- - - ready action!!

## ブラックワーク

ピッ、ピッ、ピーー

与えられたパスを入力すると軽快な電子音と共に扉が開かれた。そのまま月夜は中へ入った。カッソカッソと硬質の床に靴音が無機質に響く。

「よくまあ、あちこちに隠れ家を作れるもんだ。ここの経済力は一体どうなってるんだか。」

呆れ半分、感嘆が半分その呟きに混じっている。

見た目はただの廃ビルに見えたが、その実セキュリティシステムで何重にも固められたその強固さはさながら要塞。

事前にパスを与えられていなかったらもう既に三回は死んでいた。

広い……。

圧倒的な広大さ。それが中へ入ってみてからの率直な感想だ。

流石は学園都市の暗部の中でも最強クラスに位置する組織だけはある。

目を通したファイルによると『バランス』は下部組織まで含めれば、総勢600人以上の大所帯。末端の末端まで数えれば800人にまで上るらしい。

資金力も人員も何から何までが桁違いの上に正規メンバーも精鋭揃い。

逆にいえば、それだけの組織が必要になる程にこの街は敵が多いということだが……。

学園都市とはただの学生の街などでは無い。近代科学を結集させた未来都市という評価もあるが、とてつもなく深い闇を抱え血で血を洗う戦い、暗殺、謀略、裏切り。と数えていけば切りが無い程の負の側面もまたある。

だから彼らが必要になるのだ。目的も行動指針もそれぞれだが、結果として均衡は保たれ世界は今日も廻っている。

しかし、それは非常に不安定なものなのだ。

知っておかなくてはならない。日常が多くの犠牲の上に成り立っている以上、どこかに必ず罅が入る。

軋轢をなくし、均衡を調整し、不穏分子は抹消する。

それが『バランス』の役割。調整者として、中立者としての存在理由だ。

「ま、力でもって力を抑えつけるってのもあんまりいい感じはしないけどね……。」

思考した後、皮肉気味に薄く笑い、奥の扉のセキュリティを解除してから開く。

そして一歩中に入った。境界は越えた。ここから先は『闇』の領域。中で待っていた複数の人影がこちらを向き、その内の1人が口を開く。

「時間通りだな。これをもってお前はこちら側へ踏み込んだ、もう戻れない。……後悔はしているか？」

「いいや、覚悟は出来ている。これが僕の選択であり、決断だ。」

それを聞いてその人物、戦辺空はにやりと笑い、そして言った。

「上出来。……ようこそ『バランス』へ。」

この日、この時、この場所で新生『バランス』は産声をあげる。

\* \* \*

「はあ、はあ、……」

新生『バランス』誕生と同時刻。

学園都市の某所で息を切らして疾走する幾人かの人影があった。

彼らの表情は一樣に恐怖に塗りつぶされている。本当に命の危機を感じている者の顔。

間近に死が迫っている者の顔。

彼らの体力は限界だ。出来るものならばこのまま倒れ込みたい。

しかし、その時点で死亡が確定する。

生き残りたいのならば、動くしかない。

事実、彼らの仲間の1人はつい先ほどに殺された。

目の前で、粉々に弾け飛んだ。

「……何なんだよ一体よお！！俺達は何したってんだよ、何でこんな目に会わなくちゃならねえんだよ！！」

中の1人が涙を浮かべながら絶叫する。

確かに自分たちは善良なタイプの人間では無い、言ってしまうとチンピラだ。窃盗も傷害も起こした事がある。

決して誉められるような存在では無い。だが、だからといって何故急に殺されるような目に会わなければならないのだ。

理不尽、不条理、不公平。

「いいから逃げるんだよ！少しでも早く、少しでも遠いところへだ！このままだったらオレたち全滅だぞ！！」

「でも逃げるっただってどこにだよ！どこにも安全な場所なんてねえじゃねえか！」

パニックに陥って、1人が叫ぶ。無理もない。あんな事になってそれでも冷静でいられるならソイツはまともじゃない。少なくとも彼らのメンタルは限界に達している。

自分の目前で仲間が、残虐なやり方で殺された直後だ。

「みいつけた。」

声が聞こえた。まだ幼さが残る少女の声だった。

同時に前方から現れたのは女の子。普段なら何とも思わない。どう見ても害があるようには見えないからだ。

服装も特に奇抜な面は無い。ジーンズにTシャツといった今時の少女にしてはいささか地味ではあるが、それでも普通の服装だろう。

顔立ちも端正であった。肩までのストレートな黒髪。薄い唇に白い

肌。鼻筋は通って美少女といっても決して過言では無い。

だが

「う、ひい…あ、うわあああああああ！…！」

彼らにとっては恐怖の対象以外の何でも無い。

仲間を殺したのは、間違いなく目の前の少女だからだ。

何をしたのかは分からない。いきなり何の前触れもなく突然仲間が弾け飛んだ。

最初は何が起こっているのか理解出来なかった。

理性が勝っていたからだ。そんな状況に遭遇するなど有り得ないとどこかで考えていたから。

しかし、顔に飛び散ってきた血痕、こびりついた赤っぽい肉片。それを認識してしまった。

後の事は覚えていない。ただ本能のまま走り続けた。

それなのにもう一度、仲間を殺したあの人間の顔を直視してしまったら否応なく思い出してしまうのではないか。

「くそつたれがアアアアアアあああああああああ！  
」

吼える。

「何なんだよテメエは、いきなり殺しに来やがって！俺達がテメエに何をしたってんだ！！」

至極真つ当な意見だと言えよう。根本的な所はそこにある。彼等にはこの少女に命を狙われるのが、理解出来ない。

そもそもが顔すら見たことが無かった。

「えっ、何でかって？そうだなあ、何が良い？」

その返答を聞いた瞬間ゾツと男達の背筋に冷たいものが伝う。

有り得ない。見たくない。存在すら否定したくなる程の心の奥底からの嫌悪感。

そう、理由など無いのだ。考えて動いていない。ただ、偶々見かけた、だから殺した。それだけだ。

異質過ぎる。異常過ぎる。

この少女にとって人殺しは、人が呼吸をするに等しく自然な事。

それ以前に、殺しているという実感も無いのだ。

蟻を踏み潰す位にも捉えていない。

そんな彼女に理由を聞くのは、一般人に何故生きているのかと質問する程無駄な行動だ。

「ふざけんじゃねえぞクソ野郎がああああああ！！」

嫌悪の次には憤怒。

そんな訳が分からない、理由にすらなっていない事で自分達は殺されようとしている。

叫んだ男の手の上にゴウツ！と短い音と共に炎球が浮かび上がった。

この街で最もスタンダードな能力の1つだが、同時に攻撃的な能力でもあるパイロキネシス発火能力だ。

見れば、全ての人間が何かしらの能力を纏っている。

風が唸り、電光が閃き、空気が灼けた。

「俺達は全員能力者だ。やられるぐらいならこっちからぶっ殺してやる！！」

果たしてそれは正しい選択だったのだろうか。

「いいねえ、そう言うの嫌いじゃないよ。見た感じ全員レベル2（異能力者）からレベル3（強能力者）かあ、こりゃあやられるかも

お。  
」

棒読みな口調から察するに本当にそう思っているのかどうかは、誰にでも分かる事だろう。

「でもさあ、知ってるう？」

言い終わるのを待たずに一斉に攻撃を放つ。多少能力値は劣るといっても、1人はエリートと見なされるレベル<sup>3</sup>。他のレベル<sup>2</sup>も単純に数量で圧せば相当なものになる。

殺傷能力は十分にあるはずだ。

だが、

「――人の話は最後まで聞くもんだってば、先生に習わなかったあ？」

ここで彼らは最悪のルートを選んだことによりやく気付いた。

あのまま逃げつつげていれば、そして風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>が警備員の支部<sup>アンチスキル</sup>にでも保護してもらえば、或いは助かったかもしれない。

可能性は低いがそれでも0では無かった。

反撃とは必ず倒せると確定できてからでないとするべきものではない。  
い。

決定打にならなければ、ただ怒りを煽るだけだからである。

残念なことに彼らは自らの寿命を自らの手で縮めてしまった。

「――続けるよ。レベル3とレベル4の間には高い高い壁があるんだってさあ。ここから先は努力より才能が必要らしいけどねえ。」

「あははッ、どうしたの？そんな呆けた顔しちゃってさあ。君達の攻撃を受けて私が無傷でいられるのは単に私の方がレベルが上っただけでしょお？」

にこりと満面の笑みを浮かべる少女。笑みだけ見ると流石は美少女、絵になる。

しかし、その目に宿る光は別物だ。獣のようにギラギラとしている。常軌を逸している。

「うあ、ひい……ああ、ぎゃあああああああ！！」

連鎖する悲鳴。今度こそ崩れた。支えを無くし、逃げたいのに体が動かない。

「あらら、もう追い掛けっ子はお終い？つまらないなあ、いいや。もう飽きちゃったし、じゃあね」

何故か身を翻し、去ろうとする素振りを見せたと思っ たら本当にどこかへいつてしまった。

何から何まで理解不能な少女の行動。目的も不明瞭。気紛れで済まされるようなレベルではないが、もうどうでもいい。

ただただ助かった。その事実さえあればいい。

安堵の空気が一斉に場を満たした。

\* \* \*

立ち去った少女はクスクス笑いながら、夜道を歩いている。

「そろそろかな? - - カウントダウンを始めます。3、2、1」

そのまま指をあげ、軽く弾く。パチンと小気味良い音と共にズドンッ!と轟音が響いた。

「- - -どつかゝんってね。ふんふん、なかなかの火力だねえ。これなら充分じゃないかなあ。」

つい先程まで、追い掛けまわしていた男達がいた場所を丸ごと吹っ

飛ばして楽しそうにしている。

特に殺す理由も無かったが生かす理由も無かった。

要はその日のさじ加減。気分によって生死が決まる。

「ねえ霧原<sup>きりはら</sup>ちゃんはと思う？」

唐突に人名らしきものを口にする。すると、前方の空間が揺らめいて1人の女性が現れた。といってもこの少女と同年代か、1つ上かといった所であろうか？

「……流石ですね、いつからお気づきに？」

「ん？今だよ。なんかいい“匂い”がしたからさ、やっぱり当たりだったんだあ。」

「ああ、それは仕方ないです。“匂い”は消すことはできませんので。」

始終丁寧な言葉使いの彼女。名を霧原<sup>きりはら</sup>優花<sup>ゆうか</sup>と云う。

「あははっ！霧原ちゃんは相変わらず堅いねえ、そんなんじゃあ将来お嫁に行けないよお？」

「構いません、興味がありませんので。」

「冗談だつてばあ、怒らないでよ霧原ちゃん。」

「怒つてなどいません。」

「やっぱり怒つてるじゃん。ねえつてばあ、機嫌治してよ。」

その様子は普通の女の子のそれだ。

とてもたつた今、殺戮をこなしてきたとは思えない。

「ああもう、行きますよ、水無<sup>みずなし</sup>さん。」

「はいはい。」

水無と呼ばれた少女は霧原の後ろをついて行き、待機していたワゴン車に乗り込んだ。

そのままワゴン車は走り出す。

本来彼女たちの日常はこんなものでは無かった。『暗部』としての目的もかつては有ったのだ。

何故こうもねじ曲<sup>わが</sup>がつたのか。  
それは誰にも理解<sup>わか</sup>らない。

\* \* \*

「さあ、新しい任務だ。資料は行き渡ったか？」

それから少し後の『バランス』の隠れ家。

彼らは新たに行動を開始する。

「ファイルを見る。その女が水無翠刃。みずなし すいは『ユナイト』のリーダーだ。俺達の今回の任務は指揮系統を失い暴徒化しつつある『ユナイト』の拘束、もしくは抹殺。」

「だが、あくまで殺すのは最終手段だ。俺達は殺し屋じゃない。パワーバランスの調整、その目的を忘れるな。」

『バランス』メンバーが持っているのは数枚のファイルの束。それには『ユナイト』構成員の基本情報が記載されている。

それらを見て、月夜の表情が僅かに固まった。

「……おい、空。彼女達的能力……」

「ああ、厄介なものばかりだが特に一番警戒すべきは水無だろうな。」

「……物量で攻めて来るぞ。広範囲に影響が出る。何て危険な力を持つてるんだ。」

「また“彼ら”の力を借りる事になりそうだ。」

\* \* \*

「『バランス』かあ、なんかズルくらい優秀なのが揃ってるなあ。」

「行動目的が目的だけに、戦力もそれ相応なのでしょう。噂では“あの”第3位も加入したようですし。」

「あの『物質加速<sup>オーバーアクセラ</sup>』が？もう軍隊並みの戦力じゃん。」

ワゴン車の車内でノートパソコンの画面を見つめる水無翠刃と霧原優花。そこには『バランス』メンバーの詳細なデータが表示されていた。

真つ当な手段で手に入れたものではない。データベースにハッキングをかけて盗み出したのだ。

「他にも『監視者』と『調停人』も参入しているようですし、少々マズいかも知れませんね。」

「そうだねえ。あつ！見て見て霧原ちゃん。この戦辺空つて『久遠の終焉計画』の生き残りだつてえ。」

「……これは記載されている能力レベルは嘘だと思つた方が良いでしょう。あの計画の被験者ならレベル3に収まる筈がありません。」

ふむふむと水無は更に画面をスクロールさせて情報を読んで行く。その顔には焦りが無い。というより一切の危機意識がなかった。

手に入れた情報に一応驚嘆するものの余り気には留めていないようだ。寧ろ浮かんでいるのは微笑。恐らく無意識なのだろうが、それこそが水無の本質を表している。

つまり、あらゆる物事に楽しさを見いだす。例えば命の駆け引きでさえも娯楽とする。

ある意味では『闇』を最も顕著に体现しているのは彼女なのかも知れない。

一々恐れていたら『暗部』としてやっていけない。

「ねえ、霧原ちゃん。みんなを招集してくれないかなあ？」

「ッ！……解りました。」

メンバーを全て集める。それはこちらの戦力を整えるという事。

つまりは……宣戦布告

「あはっ！面白くなりそうだねえ。」

彼女は終始笑っていた。笑顔の片隅に歪みの片鱗をはっきりと見せつけながら。

はつきりと言っておく。確かに『バランス』は強力な組織だ。

しかし、だからといって何も『バランス』のみが強い訳ではない。

彼女達『ユナイト』は学園都市敵対勢力の殲滅を主な任務内容にしていた。

故に、『ユナイト』の全戦力も軍隊のそれに匹敵するだろう。

戦闘に特化した特殊行動部隊。それが彼女達だ。

今回こそが本当の『バランス』にとっての危機的状況になるかも知れない。

そしてこれこそが、詰まりやるかやられるか、喰うか喰われるかの駆け引きが彼ら或いは彼女達の日常であるのだ。

『闇』は水面下で同じ『闇』を喰い潰し、飲み下す。彼らは目的の遂行の為なら善性など必要としない。

そもそも善悪は存在すらしない。己の自己中心的な正義のみを信じ、そして動く。

そうやって、この街のサイクルは出来上がったのだ。

\* \* \*

「全く休む暇もありやしない。……まあだからこそ退屈しないけど。」

1人の少年は携帯に添付されたメールに目を通し、呟いた。  
それから身を翻して姿を消す。

「さて、と……またあいつは文句を言うだろうな。」

そう1人ごちながら、メールを送る為にディスプレイを変換する。  
送る先の名は茨木来入。

着々と場は整いつつあった。

**dark side of universe (前書き)**

非難、お叱り受ける覚悟は出来てます。

## dark side of universe

カツ、カツ、カツ。

昼下がりの街並みに轟く雑踏。その人間の群れの中で、足音が聞こえる。

それはありふれた騒音の1種類。

その音を立てているのは、1人の少年だった。どこをとっても普通としかいいようがない。

服装も黒っぽいパーカーに、深い色のジーンズ。街中で肩がぶつかれば、すいませんでしたといってすれ違い、その数分後には顔も忘れていたろうという極めて特徴が薄い少年。

寧ろ余りにも何も無さ過ぎて違和感を感じるくらいだ。

だが、何気ないその動き。一挙手一投足が全て戦闘に適応されている事が分かるものはいるまい。

記憶に残らないのも人の意識が向かないいわば死角を選んで、移動しているからだ。

ブブブと彼のポケットの携帯が振動した。それを開いて添付されていたファイルを眺め、一息ついた。

次の瞬間、少年が纏う空気が一気に変わる。

「召集か…やつとだな。」

圧倒的で、それでいて静かな威圧感。

例えるなら鍛えられた刀剣のような洗練されたその雰囲気。

これが本来の彼だ。鋭く冷たい攻撃性。苛烈で狂暴な破壊衝動。

この時、この少年のみならず学園都市のあらゆる場所で数人の少年少女が同じ文面を受け取っていた。

彼らこそ『ユナイト』。今この街で最も危険な組織の構成員達だ。

彼らはこの街に、牙を剥く。失うものはもう存在しない。

力の暴発。

それぞれが持つ巨大な武器（ぶき）を今度は自らの為に振るう。

『ユナイト』は暴徒化しつつあると言われているが、彼らは進むべき道を見失った訳では無い。新たに見つけたのだ。

ただ、その進み方が常軌を逸しているという事は否めないが……。自分達が何をしているのかは理解している。しかし、その結果が何を生み出すのかを考慮していない。

悲劇もそれに伴う犠牲も、必ず生まれるだろう事は分かっている。分かっているが、考慮はしない。

目的には何かしら犠牲がいる。ノーリスクで結果は出ない。

それは絶対の論理であり、昔も今もこれからも決して変わる事はないだろう。

理解した上で、次の段階へ進んでいるのだ。防げるものなら防いで

みるがいい。敵は叩き潰す、障害はなぎ払う。

今更止められない、止まる気もない。新たな闇が動き始めた。

\* \* \*

「やれやれ、また厄介な事になったな。」

『バランス』の本拠地で、威剣天聖はばやくようにそう呟く。

「すみません、また助力をお願いします。」

空が頭を下げながら言う。

「嫌、願うも何もこれが仕事だから構わないけどさ。どうせ言われずとも上からお達しがあったんだろっから。」

「そろそろアイツも来るころだろうし、なかなか充実したメンバーになる……」

言葉が途中で止まった。周りが何事かと疑問に思った直後に遠くから爆音が響く。

「……アイツにパスワード教えるの忘れてた。」

ドンッ！、ドゴン！と断続的に聞こえる音は段々と近付いて

バガア！！

一際大きい音と共に部屋の扉が、粉々に砕ける。その向こう側からは

「ああ、また呼び出しか？」

普通じゃない方法を用いた人物が、普通に入ってきた。

「あーあ、せっかくのセキュリティシステムをぶち壊しやがって  
もつと普通にこれないのかお前は？」

「うるさいな。お前がパスワードを教えなかったせいで一回死にか  
けたぞ。」

「そりゃ悪かったな。でも死んでないから良いだろ来人？」  
「そう言う問題じゃないんだが……。」

文句を言いながらも、その体には傷どころか1つの汚れもない。

最新鋭のセキュリティシステムをいとも簡単に無力化できるその  
能力は『ブレイクアッパー物質分解』。

あらゆる物理攻撃は彼の体に到達する事く、無に帰る。

あらゆる物体は彼が触れただけで塵になる。

正に攻防一体の能力者。

茨木<sup>いばぎくも</sup>来<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>。彼の進む道には如何なる物も障害にはなりえない。

彼の異名は調停人<sup>ネゴシエーター</sup>、またはフリーエージェント。決まった組織には属さず、依頼が来た時のみ行動しそして必ず結果を残す。

その名は裏世界に置いては殺し名に等しい。狙われたらその時点でジエンド。抵抗などは愚の骨頂。したとしても意味はない。

彼の純粋な戦闘能力を総合すれば、単独で戦争に介入出来るレベルだ。

動物ですら本能で危機が分かる程なのだから増してや人間には知能がある。

動く戦略兵器のような怪物に、立ち向かえる人間が存在する筈がない。

敵にすれば厄介極まりないが、味方にすればこれほど有能な人材もそうはいないだろう。

再び彼らは結集する。新たな『闇』を駆逐する為に。

今、この瞬間から戦場だ。持てる能力、戦力は出し惜しめない。全力で叩き潰す。

風宮月夜の『<sup>オーバー</sup>物質加速<sup>アクセラ</sup>』

戦辺空の『<sup>シュートプロミネンス</sup>炸裂紅炎』

桐谷ユウの『移動切斷』  
ムーヴカッティング

紫藤暁の『物質透過』  
ブレイクスルー

鳴神涼の『暴風武装』  
アームドストーム

北条鈴音の『空力加熱』  
エアリアルヒーター

威剣天聖の『概念付加』  
ジョイントエフェクション

茨木来人の『物質分解』  
ブレイクアッパー

各々が有するその“力”。なまじ強力過ぎる故に使用する方向を間違えてはならない。

正しく使わなければそれは悲劇を生み、惨劇を生みだす只の凶器へと成り下がってしまう。

正義の為に使用するなど陳腐な事を言うわけではないが、それでもある一定の越えてはならない線は確立するべきだ。それすら守れないというのなら力には意味も価値もない。

核となる意志が存在しないのなら、ただ“そこ”にあるだけの宙ぶらりんで不安定な存在でしかない。

見定めて、見極めて。力を持つ者には相応の責任もある。基準が善であれ悪であれ、それは同一のルールだ。

気分次第で思うがままに振るえば、いづれは自らの身を滅ぼす。

「人員も戦力も整った。俺達の目的はあくまでもパワーバランスを保つこと。ターゲットは捕縛、拘束が第一だ。」

沈黙の空間内で、空の声は良く響いた。

「だが、最終的な判断は個々人に任せる。自分の命が危険ならば迷わず殺せ。容赦も加減も同情も必要ない。ただ殺すことを誇りには思わない。そうやってしまえばそれは人間の屑だ。」

その言葉は戒め。命を奪う事は大罪だ。それを甘いという者もいるだろう。

だが、『バランス』はそういう組織だ。人を躊躇わずに殺害出来るのが優秀だというのなら、自分達は劣等で良い。

これは甘さではなく覚悟だ。命の賭け引きのステージへ踏み出す為の覚悟。

それが出来た者だけがこの世界へ一步を踏み出せる。

「行くぞ。」

短く、且つ明確に。その一言でミッションは始まる。

暗くて深くて澱んだ『闇』の中で、定めたラインの上を彼らは走り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9105n/>

---

とある少年の破砕加速 [ Breaker sonic ]

2011年11月12日16時35分発行